

フィロロギカ——古典文献学のために

XII

目次

「友愛」が発すべき言葉	I
——Platonis <i>Crito</i> 43 B3-6——	
安西真	
Horatius, <i>Carm.</i> 2.16 Otium divos	15
大芝芳弘	
Shorter Notes	
プリアモスの説得の試み	47
—— <i>Iliad</i> 22.56-76——	
平野智晴	
プラトン『ポリテイア』I.334 D-E のポレマルコス論駁	53
納富信留	
「母がおじからきょうだいを」(カトゥッルス III 番 4 行)	63
友井太郎	

2017
古典文献学研究会
(フィロロギカ編集委員会)

(編集責任)

『フィロロギカ』編集委員会

事務局長 葛西康德

名誉編集委員 久保正彰、Elizabeth CRAIK、安西眞

編集委員 大芝芳弘、高橋宏幸、佐野好則、
納富信留、日向太郎、Martin CIESKO

フィロロギカ 第XII号



「友愛」が発すべき言葉

—Platonis *Crito* 43 B3–6—

安西眞

I

以下に引用するのは、Pl. *Crito* の幕開けの一部であり、長きにわたって、つまり、我々ヨーロッパ・ルネサンス以降の人間たちが、自分たち自身の古典としてギリシア文献を読み始めて以来ずっと、我々の先達によっては正しい理解を受けてこなかったと筆者が考えている部分である。問題の把握を容易にする為に、少し拡大して引用し、また、代表的と思われるいくつかの近代語訳も付した。写本伝承上の問題は校訂本には記されていない。我々の理解という側面で、大きな、ほぼ決定的な、問題があったことを考えれば、写本伝承の上で問題が表面化していないという事実には、やや不思議な感もある、というコメントを I 点付して、以後、ここでは写本伝承上の問題を議論の対象にしない。

43b Σω. εἴτα πῶς οὐκ εὐθὺς ἐπήγειράς με, ἀλλὰ σιγῇ παρακάθῃσαι;

Κρ. οὐ μὰ τὸν Δία, ὦ Σώκρατες, οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον ἐν τοσαύτῃ τε ἀγρυπνίᾳ καὶ λύπῃ εἶναι, ἀλλὰ καὶ σοῦ πάλαι

* この論考は 2016 年度の「フィロロギカ」研究集会（成城大学）で読まれた原稿に加筆・修正を加えたものである。口頭発表に際して、ご批評を下された参加者諸氏に感謝をここに記す。この原稿の査読の労をとって下さった 2 氏の査読者には、特にお礼を申し上げたい。中でも、査読者のおひとりは、いちおう本稿を掲載可と認めてくださった上で、ただ、自分には筆者の解決ではなくて別の解決が正しいように見える、とご自分の読み方を提示され、筆者に検討するように促して下さった点、大きな感謝を捧げたい。その無名査読者は、ἀγρυπνία は S. のではなく Cr. のそれだと読むべきだと言う。確かに、当該の文の置かれた文脈には、Cr. が眠ることができないまま、牢に来たという事実を推定できるてがかりが残されている。では、そのてがかりが我々の直面している場面で Cr. の言っている ἀγρυπνία が指示しているものなのか。つまりその読み方のほうが、ここでの、これから筆者が説明する予定の読み方より正しい理解と言えるか、という、それは別問題、とここでは言うべきだろう。τοσαύτηや οὐ... οὐδ' ἂν を私たちのギリシア語理解の座りのよい場所に置けるかどうか、また、この文脈で Cr. の ἀγρυπνία に話題を振るのが書き手の意図することかどうか、さらに、Pl. がこの対話篇を創作するにあたって何を目論んでいるか、ということが議論すべきことにならざるを得ない。たぶんそれらは、筆者が最初意図したことがらとは本質的にはつながりながらも、規模も性質も全く異なる（恐らくは筆者の能力の範囲を越える）大きな論文を要するかもしれない問題であろう。それで、今回は、査読者の一人が与えてくれた任務の意味はいちおう了解した上で、この文脈での ἀγρυπνία の意味と筆者なりの最初の解決を明らかにし、その査読者の主張する読み方の問題点を簡単に指摘する形に議論を限定したい。

θαυμάζω αισθανόμενος ὡς ἡδέως καθεύδεις· καὶ ἐπίτηδές
σε οὐκ ἤγειρον ἵνα ὡς ἡδιστα διάγῃς.

S. それでいて、どうしてすぐぼくを起こさなかったのだ、黙ってそばに坐っていたりして。 Cr. とんでもない、ソクラテス、ぼくだって、きみの身になったとしたら、こんな苦しみのなかを、眠らずにいたいなどとは思わなかっただろう。そればかりでなく、きみがいかにも気持ちよげに眠っているのを認めて、さっきから感心していたのだ。そしてわざと、きみを起こさずにいたのだ。できるだけ気持ちよくすごしてもらおうと思ってね。

(田中美知太郎)

S. Then why did you not wake me at once, instead of sitting by me in silence? Cr. No, no, by Zeus, Socrates, I only wish I myself were not so sleepless and sorrowful. But I have been wondering at you for some time, seeing how sweetly you sleep; and I purposely refrained from waking you, that you might pass the time as pleasantly as possible.

(H. N. Fowler)

S. Then why did you not wake me right away but sit there in silence? Cr. By Zeus no, Socrates. I would not myself want to be in distress and awake so long. I have been surprised to see you so peacefully asleep. It was on purpose that I did not wake you, so that you should spend your time most agreeably. (G. M. A. Grube)

2

上に引用したギリシア語原文とそれに対するいくつかの翻訳は、現段階での、この部分に対する古典学徒たちの理解の縮図を示していると考えられることができるが、同時に共通の問題を抱えていると私は考えている。それらは、1. οὐδ' で始まる文が上の引用部でどのような文脈上の役割をはたしているかを、明確な形ではまったく示せていない。2. τοσαύτη「それほどの」という指示語の指している対象が何であるのか*1、どのような機能をこの文で持っているのか、何を共通の基礎指示対象として、Cr. は S. との言語交流をここで持と

*1 引用ギリシア語中の τοσαύτη について中立的な理解をすれば、ἀγρυπνία καὶ λύπη に付された限定的な、属性的な指示語で、ἀγρυπνία καὶ λύπη の性質・種別を問題にしている、と考えるべきであろう。その点に関しては、田中訳が最も妥当と思える。Fowler 訳は、ἀγρυπνία καὶ λύπη という症状の程度に、Grube 訳は症状の持続に絞ってしまっている。もちろん、ギリシア語と近代諸語の隔絶を考えれば、ぴったりの訳は難しいことは筆者も承知しているから、この検討は訳の良否の問題を論じているのではない。あくまでも、だれのどのような状態を指して、ἐν τοσαύτῃ τε ἀγρυπνία καὶ λύπη εἶναι を理解しているかを問題とした場合どう評価すべきかを論じている。田中訳は、「だれの」の問題は別として、τοσαύτη の統語論的機能の理解に関しては最も評価できる。

うとしているのか、要するに談話分析論的によくわからない訳になっている。この2点である。よくわからない訳というより、明らかに間違っているらしく筆者には見える、と言いたい。ただ、後者の点に関して、田中訳はこれからの小さな探求にとって重要な問題を提供しているように思われる。

「こんな苦しみのなかを、眠らずにいたい」という訳は、はっきりとした問題を抱えている。τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη において τοσαύτη は τε ... καί で結び合わされた両項にかかる、と理解するのが常識的なギリシア語の読み方であろう*2。しかし彼はそう理解しようとしていない。簡単に言えば、ἀγρυπνία と λύπη を順を逆にし、τοσαύτη τε λύπη καὶ (τῇ) ἀγρυπνία という形で、しかも ἀγρυπνία には τοσαύτη がかからない形で訳出しているのだ。

ただ、これは単なる不注意ではないと思う。引用した部分の最後の文で明らかになっているように、Cr. の前で、数時間ほど、S. は熟睡の状態であったのだ。そのような状態を見てきた Cr. には、S. の陥っている状態をもとにして τοσαύτη ἀγρυπνία と言うことはできない。このことが（恐らくは意図的に、かつ断り書きなしに、）原文を変更したとしか言いようのない田中の訳出に繋がった、と私は推測する。訳出の態度としてはおおいに問題はあるが、たぶん一度も正確な理解をされたことがなかった箇所への理解へと我々が近付くためには重要な一歩であるかもしれない、という風に私は評価したい。

τοσαύτη という指示語を、話者である Cr. は、彼自身と S. との共通理解として、共有できると信じて指示語として使用している。指示語である以上、Cr. の考えに寄り添うならば、S. にも容易にその指示可能であるものへの指示を了解できるという前提が彼にはあったに違いないと、我々は考えるべきだ。だからこそ、逆に、ひとは容易に τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη を、死刑の執行を前にしての S. の精神的状態に結びつけるべきだと信じて読み解こうとしてきたのだろう。この事実がふたりの精神に、どんな形であれ、のしかかっていない筈はないからだ。しかし、この、当然そうあってしかるべきとも見える前提は我々の目の文字列が知らせている統語論的・語彙論的あるいは談話分析論的事態とは合致しない。

λύπη を、S. が置かれた死刑実行間近という状況から生じる「精神的な苦痛」と名付けて、その上で Cr. が発言しているとする。この条件の限りでは、この指示は可能である。どういう性質のものであれ、それは存在し（ἐν τῇ νῦν παρεστῶσῃ συμφορᾷ B8）、それに S. は耐えている（ὡς ῥαδίως αὐτὴν καὶ πρῶως φέρεις B8-9）と Cr. は見ているのだから*3。た

*2 Denniston, 516.

*3 実際には、S. は耐えているのではなく、もうその不安や迷いを克服し終えている、と理解するのが正し

だし、Cr. にとっては、恐らくは、理解不能な形で、ではあるが。しかし、一方の *ἀγρυπνία* は、現実には、これが言うところの精神的圧迫から生じる「不眠状態」であれ、何か他の理由によるものであれ、S. と共にあるものとしては目の前には存在しない。それどころか、S. がそれを蒙っていないことを Cr. は「知っている」(*θαυμάζω αἰσθανόμενος ὡς ἡδέως καθεύδεις*)。ひとつは、Cr. があると信じ、そして実際に、S. にあると知覚したものであり(*λύπη*)、ひとつは、少なくとも彼が訪れたこの早朝には、なかったと「知っている」ものである(*ἀγρυπνία*)。このふたつのものを、*τε ... καί* によって I 組の概念としてまとめた上で Cr. が発言していると想定することは難しい。ましてそれらを *τοσαύτη* という指示語で一括して Cr. が指示したと信じることは筆者にはできない。

さらには、*τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη* が、死刑の執行を前にしての S. の精神的状態と直結すると信じて読み解こうとするのは*4、つまりは *τοσαύτη* を *σῆ* にある程度近付けて読もうとするのは、「友愛」という言葉の前提を無視することになる、とも筆者には思える。なぜなら、この真ん中の *οὐδ' ἂν* に始まる文には、それをどのような非現実的な響きを内包した文 (*οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον*) という表現形態でくるんで読み、あるいは翻訳しようとしても、「君の苦境にぼくは居たくない」という響きをどのみち持たざるを得ないという結果になる。「友よ、君の今在る状態には、ぼくは、可能であるならばだが、なりたくないのだ」という響きを払拭することはできない。この文は、どのような粉飾を凝らした理解で対峙するにせよ、私たちが *ἀγρυπνία καὶ λύπη* を S. の現状と直結させようとする限りは、ほんとうの友達の発する言葉には、なりにくいのだ。

τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη と、死刑の執行を前にしての S. の精神的状態とを結びつけることが、どんなに誘惑に満ちたものであっても、また、巨大かつ複雑な各種社会集団に圧迫されて「苦悩と不眠」を強いられている近代の先進国に住まう私どもにとっては、ほとんど避けることのできない「読みの回路」ではあっても、しかし、にもかかわらず、その直接の結びつきを疑い、一旦解くこと、これが、我々に要求されていることのように私には思える。

3

οὐδ' ἂν αὐτὸς と 2 番目の「文」が始まることも、その「我々に要求されている」道をとることを勧めているように思える。けして *οὐδ' ἂν ἐγὼ ...* ではないのだ。後者の方がより

い。注 5 参照。

*4 正確には、Cr. が忖度する限りでの、という限定をつけるべきであろうが。

σύを（2次的にではあれ）示唆する力はおおきい。なぜなら、「私は」という言葉は、「あなたは」なしには存在できない言葉であるからだ。さらに言えば、ἀγρυπνία καὶ λύπηにつけられた指示詞が τοσαύτηであって、けして σῆ でないことも今言ったような種類の脱出口を探てみることを勧めているかに見える。σῆであれば、ἀγρυπνία καὶ λύπηを考えるに際して、それを S. が陥っているに違いない、あるいは陥っているかもしれないと Cr. が S. の心の中に「付度しているかもしれない」、つらい心的状況と結びつけて理解する以外には道はないだろうからである*5。

さて、そのような「我々に要求されている」道を探るにあたって、まず第 I に、Burnet (ad 43 B3) の補いの勧めが正しいものであることを確認しておこう。彼は οὐ μὰ τὸν Δία の後ろに、ἐπήγειρά σε を補って読め、と我々に勧めている。彼の勧める補填に、異論がある古典学者はどこにも居ないだろうと私は思う。省略されたされた言葉へこういう形の補填を確認しておくことは、なぜ ἐγώ ではなく αὐτός が使われているのかということ了我々が考える際、意味を持つだろうと予告しておこう。

ここでホメーロスに見られる、友が友を明け方、「無理に」眠りから起こす情景として容易に思い浮かぶ一節を見てみよう*6：

*5 このことは、査読者のひとりの指摘する ἀγρυπνία καὶ λύπη を、Cr. のそれだと読め、という勧めにまっすぐには従わないという本稿の態度にもつながる。確かに ἀγρυπνία καὶ λύπη は S. にはなくとも、Cr. にはある（あるいはあっただろう）。しかし、その Cr. にはあったであろう ἀγρυπνία を指示するためなら、ἀγρυπνία καὶ λύπη につく限定詞は、ἐμῇ であったほうが簡潔な表現であったであろう。また、確かに、引用文までの二人のやり取りの言葉の裏を推定すれば、Cr. は ἀγρυπνία καὶ λύπη を症状として持っていたらしいとは確かに思えるが、その症状は引用文までの文脈にも、それ以降の文脈にも、文脈の表面に関する限り直截な言及を受けていない（老人が死を恐れるのは滑稽だという S. の主張 (43 B11-2) に対しての、それは普通の老人の反応ではない、という Cr. の反論 (43 C1-3) にも、Cr. (つまり普通の老人) の不安と不眠は当然含意されているが、この不安と不眠にも、あいかわらず Cr. のものだという直接の言及はない）。従って、Cr. の不安と不眠は、文脈の背後に読み取り可能なことからではあっても、指示語 (τοσαύτη) の指示対象となるにはやや不適切である。この作品全体の構想から言ってもここで Cr. の不眠に光が当てられるのは不適切である。逆に S. が現在不安や迷いや恐怖による不眠と無縁だという事実（これは今問題にしている文の直後に明らかにされる）は、作品全体の構想の為に光を当てられる必要のある言及である。擬人化されたアテーナイ法精神による説得によって、それを受ける側の、Cr. の誘いに乗った場合の架空の S. (架空の対話の話し相手としての S.) が完膚なきまでにたたき潰されてされてしまう。これがこの短い作品が持っている主要な構想であるが、S. が不安や迷い（不眠の原因）を、驚くべきことに既に克服してしまっている、という事実は、不安や迷いのはるかに先にある場所から S. が架空の対話を Cr. に聞かせるというこの全体構想にとって、光を当てる必要のある要素ではあるが、Cr. が現実の不眠を抱えているという事実は、構想の冒頭を構築するものとしては、光を当てる必要のない要素である。せいぜい、冒頭の 2 人物のやりとりにある種のリアリティーを与える為に劇作家としての Pl. が当然配慮していなくてはならない要素でしかない。問題にしているのが非現実文 (οὐδὲ ἦθελον ἂν εἶναι) であるがゆえに、筆者の記述はややくしく聞こえる可能性があるが、ご容赦をお願いする。

*6 この前後の文脈では ἀγρυπνία の語は使われていない。それは、この語がギリシア語の中に成立した時期とも関わるだろう（本稿内でなされる Chantraine の語源辞典への言及を参照せよ）。しかし、引用する例

ἡ μὲν ἄρ' ὥς εἰποῦς' ἀπέβη πρὸς μακρὸν Ὀλυμπον,
 αὐτὰρ ὁ Νεστορίδην ἐξ ἡδέος ὕπνου ἔγειρεν
 λὰξ ποδὶ κινήσας, καὶ μιν πρὸς μῦθον ἔειπεν·
 “ἔγρεο, Νεστορίδη Πεισίστρατε, μώνυχας ἵππους
 ζεύξον ὑφ' ἄρματ' ἄγων, ὅφρα πρήσσωμεν ὁδοῖο.”

Od. 15.43-7

さて彼女は以上の言葉を告げて後、オリュンポスの高嶺に向けて去った。

片や、彼*7の方は、ネストールの子を甘い眠りから叩き起こそうとして、
 足で彼の体を踏んづけて揺すった。そしてこう言った。

「起きてくれ、ネストールの子、ペイシストラトス。ひとつひづめの馬どもを
 軛の下へと結びつけてくれ。出立するためだ。」

オデュッセウスの消息を求めて、ネストールとメネラーオスのもとへテーレマコスを送り出していた女神アテーナーが、父オデュッセウスのイタケー王権奪還に息子を立ち合わせるために、呼び返しの命令を伝えた、その直後の場面である。テーレマコスは、一緒にメネラーオスのもとに滞在していたネストールの子ペイシストラトスを「叩き起こして」帰還の準備を急がせる。

ἐπεγείρω という動詞は、誰かが誰かに対して覚醒状態をもたらすような、いづれかそれをもたらす側に決然たる覚悟の必要な（つまりは、いづれか強引な）行為を言い表す動詞のように見える。上の例には ἐπι- はついてはいないが、その強引さ・攻撃性がわかりやすい（λὰξ ποδὶ κινήσας）。古代ギリシア人が、眠っている者を ἐπεγείρω するとは、つまりこういう情景を意味し得た。また、この動詞の比喩的な用法（LSJ s.v. ἐπεγείρω II, πόλεμον εὐδοντ' ἐπεγείρει, Sol. 4.19; δεινὸν μὲν τὸ πάλαϊ κείμενον ἤδη κακόν, ὦ ξείν', ἐπεγείρειν, S. OC 510; ὅσον ἐσμὸν λόγων ἐπεγείρετε, Pl. R. 450 B）も十分にこの間の事情（ある種の攻撃性）を伝えている。このことは、Cr. の最初の言葉を、「（あなたを叩き起こすなんて）とんでもない（οὐ μὰ τὸν Δία）。」と理解することを正当化するだろうし、ἐπήγειρά σε という補いを頭に入れて読むことの正しさを教える。S. の眠りの穏やかさ（ἡδέως καθεύδεις）が、あと 1 回かせいぜい 2 回しか、S. には許されていない、と Cr. は知っている。そのわずかな幸せの可能性しか友には許されていない、と知っている自分と、S. の問いに含まれていた ἐπεγείρω という言葉の持つ「乱暴なことをする」という響きが全く調和しないことから、極めて強い調子の否定語がとりあえず必要とされたと読むことができる。

は、私の知る限りのギリシア語文献の中で、我々が現在問題にしている場面と最も近い「睡眠と非・睡眠」を巡る状況であるように思える。

*7 = テーレマコス。

次にもっと大事なことは、引用例中の下線部が、*τοσαύτη τε ἀγρυπνία καὶ λύπη* の持つ意味を理解する大きな助けになるように思えることだ。明け方の眠りを楽しんでいるペイシストラトスを「叩き起こす」ことを口承詩人は「甘い眠り（*ἡδὺς ὕπνος*）から目覚めさせる（*ἐγείρειν*）」と歌っている：

まず、「*ἡδὺς ὕπνος*」という組み合わせのホメーロスでの使われ方を簡単にみてみよう：

γλυκὺς ὕπνος (*Il.* 1.610); *νήδυμος ὕπνος* (*Il.* 2.2, *h. Ven.* 171); *ὕπνον* || *ἡδύν* (*Od.* 1.364–5)

母音の右肩に付した上付き数字は Dactylic Hexametre の Princeps の位置を知らせている。Formula 的な匂いもなくはないが、*ἡδέος ὕπνου* は、明らかにその域には達していない、とわかる。だから、LSJ の記載例を挙げるにとどめる。Formula 的な匂いは、言うまでもなく「眠りは甘美」という形容詞と名詞の組み合わせが一般的真理の域に達している事実の証左だ。

次に「*λύπη*」である。現代人は *le spleen* 「憂鬱」などという近代の大都市の本質を言い当てる著名な名詞を思い浮かべ（ボードレール）、この語をその響きの中で捉える習慣に、無意識にではあろうが、陥っているように思える。だが、それとは相当に異なる響きを古代ギリシア語は持っていたことが次の例示から明らかになるだろう。*λύπη* は非常に多くの場合において、*ἡδονή* との対比的組み合わせで意識されていたのだ。つまり「快」の反対語として意識されていたと言ってよい。これについては Ast の *Lexicon Platonicum**8 に頼ることにしよう：

1. οὐκ ἐναντίον φαμέν *λύπην ἡδονῇ*, *R.* 583 C
2. *λύπην ... ἡδονῆς* (παύλαν εἶναι), *R.* 584 B
3. *λύπαί τε καὶ ἡδοαί*, *Lg.* 644 C, *Phlb.* 37 C
4. μεθ' *ἡδονῶν ἢ λυπῶν*, *Smp.* 207 E, *Lg.* 862 D
5. *ἐν τε λύπαις ὄντα ... καὶ ἐν ἡδοαῖς*, *R.* 429 C
6. *ἡδονάς τε καὶ λύπας*, *Prt.* 354 C

上に掲げた例は、Pl. による *λύπη* を巡る全用例のほぼ半分を占めている。端的に言えば、Pl. にとって、*λύπη* とは、ほぼ *ἡδονή* 「快・甘美」の反意語たる名詞だったということだ。時間があれば Ast の *λυπηρός* の項目も見てみるがいい。

もうひとつ、「*ἀγρυπνος*」について、簡単な言語的事実を掲げることにしよう。今度は P.

*8 Ast, II, 261.

Chantraine によるギリシア語語源辞典の力を借りる：

«*ἄγρυπνος*»: *ἀγρός* + *ὕπνος*: « qui dort, passe la nuit dehors, qui veille » (Hp., Pl., ionien-attique)

Chantraine の使用状況についてのコメントにあるように、それほど古典期でも（～前 4 世紀半ば）使用が頻繁だった語ではないことは明らかであるから、合成語の本来の合成事情を我々の用例が保っている可能性は高い。実際、「野（*ἀγρός*）」の「眠り（*ὕπνος*）」という意味は合成された後の形にも間違いようがなく残されている。安全な我が家の寝室ではなく、野に寝ることが危険で不快なものであることを、この合成語は紀元前 4 世紀の初頭にも響かせていたに違いない。*ἄγρυπνος* とは、野獣や殺人者が満ちているかも知れない野外の睡眠の持つ、「甘美」からは遠い、「眠りたいが眠れない」不快な状態を言う形容詞であり、*ἀγρυπνία* とは、そのような睡眠に関する状態を表現する名詞だということだ。大都会の発する巨大な社会的圧力の下でうめく近代人の苦悩の代名詞とも言える「不眠」とは必ずしも直結しない。*ἀγρυπνία καὶ λύπη* とは、先に登場したネストールの子のペイシストラトスが、オデュッセウスの子のテーレマコスに明け方寝ているところを乱暴に起こされた時に感じたに違いない「眠りたいが眠れない」不快な状態のような*9 ものを引き起こすのではないかと危惧した Cr. の発言ではないか、といちおう結論しておこう。明らかに自分が *ἐπήγειρά* σε したならば、S. にそのような不快を与えることになるのでは、という脈絡が、取り上げた 3 文の前半からは浮かび上がってくる。

ただ、ギリシア語語源辞典と叙事詩の一節のみから、私たちの探求のキーワードとも言える *ἀγρυπνία* を理解するのはあまりにも危険だとも思えるので、確認をも兼ねて、辞書などが参照を促しているいくつかの *ἀγρυπνία* 用例を検討しておこう：

1. *ἀγρυπνίας* δὲ καὶ τὸν ἄλλον πόνον τίτθαις τε καὶ τροφοῖς παραδώσουσιν 「寝ずの番その他の労苦を乳母や養育係に割り当てるだろう」 (Pl. R. 460 D)。
2. *κομφοτέρας* δὴ τινος, ἦν δ' ἐγώ, *ἀσκήσεως* δεῖ τοῖς *πολεμικοῖς ἀθληταῖς*, οὓς γε ὥσπερ *κύνας ἀγρύπνους* τε ἀνάγκη εἶναι καὶ ὅτι μάλιστα ὁξὺ ὄραν καὶ ἀκούειν 「より手の込んだトレーニングがこれら戦の競技者たちには、だから必要になってくるだろう。この者たちには獵犬のごとくに、夜を徹しての任務につかねばならないし、目や耳

*9 たたき起こされたペイシストラトスが、*λυπηρὰ ἀγρυπνίῃ* の状態にあったとは叙事詩は歌っていない。「死すべき者ども」の経験する心的状態を表現する語彙が未だ発達していなかったのでは、とも想像してよいであろうか。ただ、「友」のこの緊急かつ乱暴な行為に対して、ペイシストラトスは依頼・命令を拒否してみせる。もちろん、拒否にはもつともらしい理由がつけられている。もつともらしいが、しかし、その拒否にはむしろ、ペイシストラトスが感じた *λυπηρὰ ἀγρυπνίῃ* が込められているのかもしれない。

の力に関しては、考えられる限り最も高度の能力を持たねばならないからね」(Pl. R. 404 A)。

3. τοὺς ἄλλους ἀποκτεινῶσαν (sc. ἀδικίαν), εἴπερ οἶόν τε, τὸν δ' ἔχοντα καὶ μάλα ζωτικὸν παρέχουσιν, καὶ πρὸς γ' ἐτι τῷ ζωτικῷ ἄγρυπνον· 「(不正は) 他者を、いやしくもそれが可能であるならば、殺すし、その上、不正を犯す者をも、極めて生命力に満ちた者しておいて、そのうえその者を、夜っぴて目を見開いている状態にするものなのだ」(Pl. R. 610 E)。
4. οἱ δὲ στρεβλοῦντες καὶ βιώμενοι τὸν πόδα κακὸν μέζον ἐργάζοντο. ἐπ' ἑπτὰ μὲν δὴ ἡμέρας καὶ ἑπτὰ νύκτας ὑπὸ τοῦ παρεόντος κακοῦ ὁ Δαρεῖος ἄγρυπνίῃσι εἶχετο. 「この医師たちはダーレイオスの足首を乱暴にねじってより大きな痛みを与えてしまった。それで、彼は、7 昼夜にわたって、襲ってくる痛みで眠れずじまい、という仕儀となった」(Hdt. 3.129.2-3)。
5. ἀλλ' ἔστιν ὑπ' ἐμοῦ πρᾶγμ' ἀνεζητημένον | πολλαῖσί τ' ἄγρυπνίαισιν ἐρριπτασμένον 「(そんなのではなくて) 私の頭が、数多くの夜を寝ないままに、追求し、小突き回したことになります」(Ar. Lys. 26-7)。
6. ἀλλ' ἦλθεν αὐτῷ Ζηνὸς ἄγρυπνον βέλος, | καταιβάτης κεραυνὸς ἐκπνέων φλόγα, 「だが彼を、ゼウスの眠ることなき矢が襲った。空からの火を吐く雷が」(Aes. PV 360-1)。

6 の ἄγρυπνον βέλος がこの語彙の古典期的（用例は前 5 世紀半ば以降に集中する）意味を知るには難しい例かもしれない。あくまでも推定ではあるが、たぶん、ゼウスの権力の中樞（あるいは王宮）を守る護衛兵としての雷の擬人化という詩的過程がここで働いている。目を凝らして敵を見張り、かつ敵に襲いかかる見張り番・護衛兵として雷を表現する擬人化である。語源辞典と叙事詩の一場面からなされた本稿筆者による推定は那样的外れではなかった。ἀγρυπνία とは、単に眠っていない、という事態を言うのではなく、眠る（甘美な眠りを享受できる）べき時にその楽しみを味わえる可能性を奪われている状態を基本的には意味している。眠りが取り上げられる原因は、多くは、外からの働きかけ、ないしは命令 (1, 2, 4 と恐らくは 6) であり、奪われる側の精神的・肉体的原因による例は多くはない (5)。3 も、不正によって支配されている本人にとっては自発的な ἀγρυπνία と見えているかもしれないが、実は彼にとりついた不正が命令しているにすぎない例といえるだろう。そのように見えるように文は構成されている。

たぶん、上の引用からの結論は、Cr. の言っている ἀγρυπνία とは、迫り来る死刑の実行を前にしての惑乱からある人間が眠りを奪われてしまっている事態である、と「近代的に」結論するのは、この語の用法の当然の帰結であるとみなすことはできない、というこ

とがひとつ。また、本稿が今なしつつある追求に即して言えば、「甘美な眠りを享受できているべき時間帯に外的な妨害（この場合 Cr. による「たたき起し」）が入って眠りを奪われる状態」を言う語であるとするのが妥当な結論ということになるだろう。

4

以上で、本稿が課題とした 3 つの文のうち、最も大きな問題を内包していると思われる 2 番目の文の核心的な問題については、満足すべき理解を得るための基礎が獲得されたように、少なくとも本稿筆者は感じる。Cr. は、S. が今置かれているであろう精神的状況（避けることのできない死がせまってくる）を想像して、そのような状態に、自分は居たいとか、居たくないとか言っている訳ではない。もし、眠りを楽しんでいる S. を乱暴に起こせば、そこで現出されるものは、自分でもその中に居たい気にはなれないような、眠りを奪われた不快な状態だと言っている。以下では、冒頭に引用した *Crito* 43 B3-6 の本稿筆者訳を掲げ、その訳に注釈を付すという形でこの小さな探求のまとめとしたい。

S. それでいて、どうしてすぐぼくを（たたき）起こさずに、黙ってそばに坐っていたりしたのはどうした事情なのか。Cr. （たたき起こすなんて）とんでもない、ソクラテス、たたき起こす側にしたところで、（覚醒直前の甘い眠りを妨げられての）眠りを取り上げられた苦しい状態にいるなどごめんだからね。（確かに黙って坐っていたが）そればかりでなく、きみがいかにも気持ちよさそうに眠っているのを認めて、さっきから感心してもいたのだ。それでわざと、きみを起こさずにいたのだ。君ができるかぎり甘美な時間を持てるように、というのがぼくの意図するところだよ。

注釈 1 ἀγρυπνία καὶ λύπη はたぶん典型的な hendiadys (Smyth §3025) で, λυπηρὰ ἀγρυπνία (〜 ἡδὺς ὕπνος) という形容詞+名詞を、2 つの名詞で表現したもの。そして ἡδὺς ὕπνος という「人類のすべてが共有する」表現ともいえるものの裏側にある句であろう。たぶん hendiadys といういくらか詩的な修辭的表現は ἡδὺς ὕπνος という半ば詩的傳統の一部となっている句への Cr. (あるいは Pl.) からの反応であろう。

注釈 2 τοσαύτη という指示語は、Cr. が信じている一般的真理を指示している。本稿筆者も ἀγρυπνία καὶ λύπη が「それほどに、あるいはそのように不快なものである」ことを知っているし、Cr. はその他に、この指示語が有効であるはずの対話相手を、S. ばかりではなく、かつて存在し、あるいは現に存在する「死すべきものども」の全てにまで拡大することができるかと本稿筆者は確信する。だから τοσαύτη を使っている Cr. の (あるいは使

わせている Pl.) の語彙選択は正確である。

注釈 3 οὐδ' ἂν αὐτὸς ἦθελον での οὐδ' は、注釈者たちの多くが指摘しているそのとおりであって、οὐ μὰ τὸν Δία の οὐ とは直接には関連しない*10。つまり οὐ ... οὐδ' という結合は認めることができない。αὐτός は、前文で省略された定動詞 οὐ μὰ τὸν Δία (sc. ἐπήγειρά σε、上述参照) の主語であるという「統語論上の身分」のみを強調しており、2 人称 (あなた) に対する 1 人称 (私) という身分をなるべく隠そうとしている。「たたき起こされる側 (αὐτόν) もそうだが、起こす側 (αὐτός) にしたところで、そんな状態になりたくない点では同様だ」であり、文全体が肯定文なら οὐδ' ではなく καί (connective ではなく adverbial な) が使われる環境の中にある。したがって οὐδ' ἂν αὐτὸς ἦθελον 文はこの文が前の文に対してどのような文脈的な関係にあるかを語る文連結詞 (sentence connection) を欠いている (asyndeton)。asyndeton 文の多くがそうであるように、この 2 つ目の οὐδ' ἂν ... 文も、直前の文への説明・理由開示として働いている (Smyth §2167b)*11。

*10 この見解を明言しているのは Adam (*ad* οὐ μὰ τὸν Δία)。本稿筆者も賛同する。οὐ—οὐδέ が並列構造を作り出すには、οὐ—οὐδέ が導いている文の表現水準が事実性に関して違いすぎる (単なる過去の事実の報告と、過去ないしは現在の非現実の推定文)。

*11 καί がそうであるように、その否定形でもある οὐδέ も、文接統詞でもあり得、語の水準の連結詞でもあり得る。そもそも asyndeton は対象そのものが、「ない」という特性を持っているせい、古典語研究の中で、「形を持って存在する」Particles の分類・研究に比べてはるかに遅れている。そういう事情もあるに違いないと思うが、本例のぴったりした類例はまだ、筆者には見つけられていない。ただ、次の例が参考になると考えている: τί δὲ σύ; πῶς ποιήσεις; οὐδὲ γὰρ οὐδέ τὸν σὸν εἵταιρον δεῖ παρελθεῖν 「でもこれはどうなんですか? あなたはどうするつもりなんですか? だって、あなたの仲間 (イソクラテースのことを指す) のことにも言及しないで済ますわけにもいかないでしょう」(Phaedr. 278 E4)。οὐδὲ γὰρ οὐδέ で始まる文が先行する 2 つの問いを発したパイドロスの問いの根拠を語っているものであることは見やすいであろう。もし、Yunis, 244 の解説するとおり、οὐδὲ γὰρ οὐδέ の 2 つ目の οὐδέ が、οὐδὲ γὰρ の否定を単に強めたものであるとすれば、この例は我々の asyndeton と判定されている οὐδ' ἂν ... 文が、先行発言に対して、後続する根拠・理由文を導く、と読むための平行例 (ただ引用例の場合は asyndeton ではなく、γάρ という syndeton を持っているという違いがあるが) たりうる。この (γάρ つきのほうの) 語法は一般化できる。Denniston, GP III である。ここでは οὐδέ ... γὰρ / οὐδὲ γάρ には、γάρ が sentence connective である場合と、οὐδέ がその役割を果たす 2 つの類型があると、GP は指摘している。本稿筆者が近似例だとみなすのは前者の類型に属するものとして挙げられているいくつかの例である。ここでは οὐδέ は γάρ との間に挟まれた語 (οὐδέ ... γάρ の形を取る場合) あるいは γάρ に続く文本体 (οὐδέ γάρ の形を取る場合) への多かれ少なかれ adverbial なものとして働いており、sentence connective としては働いていない、と GP は見ている。実例を引こう。ἀξιοῦμεν δὲ Ἕλληνες ὄντες καὶ αὐτοὶ ὑφ' ὑμῶν ὄντων Ἑλλήνων ἀγαθὸν μὲν τι πάσχειν, κακὸν δὲ μηδέν· οὐδὲ γὰρ ἡμεῖς ὑμᾶς οὐδὲν πώποτε ὑπὴρξάμεν κακῶς ποιούντες 「我々がギリシア人であることを考慮すれば、君たち同じくギリシア人からよい待遇を得るべきであり、ひどい扱いをされるいわれはないと主張したい。我々のほうが加害行為の開始者となつたいきさつなど、いままでひとつもないからだ」(X. An. 5.5.9)。ここでは、γάρ が文接統語であって、οὐδέ は [我々] が πάσχειν の主語から、ποιεῖν の主語へと変わる点を強調する対比的・副詞的な役割を、つまり ἡμεῖς を強調する役割を果たしている。我々の οὐδέ とほとんど変わらない。たったひとつ違う点は、sentence connective の役割を果たすべき γάρ が我々の例では省略されている点である。さらに類似点を言えば、Denniston, GP が引くこの類型 (οὐδέ ... γὰρ / οὐδὲ γάρ や単にその肯定形である καὶ ... γὰρ / καὶ γάρ, cf. Denniston, GP 110) の非常に多

注釈 4 ἀλλὰ καὶ ... の ἀλλά は、だから、直接には οὐ μὰ τὸν Δία の οὐ と呼応する。すると、οὐ μὰ τὸν Δία ὡς ἥδιστα διάγης 文群はほぼ忠実に S. による πῶς οὐκ εὐθὺς ἐπήγειράς με, ἀλλὰ σιγῇ παρακάθῃσαι; に対応した構造をしていることになる。οὐδ' ἂν αὐτὸς ... λύπη εἶναι は後でギリシア語本文の形で提示して明らかにするように、説明的挿入文であり、音読する際には、前後に小さな息継ぎを置き、前後の文とは音調を違えなければならない。注釈 6 参照。さらに詳しく言えば、πῶς οὐκ ...; という S. の問いを、πῶς は οὐκ εὐθὺς ἐπήγειράς με と ἀλλὰ σιγῇ παρακάθῃσαι の双方にかかるものと理解して Cr. は答えていることになる。すなわち、οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον は πῶς οὐκ εὐθὺς ἐπήγειράς με; に対する（より正確には πῶς に対する）答えである（πῶς は理由、「とんでもない、自分だってその中に居たくないような不快な気分を引き起こすから」）。一方で、ἀλλὰ καὶ σοῦ πάλαι θαυμάζω αἰσθανόμενος は πῶς ... ἀλλὰ σιγῇ παρακάθῃσαι; に対する解答になっているからだ（πῶς は様態）。

注釈 5 注釈 3 から当然導かれることとして、ἀλλὰ καὶ ... θαυμάζω の καί は遠く θαυμάζω ὅπως ἠθέλησέ σοι ὁ τοῦ δεσμοτηρίου φύλαξ ὑπακούσαι (A5) での S. による θαυμάζω にこの θαυμάζω を付け加える役目を果たしているとする Adam や Emlyn-Jones の注釈は恐らく的外れで、σιγῇ παρακάθῃσαι に対応すると理解するのが正しいことになる（ただ黙って側に坐っていたのではなく、あなたに対する驚嘆の念も感じつつ坐っていたのだ）。

注釈 6 Nicoll の最新版 *Crito* のこの部分の punctuation に関して特に重大な問題があるとまで感じている訳ではない。だが、読者の理解や正確な音読を助けるには次のような処置のほうがより適切ではないかと筆者は感じている。もしも書き手の側が創造した際に、音声の水準で考えていた言葉の列にも近付けるのが punctuation を考える時の基本であるとするならばであるが：οὐ μὰ τὸν Δία, ὦ Σώκρατες, —οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον ἐν τοσαύτῃ τε ἀγρυπνίᾳ καὶ λύπῃ εἶναι,— ἀλλὰ καὶ σοῦ πάλαι θαυμάζω αἰσθανόμενος ὡς ἡδέως καθεύδεις・

付加的注釈 ἡδέως καθεύδεις に関連し、付け加えをする文（καὶ ἐπίτηδες σε οὐκ ἤγειρον ἵνα ὡς ἥδιστα διάγης）の中で、（たたき）起こさなかったことへの最初の理由（οὐδ' ἂν αὐτὸς ἤθελον ἐν τοσαύτῃ τε ἀγρυπνίᾳ καὶ λύπῃ εἶναι）とは、ある意味で水準を異にする、「たたき起し自粛」への、個人的に Cr. が S. に対して持っている「友愛」を表現する、もうひとつの理由あるいは目的が語られている。私たちが主として見て来た 3 つの文は、本稿筆者が見る限りでは、もしも自分をこの夜明け前に牢に來させた衝動のままに「たたき起し」をしたら、引き起こされていたであろう S. の側の不快を引き起こさない為にした「自粛」を

くにおいて、οὐδέ や καί によって強調されているのが、I 人称単・複代名詞あるいはその関連語を選んでいることである（我々が問題にしている例で強調されているのは αὐτός = ἐγώ）。

語っているにすぎない。紳士の自粛、と言ってよいだろう。しかし、この付加文では、その自粛が、単に夜明けの目覚め直前の眠りの甘美さを知った紳士の自粛であるばかりではなく、その楽しみを得る機会が S. には数えるほどしか残されていないことを知る友人としての Cr. が、その楽しみを最大限に得させるための自粛であったことを語るのだ。友に無限の共感を有している者の、友愛がゆえの自粛と言ってよいだろう。

5

以上のように Pl. *Crito* 43 B3-6 を解することによって、Cr. という S. の大切な友人を、実は友達がいのない、友に値しない友だったのではないか、という故なき疑いから我々は解放することができるだろう。また、この理解によって始めて、我々は見抜く可能性を確保できるのである。第 1 に、S. と比較してみれば、多少論理完徹という点でてぬるいところはあっても、S. に最後まで友愛とともに親身に付き添った人物として Cr. をこの対話篇の作者は捉えていたこと。あるいは描き出していること。第 2 にその友愛と理解と親しさは、S. をして、人間が集まって作り出す、法を媒介とした全体、すなわちポリスと「その多くの者たち」が作り出す全体と、その全体へと否応無く巻き込まれてしまっている者である個人としての S. の間に必然的に生じざるを得なかった緊迫した軌轢を、『弁明』の「そらとぼけ」とは全く違った局面で語り出さざるを得ない場所へと追いやる力を持っていた、という事実を。そしてこの事実こそが、この対話編の根本構想であり、この作者は、冒頭の短いやりとりでその根本構想を成立させる大きな役割を託したのだ、ということ。これらのことを見抜く可能性を上を読み直しは、いちおう確保しえた、と筆者は主張したい。

(北海道大学、東京古典学舎)

Bibliography

田中美知太郎 (訳) 『クリトン』、世界古典文学全集 17 (プラトン I)、筑摩書房、東京 1964。

Adam, J. (ed. com.), *Platonis Crito*, Cambridge 1903.

Ast, F., *Lexicon Platonicum*, Leipzig 1835 (= Cambridge 2012).

Burnet, J. (ed. com.), *Plato, Euthyphro, Apology of Socrates, Crito*, Oxford 1924.

Chantraine, P. (ed.), *Dictionnaire Étymologique de la Langue Grecque*², Paris 1999.

Denniston, J. D., *The Greek Particles*², Oxford 1950.

Duke, E. A., et Nicoll, W. S., et al., *Platonis Opera I* (Oxford Classical Texts), Oxford 1995.

- Emlyn-Jones, C. (ed. com.), *Plato, Crito*, Bristol 1999.
- Fowler, H. N. (tr.), *Crito (Plato in Twelve Volumes)*, Vol. 1, Cambridge, Mass. and London 1966.
- Grube, G. M. A. (tr.), *Crito* (in *Plato, Complete Works*, ed. J. Cooper), Indiana 1997.
- Liddell, H. G., Scott, R., and Jones, H. S., *A Greek-English Lexicon*, 9th edn., Oxford 1940.
- Smyth, H. W., *Greek Grammar*, Cambridge, Mass. 1956.
- Yunis, H. (ed. com.), *Plato: Phaedrus*, Cambridge 2011.

Horatius, *Carm.* 2.16 Otium divos

大芝芳弘

序

ホラーティウス（以下 H）の抒情詩作品の中でも比較的評価が高いこの作品（C. 2.16、以下本作（品）とも呼ぶ）については、その構造理解や冒頭の otium の anaphora の先例であるカトゥッルス（以下 Cat.）第 51 歌との関係、また作品内容に深く関わるエピクローロス（以下 Epic.）哲学との関連、とりわけ直接の影響が顕著に認められるルクレーティウス（以下 Lucr.）第 2 巻序歌との関わりなどをめぐって、様々な見方が提示されて来た。本稿でも、先行研究が指摘する諸点を参照しつつ、(I) 筆者の考える構造理解に基づいて改めて本作品の趣旨を跡づけ、(II) Cat. 51 との関係について、これまでよりもより密接な応答ないし批判の要素が認められる可能性を検討し、また (III) Lucr. 2 序歌などとの関係についても、単なる思想内容と詩句の表現・イメージ等の影響関係に留まらないより本質的な連関の可能性を考える。そして、(IV) 特に最終連で語られる詩人自身の生き方と詩作の理想の合致・統合というべきあり方の点で、H がカッリマコス（以下 Callim.）とサッポーとを踏まえつつローマの抒情詩人としての自らの姿勢を表明した作品だとする見方を提示してみたい。

I. 構造と趣旨

冒頭にも触れた通り、この作品の構造に関しては様々な見解が示されている。ここでその詳細に立ち入る余裕はないが、全 10 連の内容的な区切りとして、例えば Womble は 4-3-3、Quinn は 2-2-2-4、Davis は 4-4-2、West は 4-2-4 という構造を見るのに対し、Commager は全体に明確な構造があるわけではなく haphazard だと言い、また第 (6) 連（以下、連番号は (1), (2), (3) 等と表記する）を削除する立場に立つ K-H、Büchner は 3-3-3 の構成だとする*1。こうした様々な見方が成り立つこと自体、どの点に注目するかによって

*1 Womble 408-9, Quinn 229, Davis 205-15, D. West 114; Commager 333; K-H 223, Büchner 185-90. Klingner も (6) を削除する。だが、(6) を削除する見解に対しては、Pöschl の徹底した議論によって今や十分な反駁がなされ、むしろこの連が全体の要であることが明示されたと考えるので、本稿では敢えて問題にしない、cf. Syndikus 450-1 + n. 55.

構造も違って見えて来るといふ、H の抒情詩のある性格を物語っているとも言えるが^{*2}、本稿では以下に概略を述べるような理由から、Latte, Barwick, N-H らが主張するように^{*3}、₂ 連ずつのペア ₅ 組から成る構造と見る見方が最も妥当だと考える。ただし、その ₅ 組は均等に並列されているのではなく、冒頭 ₂ 連 (1)-(2) のペアが導入部をなし、それを受けた (3)-(4) のペアが互いに対比的な形で本作品の中心主題である *otium* の問題（それをめぐる ₂ つの対照的な立場あるいは生き方）を明確化した上で、その (3) と (4) の対比関係が続く (5)-(6) のペアと (7)-(8) のペアとの間の対比関係に拡大する形で受け継がれ敷衍されて論議が展開され、最後の (9)-(10) のペアで先に触れた ₂ つの立場・生き方が具体的な対照関係において提示される、という構造だと考えられる。

具体的には、冒頭 (1)-(2) のペアでは外的な状況としての *otium* 「平穩・平和」を神々に祈願する人々のこと（(1) の海上で嵐に巻き込まれそうになった船人は海の穏やかさを、(2) の戦いに明け暮れる異民族は平和を祈願する）が語られるが、その *otium* が Grosphus への呼びかけを挟んだあとに 7-8 「それは宝石でも紫でも黄金でも買えない」と言われるとき、*otium* は内面的な「心の平安」の様相を帯び始める^{*4}。これを受けた次の (3)-(4) のペアでは、まず (3) で「財宝も執政官の先駆警吏も、心の惨めな騒乱と飾り天井を飛び回る不安を追いやることはできない」として、富や権力といった外的な力では心の内なる不安を排除できないことが語られる^{*5}。これが 9 *enim* によって導入されていることから、冒頭 ₂ 連で語られた *otium* が今や外的な状況としての平穩・平和ではなく、「心の平安」の意味で問題化されていると理解できる。これに対して (4) では、13 *vivitur parvo bene* 「僅かなもので（こそ）よく生きられる」という対照的な「生き方」が、対比的な *asyndeton* で唐突に導入され、それは「父祖の塩入れがささやかな食卓に輝き、恐れにも卑しい欲望に

*2 Cf. Pöschl 81 n. 3.

*3 Latte 300-1, Barwick 250-4, Syndikus 446 n. 36, N-H 255.

*4 André 469, N-H ad loc., Lebek 2062, Lefèvre 205 *pace* Barwick 252. (1) の船人は直接的には交易商人と解されるが、(3), (5)-(6) など後の展開との関係を考慮すると遠征や統治に赴くローマの軍人や政治家を含めて理解すべきであろう。それによってまた、(2) のローマと戦う異民族との対応も含意される。宝石と紫と黄金はむしろ交易や戦争で獲得される（東方的な）富の象徴であるが、同時に特に紫は東方異民族の武装やローマの統治者の装束をも示唆することで、軍勢力や政治権力の象徴でもある：Syndikus 445 + n. 33. Grosphus も後の展開からすると *otium* を外的な状況や境遇と捉えてそれは富や力で獲得できると考えるような世人一般を代表する存在として、その考えを正すような趣きで呼びかけられていると見られる。

*5 ここでも *gazae, laqueata ... tecta* は（特に前者は再び東方的な）富を、*consularis lictor* は紫の衣装を身に纏い、ローマの軍勢力や政治権力を象徴するものとして (2) と結びつく。富と力が不安に対して無力であることは、cf. Epic. *sent. Vat.* 81, fr. 548 Usener（以下同）；fr. 207, 479；Lucr. 2.37-9（N-H ad 9）。本作と Epic. 哲学との関連全般については、cf. K-H 224, 226, 229, Büchner 190-8, Syndikus 439-40, N-H 254, ad 9, 13, 15, Lebek 2061-5, etc.

も安らかな眠りを奪われない人」の生き方であると語られる*6。ここには明らかに (3) の富と権力を持ちながらも不安を免れぬ生き方と対照的に、質素でも「恐れや欲望」に乱されない「心の平安」を実現した生き方が示されている。だがそれは、「父祖の塩入れがささやかな食卓に輝く」に示唆されるように、つましく質素であつても決して貧しくも惨めでもない暮らしである*7。

こうして (3)–(4) で対比的に主題化された「心の平安」としての *otium* の問題が、次には、(5)–(6) のペアが (3) に、(7)–(8) のペアが (4) に対応し、それぞれを敷衍拡大する形で展開されて行く。従って (5)–(6) と (7)–(8) のペア同士が対比的であり、その対比関係は (4) 冒頭の *asyndeton* に対応する (7) 冒頭の *asyndeton* によって強調される*8。即ち、(5)–(6) では富や権力などの外的な力をあくせくと追求しながらも決して不安から逃れられない生き方が、(7)–(8) ではその逆に今ここにあるものだけに自足し、全き幸福ではなくただ「心の平安」だけを確保した生き方が語られる。

具体的に見て行こう。まず (5) では「なぜに我らは短い生涯に果敢にも多くを目指すのか」「なぜに別の太陽に温められた土地へと（居場所を）替えるのか」「祖国を逐われた者で自分からも逃れた者がいたか」と、続けざまに 3 つの問いが畳み掛けられる。それらの問いはどの行動もみな虚しいことを強く含意する。それは、直前に示された「恐れと欲望」即ち「不安」を免れたつましい生き方とは相容れない生き方を示して、それがいかに無意味かを問い質す趣きである*9。「心の平安」は「質素な暮らし」でこそ得られるはずなのに、世の人々は外的な「富や力」を目指す活発な行動や境遇の変化などによって「不安」を免れようとあがいている、しかしそれは無意味な虚しい行動なのだ、と*10。連の冒頭の 17 *fortes iaculamur* には *Grosphus* の名前 (*γρόσφος* = *iaculum* 「槍」) にかけた機知が

*6 「恐れと欲望」が人を不幸にするという考えは、cf. *Epic. fr.* 485, 471.

*7 「つましい暮らし」が「心の平安」をもたらすという考えについては、cf. *Epic. Epist. ad Men.* (= *EM*) 130–1, *sent. Var.* 77, fr. 476; fr. 466, 475, 477, 478; Pöschl 82–3, Syndikus 439–40.

*8 Barwick 254 f. が指摘する (5)–(6) と (7)–(8) の形式的類似性も、彼自身が考える (3)–(6) と (7)–(10) の 4 連同士の対応関係よりも、むしろこの構成を裏書きする：特に、(5) と (7) はともに 3 cola からなり、最初の 2 cola は行の途中で終わる；(6) と (8) も 3 cola からなり、第 3 colon は最後の 2 行を占める；(6) と (8) はともに動詞で始まり、しかも (6) *scandit... nec... relinquit* と (8) *abstulit... minuit* の動詞のペアは表現は対比的だが結果的には類似した内容を語る点で対応し、*aeratas... navis* と *turmas equitum* の対と *Achillem* と *Tithonum* の対が対応し、これらがいずれも擬人的な抽象名詞を主語とする主動詞の対格目的語として（ほぼ同じ位置に）配置されていること、などである。また Barwick の理解とはやや異なるが、(5) と (7) の 3 cola は、第 3 colon が前 2 cola の内容を受けつつ総合的にまとめる形で、それぞれ次の (6) と (8) での展開＝具体的な説明を呼び起こすこと、(6) と (8) も同様に第 3 colon に重点が置かれて内容的な焦点をなすという点でも共通する。これらについては、以下の本文および下記注 18, 25 参照。

*9 Cf. Latte 297, Pöschl 88, Syndikus 447–8.

*10 Cf. Pöschl 88, Womble 395–7, Syndikus 448–9. これはすでに 7–12 で語られた内容に対応する。その *Epic.* 思想との関連については、上記注 5 参照。

込められ、「勇敢に・力強く」「槍で狙う＝目指す・追求する」という意味から、狩りのイメージで軍事や交易などの積極的な活動が語られるが、その目的となる *multa* 「多くのもの」とは結局は「富や力」であることが冒頭からの流れから理解される。だが、3つの問いは最初のこの積極的な追求から次にはニュートラルな「居場所や境遇の変化」へ、そして祖国から追放されるといった消極的な行動という3つの異なる様相を指しているように思われる。それらは交易や軍事遠征だけでなく、属州への赴任や祖国追放など、状況は異なるがいずれも富や力を追求して生きる商人や軍人・政治家（権力者）の姿を強く示唆する*11。しかし連の最後の *20 se quoque fugit* の表現からは、そうした富や力の追求や境遇の変化も最終的には自己の内なる不安を免れるためであること、しかし自分自身から逃れられぬ以上は不安からも逃れられないこと、従って外的な状況や境遇の変化によって不安を免れようとする行動はいずれも虚しいことを示している*12。続く(6)ではこれを受けて、先に「富や力でも排除できない」とされ、「天井を飛び回る」ような「外的な存在」として示された *curae* (11-2) が、いまや単独のダイモーンの如き存在となって、逆に人間に攻めかかり離れないことが語られる*13。 *aeratas ... navis* と *turmas equitum* の組合せは第一義的には軍船と騎馬隊であり、最も素早く強力なこれらの軍事力さえも *Cura* には太刀打ちできないことが語られていると解される*14。そして、(5)での世人の行動が3つの様相で語られたのに対応して、ここでも武力による積極的な攻撃・排除から中間的な防御・抵抗へ、しかし最終的には消極的な逃亡へと至る3つの様相を含みつつ、そのいずれにおいても *Cura* の優勢な状況が語られていると見られる*15。ただしここでは、それが人間の

*11 Cf. Pöschl 85-6, Syndikus 448-50.

*12 Cf. Latte 298, N-H ad 20: つまり、形式的には並列に置かれた3つの問いが、積極的排除、中間的な抵抗や防御、消極的逃走という行動様式の違いはあれ、いずれも内心の不安を免れるための行動として共通性を持つことを、最後の祖国追放の境遇に即して「誰か自分からも逃れた者がいるのか」と語ること示唆していると解される。積極的排除はすでに 10 *summover* に、中間的防御は 7-8 *venale* (売買＝交渉と妥協) に示唆されていたものであり、また消極的逃走・忌避は (1)-(2) の祈願に含意され、また次の (6) の第3 colon で最も明確に語られることになる。この第3 colon と (1) のイメージの対応にも注意したい (後述)。

*13 この点は *Lucr.* 2.47 ff. の流れを引き継ぐ (後述 pp. 27-8)。 *curae* / *Cura* が外的な存在として表象されること自体も、それが外的な要因で左右できるとする「誤解」と連動しているだろう。後述の (7) 26 *curare* と対照的である。

*14 Cf. Pöschl 85, Syndikus 449-50, Davis 210-1. ただし、個人所有の交易船 (あるいは遊覧船) と騎士階級の馬上行進の情景と見る解釈もあり得る、cf. N-H ad loc., D. West 117. この点は、後に見る *Lucr.* との関連、特に 2.41 ff. の読みの問題とも連動する: 下記注 40 参照。C. 3.1.37-40 の類例からすると H 自身が両方の解釈の余地を残している可能性も捨て切れない。

*15 前注に触れた交易船と馬上行進の含意を認める解釈では、(1)-(3) や (5) でも語られたような、軍事だけでなく交易や外地赴任 (また追放) などを含む「富と力」の追求や境遇の変化を求める世人の行動全般を、(6) にも読み取ることになる。軍船と騎馬隊に限定する解釈は、そうした世人の行動を軍事行動に代表させているとする解釈である。

側からではなく Cura の振舞いの側から、その積極的な攻勢と、執拗なつきまとい、そして逃げる相手を追跡する行動として語られる。即ち、scandit には軍船との戦闘に際して相手の攻撃をものともせず敵船に乗り込み攻め入る様が、nec ... relinquit には騎馬隊の防御と抵抗にも拘らずつきまとう様が、そして ocior cervis ... ocior Euro には逃げる相手を誰よりも素早く追跡する様が語られる*16。Pöschl が指摘する通り*17、(5) では 17 fortes iaculamur と積極果敢に狩りや戦い (= 富と力の獲得) に突き進んでいた人間が、ここでは武力による攻撃や防衛・抵抗も虚しく、結局は Cura に太刀打ちできず、逆にその獲物となって狩り立てられている。また、(1) で迫り来る嵐を逃れようとしていた人間に、今や Cura はその嵐をもたす東風よりも迅速に襲いかかろうとしている*18。その意味で、冒頭の嵐を予期する人の外的な otium への祈願・希求で始まった描写が、「心の平安」としての otium を乱す「内なる嵐」としての「不安」(10-1 miseros tumultus / mentis et curas) の逃れ難さ (つまりは内なる otium の得難さ) の描写へと転換する形で、問題の本質が具象的イメージで描き出されるのである。

これに対して、(7)-(8) のペアでは、(4) で提示された、つましくとも「心の平安」を実現した暮らしに対応する生き方が、まず (7) でまさに内なる「心 animus」のあり方として示され、それが (8) では神話的範例を経て「私と君」の対比に結びつけられる。(7) 冒頭の 25 laetus in praesens animus 「今を喜ぶ心」という言葉で、(5) で語られた世人の生き方、いわば外的な状況や境遇を変えようとする行動ではなく、内なる心のあり方に関心が向けられる。しかも「先のことを思い煩わず、辛いことはしなやかな笑みで和らげるべし」という命令の接続法 (oderit ... temperet) により、心の持ち方の教えが示される。「今を喜ぶ心」とは、時間的・空間的に「今この時の・目の前にあるもの」を歓迎する心を*19、quod ultra est / oderit curare 「それ以上・その先のもの (= 将来のこと・今ある以上のもの) を思い煩うべからず」とは、「今・ここに」あるだけの、僅かなもので十分だと満足してそれ以上の富や力を求めてあくせくせぬ「自足の心」を指す*20。さらに、amara lento / temperet

*16 Barwick 256 は S. 2.7.111-5 の類例から (6) には最初から人間がもっぱら不安から逃げる様子だけを想定するが、ここはむしろ *Epist.* 1.11.25-30, esp. 28-9 *strenua nos exercet inertia; navibus atque / quadrigis petimus bene vivere* を類例とする人間の積極的な行動を前提として考えるべきであろう、cf. Davis 209-10. Latte 298 も軍船と騎馬隊には *Lucr.* 2.49 に対応するような戦闘力の含意を (当然ながら) 認めている。

*17 Pöschl 86.

*18 このように、上記注 8, 12 で触れた (5) の 3 cola 構成と同様に、(6) 連でも第 3 colon は詩句の形式の点だけでなく内容的にも最初の 2 cola で語られた個別状況を越えた全般的状況あるいは最終局面を語る点で連全体の焦点をなしている。

*19 Cf. N-H ad 25, Womble 399.

*20 その時々「今」に集中すべき、という考えは、cf. *Epic. fr.* 204, 490, 491; 「自己充足」については、cf. *Epic. EM* 130 *αὐτάρκειαν ... τοῖς ὀλίγοις*, *sent. Vat.* 77 = *fr.* 476, *fr.* 138, *Cic. fin.* 1.62; praesens = quod adest (C.

risu「辛いことをしなやかな笑みで和らげるべし」とは、人生につきものの苦しみを泰然自若と受け止める心の余裕を語る。外的な「苦さ」を調節するのに何か別の外的な「甘さ」を用いるのではなく、悠然たる笑いで対処する心のゆとりである*21。こうした「心のあり方」が、(4)の「つましい生活」によってこそ得られることは、前述の構造的・内容的な対応からも、またとりわけ、(4)の *timor et cupido / sordidus* に当たる *curae* が、(6)でのダイヤモンド的な存在から、今や主体となる *animus* がその働きを厭い退ける (26 *oderit curare*) ような「心の行為」へと縮小していることから明らかであろう。11-2 *curas ... volant* から 22 *Cura* へと怪物化して来た外在的な「不安」が、賢者の *animus* においてはもはやその活動さえ認められぬ存在となる*22。それこそが *curae / Cura* を免れ *otium* 「心の平安」を得た状態であろう。こうして、(7)の最初の 2 *cola* をなす 25-7 は、Epic. 的な理想としての「今を心穏やかに快く生きる」賢者の境地、*laetus animus = animus aequus* 「心の平安」即ちまさに *otium (= ataraxia)* の境地を語っている*23。これを受けて、最後の第 3 *colon* には *nihil est ab omni / parte beatum* 「あらゆる点で幸福なことなど何もない」という格言的言明が置かれる。このアフォリズムは、多くの場合には悲観的な諦念の表明であり、ここでも直接的には *amara* 「辛いことども」の不可避の存在を前提にした一般的通念であるが、しかしここでは、「心の平安」こそが（身体健康と並んで）幸福な生の究極目的であり、それさえ得られればそれ以上望むべきものは何もないという Epic. 的原理の裏返しでもある*24。その意味で、(7)で語られたその理想的境地を総括する言葉となっている*25。

続く (8) では、このアフォリズムを Achilles と Tithonus という対照的な神話的範例によって例示し、またその対照性を Grosphus への語りかけによって「君と私」の対比へと結びつける。Achilles の「名誉は得たが短命」という *Ilias* のモチーフを踏まえ、これに

3.29.32 *quod adest memento / componere aequus*, ... 41-3 *ille potens sui / laetusque deget, cui licet in diem / dixisse vixi, ...*; S. 2.6.13; = *quod satis est* (C. 3.1.25 *desiderantem quod satis est*, 3.16.43-4 *bene est, cui deus obtulit / parca quod satis est manu*, *Epist.* 1.2.46 *quod satis est* *cui contingit, nil amplius optet*); cf. C. 1.9.9 ff., 1.11.8 *carpe diem*, 3.8.27-8 *dona praesentis cape laetus horae / linque severa*.

*21 Cf. K-H ad loc., Womble 399-401; Fraenkel 214 が示唆するように、*temperet* の語からこれを *temperantia = σωφροσύνη* と呼んでもよいと思われる。Davis 211 は H のモデルは Archilochus だと指摘する。

*22 Cf. Womble 399, Harrison ad loc.

*23 Epic. 的な賢者、即ち「思慮ある人」については、Epic. *EM* 132-5, cf. *Sent.* 5. *otium* 「心の平安」が *animus aequus* と表現される例としては、cf. *Epist.* 1.11.25-30, esp. 30 *animus ... aequus* (上記注 16 も参照)。*laetus animus = animus aequus* については、cf. C. 3.29.32 ff., 41 ff. (上記注 20 に引用)、また下記 p. 30 および注 53 参照。

*24 Cf. Epic. *EM* 128. N-H ad loc. は、今この時の幸福を確保せよという (C. 1.11 の *carpe diem* に相当するような) 積極的な勧告だと言う、cf. Latte 303, Harrison ad loc.

*25 前述 (注 8) の (5) と (7) の構造的類似性からしても、(5)の (またそれと対応する (6) の) 第 3 *colon* が「不安」から結局は逃れられない世人のあり方を語ったことと、(7)の第 3 *colon* に当たるこの詩句が「心の平安」こそが幸福の要であることを語ることは対照的な対応関係をなす。

hymn. Aphr. の「永えの老齢に朽ち果てる」Tithonus を対置することで*26、それぞれ異なる仕方で幸福だった彼らも、それぞれの不幸を免れなかったことを示す*27。それを受けて、Grosphus と詩人自身にも、同じくそれぞれの幸と不幸があり得ることが示唆される。しかしここで詩人は（あたかも目配せするような調子で）Grosphus にはないある恵みを、自分にはいつかある「時が差し出してくれるかもしれぬ」と言い、自分自身の境遇と生き方、その「恵みと幸い」を語ることへと方向転換する。つまり、(7) で「心の平安こそが幸福」から「全き幸福などない」へと反転させた上で、Achilles–Tithonus の神話的範例で「英雄たちでさえ不幸に遭った」とした後に、その否定的な流れを *et mihi forsan ...* で受け継ぐように見せかけつつ、最後には *porriget hora* で詩人自身の「恵みと幸い」を語ることへともう一度反転させている。そうすることで、Grosphus と詩人の対比が最後の (9)–(10) における両者の境遇と生き方の対照的記述へと繋げられ、そこではこれまで語られて来た世の人々と Epic. 的賢者の生き方が、それぞれ Grosphus と詩人に対応する形で、しかし、より個別具体的な叙述を通して最終的には詩人自身の「詩人としての生き方」の表明へと収斂してゆく。(7) での Epic. 的理想の生き方が、直接に詩人自身に適用されるのではなく、神話的範例をいわば一種の緩衝剤とも反転像ともしながら、しかも軽い諧謔を込めた Grosphus との対比において、詩人の方が「心の平安」を実現しうる生き方であることが示唆される。この意味で、(7)–(8) のペアは「心の平安」こそが幸福の要だという趣旨とその具体的展開であるとともに、特に (8) は最終の (9)–(10) のペアでの「詩人自身の生き方」へと収斂する流れを導く役割も果たしている。

最後の 2 連では、Grosphus の持つ富と力とが数多くの牛の群れと競走馬の嘶き、また紫の衣の 3 つによって語られる一方、詩人自身には「ささやかな農地」と「ギリシアのカメーナの細やかな息吹」と「悪意ある（妬み深い）大衆への侮蔑」というやはり 3 つの恵みが、すでに *Parca non mendax* によって与えられている、という。(9) では、*te ... tibi ... te* という荘重さをてらった讃歌風の表現、「百の牛群」の hendiadys による複雑な言い回し、100, 4, 2 という数遊び、(9) 連だけでは収まり切れずに（本作ではここだけの）連を跨いで enjambment でその「溢れる豊かさ」が示されるなど、Grosphus の富と力の大きさが大袈裟に諧謔的に語られる。同時に、*te ... circum / mugiunt, tibi tollit hinnitum, te ... /*

*26 *Il.* 9.412–6, *hymn. Aphr.* 218–38.

*27 *nihil ab omni parte beatum* から、Achilles も Tithonus もそれぞれに幸福だったが不幸にも遭った、と理解できる。Tithonus の幸福を最後に蟬となったことに求める見方があるが (N–H ad 30)、Achilles の武勇による栄誉 (*clarum*) に対応して女神に愛された英雄としての名誉と取るのが自然であろう。不幸については *abstulit cita mors* 「早い死」と *longa minuit senectus* 「長い老年＝老残」が対照されるが、実質的には人間として「不老不死」を得られない宿命の点で共通する。この含みが後の H 自身の「恵み」の含意に結びついて行く：後述 p. 36 および注 71 また補論も参照。

vestiunt などの表現で、それらが文字通り彼の「身の回り」を取り巻く外的なものであることが如実に示される。最後に 36 murice「紫貝」が 7 purpura に対応して「富と力」を象徴することで、改めて Grosphus が「富と力」を追い求める世間一般の人々の生き方を代表する存在として位置づけられる。

これに対して (10) では、H 自身の恵みである「質素な暮らし」「細みの詩学」「大衆への侮蔑」が、いずれも先立つ叙述との関連を持つ形で、すべて世人の生き方とは対比された理想的な生き方に即したものとして提示される。*parva rura, spiritum tenuem* は明白に (4) の vivitur *parvo* bene, in *tenui* mensa に言葉の上で対応し、詩人自身の「つましい生活」と「細やかな詩作」が密接に結びつけられる。富や力を目指してあくせくする世人の生き方から離れて「つましい生活」をすることと、詩作の営みもそれに呼応して「細やかな詩作」であるという、生き方と詩作の理想の合致・統合が強調される*28。また最後の「悪意ある大衆への侮蔑」とは「大衆の考え方や生き方に左右されぬこと」「大衆の悪意や嫉みの拒絶」*29 の意味であり、それは本作で語られた大衆の生き方に対する拒絶であると同時に、後にも見るように Callim. の詩論においても繰り返される原則であるから、この 3 番目の要素は詩人の「生活」と「詩作」のどちらの理想とも深く結びついている。しかも 3 つの恵みはすべて Parca non mendax の与えたものとされることで、つまり「運命の女神」が「つましい」「偽りなき」女神でもあることで、これらの恵みの根本には「つましき」があること*30、そうした生き方を運命づけられた詩人は決してそれに裏切られることなく、(4) と (7) で語られたような otium「心の平安」も得られることが強く示唆される*31。

かくして、全体の趣旨は次のようにまとめられよう。外的な富や力を追求し状況や境遇の変化を求める世の人々の営みは、それらによっては真の otium「心の平安」は得られぬがゆえに虚しく、「不安」(の怪物)は積極的な排除・攻撃でも自衛・防御でも消極的な逃走・忌避でも免れ得ない ((3), (5)–(6))。それに対して質素な生活は(外的な状況や物や力に左右されない)ので 恐れや欲望などの心の動揺=不安を免れうる ((4))。それを心 animus のあり方で言えば「今ここにある(僅かな)もの」に自足する柔軟で泰然自若たる

*28 Cf. Wehrli 75, Commager 334, N-H ad 37, Syndikus 454, Davis 214, D. West 117. 「つましい生活」と「詩作」の結合の H における類例としては、S. 2.6.1 ff., esp. 13–5, C. 1.31.15–20, 4.2.27–32. その Callim. との関連は IV で検討する。

*29 この考え方もまた Epic. fr. 187 に見られる。H の場合には自分の作品は人気がなくても平気という含みもあるだろう、cf. S. 1.4.22 ff., 1.10.73 ff., Epist. 1.19.34 ff., etc. この言葉と Callim. との関連も IV で触れる。

*30 Cf. C. 3.16.43–4 bene est cui deus obtulit / *parca quod satis est manu* (上記注 20 も参照); Quinn ad loc., West 117.

*31 Cf. Porphyrio ad 33–4 di ... dederunt ... mihi paupertatem cum *animi aequitate* (上記注 23 参照); Pöschl 90, Womble 407.

精神が不安の活動を抑制して otium をもたらす、人はそれだけで十分に幸せであり、全き幸福など望むべくもない ((7))。英雄たちでさえ不幸に遭ったという神話的範例から「私と君」の対比を導いて逆に詩人自身の将来の恵みの可能性を仄めかしたあと、最終 2 連では世人の代表としての Grosphus の外的な富や力と対比的に、詩人自身の内なる otium が「偽りなき運命」からの 3 つの恵みとして提示され、「つましさ」を基盤にしつつ大衆とは距離を置いた「質素な生き方」と「細みの詩作」の理念の統合が語られる。

さて、その上で、本作品の理解の上で重要なのは、C. 1.1 との類似と相違である。類似点としてはまず、全体として詩人の生き方が世人のそれとの対比で最後に示される点が挙げられる。C. 1.1 では全体が priamel の構成により様々な生の類型が列挙された後に最後に詩人の抒情詩人としての生がそれらに対置されるのに対して、本作では (1)–(3), (5)–(6), (9) での世人（主に交易商人や軍人・政治家）の生に対して (4), (7)–(8) でそれと対比される理想的な生き方（「質素で心穏やかな生」）が示され、それが最後の (10) で詩人自身の生き方に繋がられる。大衆の拒絶と otium への言及、また一部の人間類型の対応も認められる*32。

しかし他方で、相違点としては C. 2.16 には 1.1 にはない新たな要素が見られることである。即ち、(a) otium に関する「省察」が作品全体の主題となっている、という点。特に、「心の平安」としての otium の問題に関しては Cat. や Lucr. との関連を考慮する必要がある (II, III 参照)。(b) 「質素な生活」と「心のあり方」の結びつきの問題も新たな論点である。この点もやはり Epic. 思想、特に Lucr. と関連を考えるべきである (III 参照)。(c) 「生き方」と「詩作」の理想の統合という点については、最終連の意味を Callim. および Sappho との関連において検討する必要がある (IV 参照)。とりわけ、これが最終連の H 自身の抒情詩人としての自負へとどう繋がるのかに着目して行きたい。

II. Catullus との関連

Cat. 51.13–6

(4) **otium**, Catulle, tibi molestumst:

otio exsultas nimiumque gestis:

otium et reges prius et beatas 15

perdidit urbes.

(4) 閑暇（安逸）は、カトゥッルスよ、君には厄介だ。

閑暇（安逸）に、君ははしゃぎ、浮かれすぎている。

*32 1.1.32 *secernunt populo* と 2.16.39–40 *malignum / spernere vulgus*; 1.1.15–18, *esp. otium et ... / laudat rura* と 2.16.1–4, 37 *parva rura*; 3–6 と 35; 7–8 と 9–10; 23–5 と 5–6, 21–2 など。

閑暇（安逸）は、かつて王たちや豊かな
町々をも滅ぼした。

H. C. 2.16 冒頭の *otium* の *anaphora* は、Cat. 51 の第 (4) 連に何らかの応答したものと見られる*33。しかし、この (4) 連が Cat. 51 の (1)–(3) 連に続く最終連なのか、別の作品に属していた断片なのかに関しては議論がある。従って両方の可能性を前提に考える必要がある。

(A) まずは第 (4) 連との関係だけを考慮した場合である。Fraenkel によれば、Cat. はここで当時常識化していたと見られる「閑暇・安逸が（贅沢な暮らしをもたらし）墮落と破滅に繋がる」という考え方を語っているが*34、このいわば外在的条件としての *otium* 「閑暇・安逸」の破滅的影響に対して、H. C. 2.16 (1)–(2) では航海途上の嵐や戦争といった危難に直面した人間はむしろ逆に *otium* 「平穩・平和」を「神に祈願する」ものだとして、同じく外在的条件としての *otium* の否定的側面を肯定的側面に転換している*35。これは C. 1.1.16 にも通ずる考えだが、*otium* の語義の転換（「閑暇・安逸」から「平穩・平和」へ）を伴っている。また、C. 2.16.7–8 「*otium* は富や権力では買えない」は Cat. 51.15–6 「*otium* が王たちや豊かな町々をも滅ぼした」を裏返しにした表現である可能性がある。この詩句は、王の力も町々の富も *otium* の破滅的な力を遠ざけることはできないこと、つまり富や力もそれに対抗したり左右したりできず、ましてや購うことなどできないことを語っている。しかしここでも、先に見た通りに外的な *otium* 「閑暇・安逸」から内面の *otium* 「心の平安」の意味へと移行させることで新たな問題へと主題を転換してもいる。

従って、仮に Cat. 51.13–6 (4) だけを独立に見た場合でも、H. C. 2.16 (1)–(2) はこれに対する一つの、*otium* の意味の転換を伴うような応答であった可能性が考えられる。

(B) 次に第 (1)–(3) 連の「恋の激情」との連続を前提に考えた場合である。Cat. 51.13–6 (4) '*otium-stanza*' が先立つ 1–12 (1)–(3) の「身体症状に現れた恋の激情の描写」に続いていたとすれば、次のようなことが考えられよう。

(a) まずはやはり、Sappho の韻律に倣い、その内容を翻案してそこに独自の要素を加えた作品の先例として、これに呼応ないし応答する意図が H にあった可能性がある。Cat. は 51 と 11 でのみ Sapphic stanza を用いており、Sappho の先例を受け継いでもっぱら恋の始まりと終わりを歌っているが、あくまで限定された試みの詩作でしかない。それに対して、H は同じ Sapphic stanza を用いて様々な主題を扱っており、同じ韻律を用いたこの作

*33 Cat. 51 との関連については、cf. Mendell 297, Ferguson 8, Fraenkel 211–4, Putnam 90–1.

*34 Fraenkel 212–3.

*35 Cf. Lebek 2061.

品でも Cat. とは異なる独自の主題のもとで最後に自らを「ギリシアのカメーナの細やかな息吹」を受けた詩人として紹介する。それによって、Cat. を遠く乗り越えた詩作の実践を誇らしげに主張している、という側面があることを忘れてはなるまい。

(b) Cat. では最終連だった otium-anaphora が、本作では冒頭に移動している。Cat. 51 が「恋の激情（内面の動乱）」の描写から、そうした恋と詩作の前提となる外的条件としての otium の破滅性に関する自己省察（「恋の閑暇は身を滅ぼす」）へと転換した流れとはちょうど逆に、H は「外的な otium に関する省察」から「心の動乱＝不安とその克服」の主題への流れに転換させている。つまり、本作での外的条件から内的条件としての otium の問題への転換は、一面において Cat. 51 の展開を逆転させたものかもしれない。これと連動して、Cat. の「恋の激情」を、H は 10-2 miseros tumultus / mentis et curas ... / ... volantis として引き受けた可能性も捨て切れない。むろんこの詩句はこの文脈では一般的な心の動揺や不安を指すと解するのが妥当だが、miseros の含意、curas ... volantis の Ap. Rh. との関係からは「恋の情動」の含みもあながち否定できない*36。とりわけ、Lucr. 4 巻末の「恋情の破滅性」を告発した部分（4.1057-287）に顕著のように、「恋の激情」こそが「心の平安」を最も乱すものだという認識は、後に見るように Lucr. の強い影響の下に書かれた本作品の問題意識とも無縁とは言えない。

(c) 最も重要かと思われるのは、本作品には Cat. 51 での「恋の人生と詩作」「詩人としての生き方」の矛盾・齟齬に対する批判ないし揶揄が込められているのではないか、という点である。Cat. が上述のように当時「常識化」していた考え方を自らの恋と詩作の生活に当てはめて、その破滅の危険性を語ったのだとすれば、H はそこに Cat. の詩人としての生活と詩作の理念における矛盾を感じ取ったかもしれない。一つには Cat. 51 (4) 自体が、otium は厄介なものなのに、それに「浮かれはしゃぐ」自分自身への呼びかけによって、その破滅性を警告する形になっている点（otium に対する Cat. 自身の態度の両面性）にも矛盾が含まれているが、それ以上に、「恋の激情」と「（その前提であり、それをもたらした）閑暇の危険性」を語ることの食い違いである。一つの詩の内容的展開としてあり得ないわけではないが、少なくとも作品の途中で別の観点・視点が導入されていることになる*37。また何よりも、Cat. 自身が自らの「恋と詩作に生きる」一種の反逆的な生き方の前提として何度も otium を語っていた（Cat. 10.2 otiosum, 50.1 otiosi; 44.15 otio）、従っ

*36 Cf. Cat. 51.5 misero; Verg. *Aen.* 8.19-25 curarum ... pervolitat ... laquearia / tecti < Ap. Rh. 3.753-60 ἑρῶτες ... ἡελίου ὥς ... δόμοις ἐνι πάλλεται αἶγλη, etc.

*37 ただし、Cat. 自身が自らの「恋の激情」の描出に続けて「恋に身を滅ぼす」覚悟ないし自覚を（ut vidi, ut perii' とでも言うように）語っていると見るか、あるいは、(4) を Lesbia からの Cat. への返答と見る解釈（cf. André 223）を取るなら、全く別の話になる。

て *otium* とは、*negotium* に生きるローマ人の伝統的価値観への挑戦を指す言葉だったはずなのに、ここではその新詩人派的な *otium* が詩人としての生き方をも破壊しかねないという、いわば「常識的な見方」に同調してしまっている。そこに H は、Cat. の「詩人としての生き方」における *otium* の矛盾を見たのではないか。同じ詩人として、やはり *otium* の価値を尊重していた H が、そこに Cat. の「恋と詩作に生きる」生き方の不徹底を看取り、その詩人としてのあり方への批判をここに込めたとしても不思議ではない。そしてそれは新詩人派に対する詩論的な批判にも繋がるものであったように思われる*38。

このように、H は一方では Cat. のこうした矛盾を批判すると同時に、他方ではまた民衆の *otium* 認識に対しても一石を投じている。それは Cat. も民衆も *otium* を外在的な条件として捉えている点で共通しているからである。それに対する H の批判が、Epic. 思想を踏まえた *otium* の内面化とその詩人自身の生活と詩作への適用だったと言えよう。それによって H は、一方では Cat. の「常識的な見方」に反して民衆も危難に遭遇した時には「平穩」としての *otium* を尊重し祈願もすることを冒頭で提示し、他方でしかし、それは真の意味での *otium* 「心の平安」ではないこと、それは詩人自身のあり方（生活と詩作）において実現されているものだと示唆することで、詩人としての Cat. の *otium* 認識と民衆のその両方に対するアンチテーゼを提示している、と言えるのではないか。このように、Cat. の *otium*-stanza は単なる *anaphora* の先例などではなく、*otium* に関する省察の根幹に関わる刺激を H に与えたことが考えられる。

III. Lucretius との関連

すでに何度も触れた通り、本作品は Epic. 的な考え方を踏まえているが、特に *Lucretius* 第 2 巻序歌 (1-61) が全体として H. C. 2.16 に影響していることは多くの注釈者や研究者が指摘する通りである*39。類似点と相違点を概観し、*Lucretius* との関連性のもつ意味について考えてみたい。

*38 H における *otium* の重視については、cf. *Epod.* 1.7 *iussi persequemur otium*, *S.* 1.4.138 *ubi quid datur oti, / illudo chartis*, 1.6.128, *Epist.* 1.7.36 *otia ... liberrima*, 2.7.112. *otium* をめぐる詩人や文人の価値観と社会のそれとの相違の問題との関わりで Cat. 51 と H. C. 2.16 の関係を捉える見方は、cf. Hubbard 4-5. 新詩人派に対する H の批判的な姿勢については、cf. *S.* 1.10.17-9 (with K-H, Brown, Gowers ad loc.); Nettleship *esp.* 185-6, Ferguson *esp.* 1-5, Brink 160-1, 166-71, Hubbard 10-1; 下記注 77 も参照。

*39 *Lucretius* との関連については、cf. Büchner 198-201, Pöschl 82 ff., Syndikus 440-2, N-H 254-5, Lebek 2062-4, etc.

(A) 類似性と相違点

まずは、Lucr. 2 冒頭の嵐に巻き込まれる船人と戦い (1-6) が H の (1)-(2) に対応する。Lucr. は、それらを安全な場所から眺める喜びにもまして、「賢者の静穏な領域」にあつて世人の有様を見ること以上の喜びはないとして (7-9)、世の人々は人生の道に迷いつつ富や力を得ようと争い合いあくせくと奮闘しながらも、心は惨めで暗く、闇と危険の中で短い人生を過ごしていると言う (9-16)。この叙述は明らかに H の (3), (5) 連に対応する。特に Lucr. 14 *miseras hominum mentes* と H 10-1 *miseros tumultus / mentis*, Lucr. 16 *hoc aevi quodcumque est* と H 17 *brevi ... aevo* の類似が目を引く。その後、自然は肉体に苦痛がなく、心に不安や恐れがないことを要求するだけだとして (17-9)、ここから肉体と心に分けた論述が導かれる (20-36: 肉体、37-52: 心)。そして Lucr. は、肉体には僅かな物だけで事足りると言い (20-3)、その説明として、富裕の館は必要なく野辺の憩いで体は楽しく安らげるとして、紫のしとねの方が庶民の寝床より病気の熱が下がり易いわけではないと言う (24-36)。ここでも、20-3 は H (4) に、とりわけ 20 *pauca* が H 13 *parvo*, 14 *tenui* に対応し、また富裕の館の描写と H 7-12 の記述、特に Lucr. 28 *laqueata aurataque templa* と H 11-2 *laqueata ... tecta*, Lucr. 35 *ostro* (cf. 52 *purpureai*) と H 7 *purpura* (cf. 36 *murice*) の対応は顕著である。続けて Lucr. は心の問題に移り、富 (37 *gazae*, cf. H 9 *gazae*) も栄誉も王の栄光も肉体の役には立たぬ以上、心 (39 *animo*, cf. H 25 *animus*) にも無益だと言う (37-9)。ただし、武力 (またはその誇示)*40 によって、宗教的な畏怖の念 (44 *religiones*: 神々への恐れ) も死の恐怖 (45 *mortis ... timores*) も恐れをなして心から逃げ去り、心を不安から解放してくれるなら別だけれども、と言う (40-6)。「神々への恐れ」と「死への恐れ」をこそ除去すべき対象とするのは Epic. から受け継いだ Lucr. の一貫した問題意識だが*41、その締め括りに不安 (46 *cura*) が言及され、また富や栄誉・権力の無力さに引き続いて、武力・軍事力によってこれらの恐れや不安を追い払おうとする (虚しい) 試みが言及される点は、おそらくは H 7-8 から (3), (5), (6) へという展開に受け継がれた部分かと思われる*42。だが Lucr. はその直後に (47-52)、これらの武力 (またはその誇示) もお

*40 Lucr. 2.40 ff. では、41 *fervere cum videas belli simulacra cientis* と 43a *fervere cum videas classem lateque vagari* は前半部が重複するので両立し難いが、43a を読めば、実戦的な「陸軍と海軍」が揃い、また Lucr. 5.1226 ff. の記述にも合致するので、H (6) の *aeratas ... navis* と *equitum turmas* に対応することになる、cf. Pöschl 83-4. しかし、43a を捨てて 41 を読めば軍事パレード=武力の誇示を意味する。この一節と H との関連については、上記注 14 も参照。

*41 Cf. Epic. *EM* 123-7, 133, *Sent.* 1, 2; 大芝「序歌」27-8 + 注 32。

*42 H (3), (5), (6) における「積極的排除」(の試み) の含みについては、上の議論でも触れた。

笑い草だと分かれば、「実際には (re vera)」逆に恐れや不安の方が人間につきまとい (48 metus hominum *curaeque sequaces*)、武器や王 (王侯富者) や権力者、黄金や紫の輝きの中にも入り込む (50-2)、と語る。これは明らかに H (6) の「不安 Cura の方が軍船や騎馬隊に攻めかかり離れない」こと (またそれら軍事力に代表される富や力の無力さの含意) に対応する*43。こうして最後の一節で Lucr. は、こうした心の恐れと闇を振り払うためには (世界の実相を明らかにするような) ratio 「自然哲学の原理」がどうしても必要だ、と言うのである (53-4)*44。

このように、内容と詩句の類似性は明らかである。表現の上でも、Epic. 哲学的な思想内容が具象的なイメージで語られている点も、Lucr. の影響の現れと見ることができる。すでに触れた海上の嵐と戦い、富裕の館の ostro / purpura, auro, gazae, laqueata ... tecta、陸海の軍事力と Cura との戦いなどの共通点のほかに、H の pharetra, gemmis, (5) と (6) の狩りのイメージ、Grosphus を取り巻く家畜たちの様子なども、Lucr. から受け継いだ表現方法に即したものだと言えよう*45。しかし他方で、2 Aegaeo, 5 Thrace, 3 Medi, 33 Siculae ... vaccae, 35 Afro / murice などの固有名詞・形容詞は同時代のローマを取り巻く世界を描き出し、そして特に 9-10 consularis ... lictor と 13-4 paternum / splendet ... salinum にはローマの現実が投影されるよう工夫されている*46。

その一方で、Lucr. 8 「賢者の静穏な領域」への言及や、論述の大半 (17-52) が「肉体と心」の両面に分けた議論であること、そして不安や「心の恐れと闇」を振り払うための哲学の原理 ratio が最後に強調される点は、H には見られない要素である*47。しかし、「賢者の静穏な領域」への言及は内容的には H (7) で語られる Epic. 的賢者の「今を喜ぶ心」の自足の精神、「心の平安」を実現したあり方に対応していると考えられる*48。また、Lucr. が自然の要求を「肉体と心」の両面から説くのはやはり Epic. の教えに忠実だが*49、H ではこの区別はこれほど明確には表面に出て来てはいないものの、(4) 連の「質素な暮らし」

*43 上記 pp. 18-9 および注 13-16 参照。

*44 ratio の意味合いについては、cf. Fowler ad loc.、大芝「序歌」27-30。なお、Lucr. 2 序歌末尾の 55-61 は 3.87-93, 6.35-41 で (また 59-61 は 1.146-8 で) も同じく序歌の末尾に繰り返される移行部分で、改めて自然学の ratio の重要性を強調している。

*45 本作品の思想とイメージあるいは象徴的表現の関連については、cf. Latte 301-2, Syndikus 446-7, 450, D. West 114.

*46 Cf. Lebek 2064-5. これは後に触れる H の「ローマの抒情詩」への自負とも関わる。

*47 相違点については他に、cf. Syndikus 442.

*48 文脈上 *templa serena* は嵐の海の対極にあるので、*serenitas* = *tranquillitas* = *otium* を示唆するとともに、賢者の精神 *laetus animus* = *aequus animus* = *otium* = *ataraxia* にも通じる、cf. Fowler ad loc. (p. 55)、大芝「序歌」33 注 44。これらの比喩的表現も、Epic. 自身が *ataraxia* を「魂の嵐」からの平静になぞらえた類比を受け継いでいる：Epic. EM 128, 131, 135, fr. 425, 426, 434.

*49 Cf. Epic. EM 128, 131, *Sent.* 3, 18, 20, fr. 425, 434.

「つましい食卓」と(7)連の「自足する心」がそれぞれ「肉体」と「心」に対応していると言えるかもしれない。また ratio への言及は Lucr. が哲学的な用語を直接に用いる好例であるが、その点で H はより一般的な表現に置き換えている。つまり、Lucr. が散文的な議論展開や語彙を容認するのに対して、H はこの点で「詩的」な配慮を働かせている、と言うことができよう。

このこととも密接に関わるが、Lucr. の教訓詩的な「論述」と厳格な態度から H の抒情詩的な語り口と穏健な姿勢への変化にも留意しておきたい。Lucr. 2 は冒頭から、世人が嵐の海や戦いで苦しむ様子を哲学の静穏な領域から眺めおろす、というまさに「大衆から隔絶」した超然たる立場で、世の人々の愚かしい有様からの脱却がいかにして可能かを教示する、という姿勢が鮮明に示される。それに対して、H は大衆との生き方の違いを強くにじませつつも、例えば (1) の嵐の到来を恐れて祈る船人の姿は、遠く離れた安全な陸地から眺められたものではなく、詩人自らもその傍らに在るかのようであり*50、また (5) 17 iaculamur, 19 mutamus の複数一人称は、詩人もまたあくせくと生きる大衆の一人であるかのような表現である（にも拘らず彼は最後に「大衆への侮蔑」を語ることになるが）。さらに、(7) の oderit ... temperet という接続法は、aequus animus の理想は実のところまだ実現しているわけではないことをさえ仄めかしている。加えて、先に見たように、「心の平安」さえ実現できればそれ以上の幸福は望むべくもないという Epic. 的原則も、「全き幸福などない」という一般的通念に置き換えられている*51。最後の Grosphus と詩人自身の対照性に顕著なように、軽い皮肉混じりの諧謔性とも相俟って、その調子は概して穏やかなゆとりと軽妙さや柔軟さを保ち、まさに laetus ... animus ... lento temperet risu の詩句を実践するような趣きではないだろうか。

(B) Lucretius が目指すものとの関連

だが、Lucr. との関係で重要なことは、細かな詩句の対応や異同よりもむしろ、これらの作品で両詩人が目指したことの共通性と相違である。筆者は先に Lucr. 第 I 巻の序歌に関して考察し、この序歌において Lucr. は、哲学の原理 ratio と詩作の魅力 lepos を融合させた教訓的「哲学詩」によって、ウェヌスに象徴される Epic. 哲学の最高善たる voluptas = pax = ataraxia 「心の平安」を人々にもたらしたいという意志を表明している、とする解釈を提示した*52。この理解が正しいとすれば、この哲学詩人が目指した「心の平安」とし

*50 Cf. Pöschl 88.

*51 p. 20 (+注 24) 参照。

*52 大芝「序歌」14-36, esp. 26, 34-5.

ての *pax* = *ataraxia* の問題を、H は本作品において *otium* の問題として継承し、基本的に Lucr. の Epic. 的な問題意識を受け継ぐ形でこの作品を造形している、と考えられる。Lucr. 2 の序歌では *pax* や *otium* 「心の平安」に当たる言葉は現れない。しかし *cura* や *animus* への繰り返しの言及や「心の恐れと闇」「不安」を除去することが目標であることは明らかであるから、「心の平安」が問題の焦点であることは間違いない。そうした Lucr. の問題意識と詩作意図を最も端的に示しているのが、次の一節であろう：

Lucr. 5.1117-9

quod si quis *vera vitam ratione gubernet*,
divitiae grandes homini sunt *vivere parce*
aequo animo; neque enim est umquam penuria *parvi*.

だがもし人が真の原理によって人生を舵取りするならば、
人間にとってつましく、心安らかに生きることは
大いなる富だ。僅かなものに事欠くことは決してないのだから。

この一節の *aequo animo* はまさに「平穏な心」「心の平安」を言い表した詩句であり、それは Epic. 哲学の原理 *ratio* を指針として「つましい生活」を送ることで得られることが語られている*53。また第 I 巻序歌の「ウェヌス讃歌」後半部で、詩人が女神に「穏やかな平安 (31 *tranquilla pace*, 40 *placidam pacem*)」を繰り返し祈願した後、そうした「この上ない平安 (45 *summa cum pace*)」は実はすべての神々が本性的に享受しているものであることを語る一節の中の 42 *aequo animo* という言葉も、やはり *pax* = *ataraxia* を指している*54。このように、この *pax* = *aequus animus*こそが Lucr. の目指す「心の平安」つまり Epic. 哲学の最高善である快 *voluptas* = *ataraxia* を指す言葉であって、H の *otium* はまさしくこれに当たる。

だがさらに、同じ主題を受け継いだことにもまして注目すべきは、ここで H が Lucr. と同じく「(生き方の) 哲学」と「詩作」とを結びつけている、ということではないだろうか。哲学的な主題を抒情詩という詩形において扱うことで一貫した詩的造形を生み出すことに詩人はやはりそれなりの自負を感じていたのではないか。つまりこれはホラーティウス抒情詩における倫理的・哲学的主題の重要性という問題である。しかし、ここでもやはり、H は先輩詩人とは一線を画する独自の立場を示している。つまり、Lucr. が教訓的叙事詩人として世の人々に「心の平安」に至る原理 *ratio* を詩作によって教え諭そうとする

*53 上記注 7, 20 参照。aequus animus = otium については、上記注 23, 31 参照。この詩句はまた H 13 *vivitur parvo bene* 「つましい生き方」と 25 *laetus ... animus* (= aequus animus) の結びつきを端的に語っている。

*54 Cf. 大芝「序歌」21-3.

のとは違って、Grosphus という友人への忠告の形を取りながらも、H はあくまで自分自身の詩人としての生き方の理想を語り、世の人々、一般大衆からは距離を置くことを宣言する。その違いが、同じように Epic. 哲学に共感しつつ「哲学詩」を書いてはいても、教訓詩人ならぬ抒情詩人としての自覚に密接に関連することは疑いない。

そこで次には、彼のそうした「詩人としての生き方」を語る最後の一節の検討に移りたい。

IV. 最終連の意味 (Callimachus および Sappho との関連)

さて、最終連に至っていずれも大衆からは距離を置いた「生き方」と「詩作」の統合が語られていることには、どのような意味があるのだろうか。ここで 3 つの恵みとして示されたことはみな、見て来た通り Epic. 的な理想に関わると同時に、Callim. の詩作理念とも深く関わっている。Callim. 自身が「生き方」と「詩作」の密接な関連を示しており、「大衆からの懸隔」もまたそのどちらとも深く結びつく要素としてその作品の中に認められるからである。一つにはそれは、Callim. がその詩作理念を語るのに、しばしば「生き方」の隠喩を用いていたことによる。例えば、*Epigr.* 28 での「大道を厭う」「井戸の水は飲まぬ」「全て大衆的なものを憎む」などの言葉は、直接的には飲食をも含む生活の仕方を指しているが、それが大衆向けの、洗練を欠いた詩作に対する拒絶の隠喩であることは明らかである*55。 *hymn. Apoll.* 末尾の一節での、塵芥を押し流す大河の水と蜜蜂が集める精緻な泉のしずくの対比も、叙事詩圈的な粗雑な叙事詩と、精巧緻密で洗練された「小さな詩」という Callim. 的な理想の詩との対比を比喩的に語っている。中でも *Aetia* の序 (fr. 1 Pf.) は、まさにこうした隠喩的語法を大々的に駆使しながら自らの詩作理念を表明している部分として、また H のこの作品末尾にも直接的な影響を及ぼした一節として注目に値する*56。

(A) Callim. *Aet.* fr. 1 との関連

Fr. 1 ではまず、Telchines なる人々の批判に対する反論の形で Callim. 自身の詩作理念が語り出される。1-20 では長大な英雄叙事詩を要求する Telchines に対して、Callim. は小さくとも技術的洗練を凝らした精妙な詩を尊重する姿勢を語るのに、11-2 「ミムネルモス

*55 こうした隠喩表現のうち、特に「道」について詳しくは、cf. Wimmel 103-11.

*56 *Aetia*-prologue の全体的な意味については、Wimmel 71-123, Kambylis 75-89, Schwinge 20-4, Harder *esp.* pp. 10 f.

の甘さは細みの女たちが教えてくれた」*57、17-8「詩作の知は技で判定せよ」、19-20「大音声を轟かす歌を私に求めるな、雷を鳴らすのはゼウスであって私ではない」などの表現を用い、また 17 では「嫉みの拒絶」の姿勢を鮮明にする。続く 21-8 のアポッローン神の忠告も 2 つの部分 (21-4, 25-8) から成り、その中心となるのは 24 「ムーサは細くせよ」、25-8 「人の通わぬ狭い道に車を駆れ」である。前者が「細みの詩学」を指していることは明らかである*58。また後者は「大衆からの懸隔＝大衆的な詩作の拒否」と同時に、詩作の「新しさ (独創性)」と「細やかさ (洗練と彫琢)」を強く示唆する*59。このように、Telchines への反論にもアポッローンの忠告にも、「細みの女」「ほっそりとしたムーサ」「狭い道」には (食にも関わる生き方に関連する比喻によって) 「細みの詩学」が、また「嫉みの拒絶」「人の通わぬ道を行け」には「嫉み深い大衆の拒絶」が語られている。これらがそれぞれ H の「詩女神の細やかな息吹」と「嫉み深い大衆への蔑視」に繋がったと考えることは困難ではない。

(a) fr. 1.29-38 との関係

だが、焦点となる「質素な生活」と「細みの詩学」の合一・統合もまた、続く *Aet. fr. 1.29-38* に由来するものであった可能性がある。ここには直前のアポッローンの忠告に「従った」とする詩人の詩作姿勢が直接に表明されている：

Callim. *Aet. fr. 1.29-38*

τῷ πιθόμην· ἐνὶ τοῖς γὰρ αἰείδομεν οἱ λιγὺν ἦχον
τέττιγος, θόρυβον δ' οὐκ ἐφίλησαν ὄνων. 30
θηρὶ μὲν οὐρατόεντι πανείκελον ὀγκήσαιο
ἄλλος, ἐγὼ δ' εἶην οὐλ[α]χὺς, ὁ πτερόεις,
ἅ πάντως, ἵνα γῆρας ἵνα δρόσον, ἣν μὲν αἰίδω
προίκιοι ἐκ δίης ἥeros εἶδαρ ἔδων,
αὐθι τ]ὸ δ' ἐκδύοιμι, τό μοι βάρος ὅσον ἔπεστι 35
τριγλῶχιν ὀλοῶ νῆσος ἐπ' Ἐγκελάδω.
... Μοῦσαι γὰρ ὅσους ἴδον ὄθμα[τι] παῖδας
μὴ λοξῶ, πολιοῦς οὐκ ἀπέθεντο φίλους.

*57 11 行末の読みと解釈は不確定なので、12 ἡ μεγάλη ... γυνή との対比で αἱ κατὰ λεπτόν を「細みの女たち」として扱うが、何れにしてもこれは「細やかな詩」「小さな詩」の意と解されている、cf. Pfeiffer, *Altergedicht* 313-4, Wimmel 89-92, Hopkinson 93-4, Harder ad locc. (pp. 32-44).

*58 ムーサの細さが「犠牲獣は太らせよ」との対比で導かれる点は、詩作と食物の関係にも関わるので、「細みの詩学」と「質素な生活」との接点の一つになる。下記注 63 参照。

*59 Cf. Harder ad locc. (pp. 63-8). なお、ここにさらに詩人自身の「生きる道の狭さ」＝「簡素な生活」の含意を認めることも不可能ではないだろう、cf. Wimmel 103.

彼（アポッローン）に私は従った。私たちは蟬の澄んだ声を愛し
 ロバどもの騒ぎを厭う人々の間で歌うのだから。 30
 他の者は耳の大きな獣（ロバ）よろしく嘶くがいい、
 だが私はあの小さな、羽を持った者（蟬）でありたい、
 ああ全く、それは老いを露を、一方で露は、そのような歌を歌うためだ、
 それを神的な大気から恵まれた食物として摂りながら、
 他方で老いは、これを再び脱ぎ捨てるためだ、私には重荷なこと 35
 おぞましきエンケラドスにのしかかる三角島の如き老いを。
 ……ムーサイは、子供のころ斜に睨まなかった
 者を、白髪になって友から外すことなどないのだから。

ここでまず注目すべきは 33-5 ἵνα γῆρας ἵνα δρόσον ἦν μὲν αἶδω / προίκιον ἐκ δίης ἥερος εἶδαρ ἔδων / αὖθι τὸ δ' ἐκδύοιμι, ... という特殊な構造の詩句の含意である*60。冒頭の α πάντως という感嘆の表現から了解されるように、詩人は「小さな、羽を持った者（蟬）でありたい」との願望を述べた直後、ある高揚感の中で 2 つの目的節を続けざまに、入れ子式に語り出す。即ち、ἵνα γῆρας ἵνα δρόσον と、2 つの目的節を導く ἵνα に「老い」と「露」という各々の目的節中の中心的な対格目的語を付して、まずはいきなり 2 つ続けて提示してから（‘theme-construction’）、その後それぞれに目的語を 33 ἦν μὲν と 35 τὸ δ' という指示代名詞で受け直し、その後各々の目的節中の動詞 αἶδω と ἐκδύοιμι を配置することで、第 2 の目的節 ἵνα δρόσον ... ἔδων が最初の目的節の中に挟み込まれた形にしていると理解できる。つまり、2 つの目的節のうち、一方は「露を食物として摂りつつ歌う」（ἵνα δρόσον ἦν μὲν αἶδω / προίκιον ἐκ δίης ἥερος εἶδαρ ἔδων）、他方は「老いを脱ぎ捨てる」（ἵνα γῆρας ... / αὖθι τὸ δ' ἐκδύοιμι, τό μοι ...）ということで、いずれも「蟬」という詩人を象徴する昆虫の生態と信じられていたことを言うにほかならない*61。だがここで重要な点は、この最初の目的節の「露を食物として摂りつつ歌う」という詩句では、主動詞 αἶδω

*60 以下、この一節の構造理解と解釈は基本的に Friedlaender, Pfeiffer (ed.) ad 33 sqq., Wimmel 113 n. 4, Kambylis 82-9, Hopkinson 96-7, Harder ad loc. (pp. 75-81) に基づく。

*61 Cf. Pfeiffer, *Altergedicht* 324-5, Diller 119, Harder ad locc. (pp. 70-1, 74-81). αἶδω の接続法はより直接の関心事で現実的な目的を、ἐκδύοιμι の希求法はより遠くて実現可能性の少ない願望を指すと考えられる。また ἵνα γῆρας ἵνα δρόσον の順序にも拘らず、33 ἦν μὲν と 35 τὸ δ' の対応から、全体は ἵνα μὲν τὴν δρόσον αἶδω προίκιον ἐκ δίης ἥερος εἶδαρ ἔδων, ἵνα δὲ τὸ γῆρας αὖθι ἐκδύοιμι となり (cf. Hopkinson p. 96)、まずは「露を食べつつ歌う」ことで、その後（再び αὖθι）「老いを脱ぎ捨てる」という順序だと解される。想定読みの αὖθι が αὖθις (cf. Callim. *hymn. Dian.* 241; LSJ s.v. 3 'again, anew; hereafter') だとすると、蟬が抜け殻から脱皮して（＝老いを脱ぎ捨てて）成虫になって鳴いたあとに、「再び」脱皮して（何度も？）若返る、ということが想定されているのかもしれない。

と分詞 ἔδων のどちらもが、ἥν (= δρόσον) を目的語として取ると解される点である。つまり、*προίκιον ἐκ δίης ἥeros εἶδαρ ἔδων* という分詞句では、明らかに「露」をそれと同格に置かれた「天から恵まれた食物」と言い直している。これはもちろん *hymn. Apoll.* 末尾でアポローンが語る「蜜蜂たちが女神の元に運ぶ」「混じりけのない聖なる泉から湧き出す、清らかで／わずかなしづく、最上の精華 (III-2 ἥτις καθαρὴ τε καὶ ἀχράαντος ἀνέρπει / πίδακος ἐξ ἱερῆς ὀλίγη λιβάς ἄκρον ἄωτον)」と呼ばれている純粋な水にも通ずる、理想的な詩の靈感を象徴する水である。ここではその詩作の理想の水を、詩人は蟬のように「食物として摂りながら」歌うというのである。だが、ἥν (= δρόσον) の対格は同時に ἀεῖδω の内的目的語でもある。つまり、詩人が歌おうとするのは「露のような歌」だということである。これもまた、純粋で精緻な詩を象徴した表現であることは明らかである。このように、ここで Callim. が「蟬」に自らをなぞらえつつ、その理想とする詩のあり方を語る際に、同じ ἥν (= δρόσον) 「露」が「食物として摂る」ものであると同時に、「純粋で精緻な詩」を象徴するものとしても語られている。「理想の詩作の靈感」を受けて、それに相応しい「精緻な歌」を歌う（そういう詩を作る）ことが語られているわけである*62。だが、それを表現するのに、(常日頃に)「食物として摂る」対象でもあり、「歌う（詩作する）」ことの内的対格でもあるように語られている点が重要である。なぜなら、この表現が、「露だけを食物として摂る」といういわば究極的に「簡素な生活」と「細やかな詩作」との合致・統合として、H に受け止められたとしてもありえないことではないからである*63。しかも、*προίκιον ἐκ δίης ἥeros εἶδαρ* という言葉は、「神的な大気からの賜物である食物」ということであるから、これが *spiritum Graiae tenuem Camenae / ... dedit* という（「詩の女神の息吹」が運命の女神が与える「贈り物」として表現された）詩句を生んだ可能性もある。*spiritus* は ἀήρ の訳語としても用いられた言葉であるから*64、「神的な大気」ἐκ δίης ἥeros

*62 以上は Kambylis, Harder の解釈による。Wimmel, Hopkinson は ἥν (= δρόσον) は ἔδων の目的語だとし、ἀεῖδω と ἔδων の両方の目的語だとする解釈には懐疑的である。なお、Kambylis 85-8 は、δρόσον と εἶδαρ の関連を認めつつも単なる同格ではなく、34 の分詞句は 33 「露のような歌を歌う」ことと 35 「老いを脱ぎ捨てる」ことの両方にとって同時に前提条件となることだとし、前者は *metaphorische Redeweise*、後者は *reines Symbol* だと区別する。さらにまた p. 89 では、εἶδαρ ἔδων は詩人の詩作生活で普段に繰り返されることを表す現在分詞であって、ここは詩人の聖別・叙任 *Dichterweihe* の場面 *Berufungsszene* ではないという。

*63 このような食物と詩作の密接な関連については、Mette 136 ff. = 220 ff., Bramble 45 ff., 156 ff., Gowers, *The Loaded Table* 40 ff., cf. Pfeiffer (ed.) ad fr. 398. なお、こうした「生き方」と「詩作」のスタイルの結びつきとその点での詩人間の対立・論争に関しては、Callim. 自身が Aristoph. *Ranae* での Aeschylus と Euripides の *agon* で展開された批評に影響された可能性を Wimmel 115 n. 1 は細かなモチーフや詩句の対応関係から確認している。

*64 Cf. e.g. Cic. *N.D.* 2.18 ab aere eo quem spiritum dicimus; Plin. *Nat.* 2.10 spiritus, quem Graeci nostrique eodem vocabulo aera appellant.

が「女神の息吹」spiritum ... Camenae という表現を生み、εἶδ'απ「食物」との関連から、14 in mensa tenui「ささやかな食卓」に付された形容詞が spiritum に付され、その大気からの「贈り物」προίκιον が dedit に対応すると考えられる*65。

(b) 「老いの脱ぎ捨て」との関係

さて、ἀ πάντως の句が示す通り、Callim. は徹頭徹尾「蟬」になり切ることを願う。「露」を食物として摂りつつ、そのような「精緻な歌」を歌い続けることで、いま彼を圧迫している「老いを脱ぎ捨てる」ことを期待する。H がこの *Aet.* fr. 1 のこの一節を念頭に、本作の最終連で「質素な生活」「細やかな詩作（の靈感）」「大衆との隔絶」という形で「生き方」と「詩作」の理想を結びつけたのだとすると、Callim. のもう一つの（33, 35-6 の「第一の（ただし時間的順序では第二の）目的節」で語られた）「老いを脱ぎ捨てる」という願望は H には何の影響も与えなかったのであろうか。しかし、これについては、30 longa Tithonum minuit senectus にその反映あるいは関連を見ることができるようと思われる。

そこで改めて、H. C. 2.16 の最終 3 連の流れを振り返ってみよう。(8) では名誉は得たが短命だった Achilles と長い老齢に朽ち果てて行つた Tithonus の対比を受けて 31 mihi ... tibi ... で H と Grosphus の対比が導入され、それが (9)-(10) で両者の対照性へと拡大される。この展開は明らかに Callim. 29-38 の展開を受け継いでいる。図式的に示すなら次のようになる*66：

fr. 1.29-32	ロバの嘶きと蟬の対比	> (9) と (10) の対比へ
fr. 1.33-4	露を食物としつつ歌う	> (10) 「生活と詩作」の統合（上述）
fr. 1.35-6	老いを脱ぎ捨てたい	> (8) Tithonus とは対比的な恵み
fr. 1.37-8	老いの後もムーサは愛顧	> (10) 「偽りなき運命の恵み」

*65 προίκιον には πρώκιον という異読提案があるが、H 自身が προίκιον と読んでいた根拠として、*Epist.* 1.18.40-8, esp. 47-8 surge et inhumanae senium deponere Camenae / cenes ut pariter pulmenta laboribus empta が挙げられる。この詩で H は Callim. fr. 1.32-8 を踏まえてひねりを利かせているが、パトロンの意向に従う時には「非社交的な詩女神の老齢（＝陰気さ）を脱ぎ棄てよ」「労働で買い取った食事をパトロンと一緒に取れ」は明らかに Callim. fr. 1.33-5 を踏まえていると考えられるからである、cf. Macleod 41-3 = 215-7, Harder ad 34 (p. 78)。ちなみに、*Epist.* 1.18 のこの一節は、「露を摂りつつ歌う」ことで「老齢を脱ぎ棄てたい」という 33-5 の密接な結びつきを踏まえた上で、その順序と内容を逆転させている。即ち、「詩女神の老齢を打ち捨て」つまり詩作などせずに「食事（肉料理）を手に入れる」ように勧めているので、「簡素な食事>詩作>老齢脱却」を「老齢脱却>詩作なし>豊かな食事」へと逆転させており、今や哲学に生きようとする H が、Lollius にも詩作はやめるように促す点で、本作で詩人自身が Callim. 的詩人の自覚を語るのとは正反対になっている。詩女神が共通して Camena とされているのも偶然ではないだろう。

*66 Cf. N-H ad 34, 38, 39.

ロバの嘶きは H (9) の Grosphus を取り巻く家畜の騒がしさに、蟬のような「生活と詩作」は H (10) の詩人自身のそれに対応し、「ムーサイの変わらぬ愛顧」は H では「偽りなき運命」の恵みとしての「詩女神の息吹」に当たる。だが、Callim. の「蟬になりたい」という願望も、蟬のような生活と詩作の末に期待される「老いを脱ぎ捨てたい」という願望も、H では明示的には語られていない*67。しかし、その両者に対応するような願望が、H においては Tithonus との対比において、しかしより暗示的に語り込まれているのではないか。

というのは、この 2 つの願望は Tithonus 伝説と密接に関連するからである。*hymn. Aphr.* 218–38 では、Tithonus が年老いて弱ると Eos は彼を部屋に閉じ込めて見捨てたがその声だけは途絶えることがなかったとされ、後の伝承では彼は蟬に姿を変えたとも言われる*68。だが、Callim. の願望の要は蟬のように（蟬となって）「老いを脱ぎ捨てる」ことであるから、Tithonus が老齢の果てに蟬に化したとする伝承にそのまま従っているとは考えにくい*69。しかし他方で、37–8「ムーサイは詩人が老齢になっても見捨てない」と言うのは、Eos が彼を見捨てたとする伝説を踏まえてのことだと考えられる*70。つまり Callim. は、Tithonus–Eos の関係を自分とムーサイの関係とは対比的に捉え、老齢に朽ち果てて行くだけの Tithonus とは違い、ムーサイの愛顧を得ている自分は「老齢を脱ぎ捨てる」こともできると期待している、というわけである。もしも H が、Callim. のこの一節をそのような対比を含むものとして理解していたとすれば*71、30 longa Tithonum minuit senectus には Achilles の cita mors との対比はもちろん、H 自身との対比も意図されており、Callim. に自分自身をなぞらえる H もまた、Tithonus とは違って、31–2 et mihi forsan, tibi quod negarit, / porriget hora「私にももしや、君には拒否したものを時はやがて差し出してくれるかもしれない」と、何か別のある「恵み」を得る可能性を対置させていると考えられる。porriget という未来形は、むしろ将来に期待される恵みを指す。それが Callim. の願望「(蟬のように) 歌の力で老いを脱ぎ捨てる」に対応するとすれば、現在すでに Callim. 的な「生活と詩作」の恵みを受けている詩人も、やはり将来の「老いの脱ぎ捨て」つまり

*67 ちなみに、H には本作品以外にも「蟬」への言及はないが、Callim. *hymn. Apoll.* 111–2 に倣ったと見られる「蜜蜂のように詩作する」という表現は C. 4.2.27–32 に見られ、特にその最後の「ささやかな身で (31 parvus)」は Callim. fr. 1.32 οὐλ[α]χὺς, ὁ πτερόεις を踏まえている可能性が考えられる。

*68 Hellanicus (5 c. BC) *FGrH* 4F fr. 140 Jacoby; cf. N–H ad 30, Harder ad 35 (pp. 80–1).

*69 Diller 120, Crane 269–75 は、Tithonus が老齢の極みに「老齢を脱ぎ捨て」て蟬に変身し歌い続けた、とする伝承を踏まえたものと解するが、その場合には Callim. の「蟬になって」「露を食べて歌い続け」てから「老齢を脱ぎ捨てたい」という願望とは順序が逆になる。しかし、蟬への変身と老齢の脱ぎ捨てるのモチーフ自体は Tithonus 伝説の反映である可能性は否定できない（後述、Sappho との関連性および補論を参照）。

*70 Cf. Crane 269 ff.

*71 上記注 27 で触れたように、H (8) の 2 つの神話的範例が Callim. の願望を反転させた「不老不死にはなれない」例だとすれば、この可能性も高まる。

は「詩作による永遠の命」を、更にその先の恵みとして、ここでそれとなく暗示していたとしても不思議ではない*72。とすれば、語られる順序や願望の強さこそ違うものの、H もやはり Callim. と同様に「詩作による永遠の命」への期待を仄めかしていた、ということになる。そしてそれを含めて最終 3 連では *Aet. fr.* 1.29–38 をかなり忠実に踏まえていた、と見ることができる。確かに「老齡の脱ぎ捨て」＝「詩作の不滅性」の要素は本作ではあくまで暗示に留まるが、H も他の作品では詩作による永遠性を願望や宣言など様々な形で繰り返し語っており、その中には Callim. の「老齡の脱ぎ捨て」に通ずる詩句も見出される点を付け加えておきたい*73。

ところで、Fantuzzi–Hunter によれば*74、ここでの Callim. の「老齡の重荷」とは、詩論的に解するなら実際の詩人の老齡よりもむしろ「過去の重荷、伝統の重さ」の比喻であり、Telchines が詩人の子供っぽさを批判する (*fr.* 1.6) のも、伝統に縛られない詩人の詩作への批判だと考えられる。それに対して Callim. は「蟬」のように「老いを脱ぎ捨てる」、つまり伝統の重荷を脱却して、*Plat. Phdr.* 259 B–D に言うように「蟬＝最初の詩人」となっており、全く新しい作品を創始しようとしていることが、「蟬のように老いを脱ぎ捨てる」という比喻で表現されているのだという。興味深い解釈だが、しかし、もしこれがその通りであるとすれば、H にとってはこの点では少なくとも Callim. に同調できなかったはずである。なぜなら、最終 (10) 連の H の理想は、決してそのような伝統からの脱却を語ってはいないからである。言い換えると、H は Callim. に対しても全面的に同調しているわけではなく、やはり彼独自の立場を保っていることになる。次にその点を確認しておこう。

(B) Horatius 独自の立場の表明

最終連での H の「生活と詩作」の理想の統合には、明らかに Callim. に由来する要素だけでは説明できない点がある。その第一は、「詩女神の繊細な息吹」を語る 38 *spiritum Graiae tenuem Camenae* の詩句自体が、*spiritum ... tenuem* 「細やかな息吹」という Callim. 的要素と、*Graiae ... Camenae* 「ギリシアのカメーナエ」つまりギリシアの伝統を受け継ぐ

*72 N–H ad 30 は、Tithonus への言及には彼が蟬に姿を変えられたという「恵み」が示唆されているとした上で、ad 31 では ‘Horace is unglamorous and growing old, but he has the gift of song like the cicada (...), and perhaps also a poet’s qualified immortality’ と言う。

*73 E.g. *C.* 2.10, 3.30, 4.3, 4.9.1–12, etc.; 「老齡の脱ぎ捨て」に当たるのは、3.30.6–8. なお、*C.* 3.13 にも「子山羊の犠牲」による「群れの命の持続」と「泉の名を永遠にする詩作」に命の永続性と詩作の永遠性が示唆されていると解釈できる、cf. 大芝「*O fons*」。また、*C.* 2.16.17 *brevi ... aevo* の詩句もこの関連からは永遠に連なる詩作の営みとは対照的な世人の営みを強く印象づけ、最後の *malignum / spernere vulgus* に繋がることになる。

*74 Fantuzzi–Hunter 75.

イタリアの詩女神^{*75} という要素が、形容詞と名詞の組み合わせにおいて互いに交差配列された形 (AbaB) で組み合わせられていることである。それはまさに、Callim. 的な「繊細な詩作の靈感」を、ギリシア抒情詩の伝統に立つイタリアの、ローマの詩女神から受けるというあり方、つまり、Callim. 的な「細みの詩学」を継承しつつ同時に「ギリシアの伝統を受け継ぐローマの抒情詩」を創造しようとする姿勢の表明にほかならない^{*76}。それは、先にも触れたように、Cat. による試みを遙かに越えて、真に Sappho-Alcaeus に学びつつ現代ローマの抒情詩を創り上げるという自負の表明でもある^{*77}。そして第二に、Callim. に由来する「質素な生活」「詩女神の繊細な息吹」「大衆との隔絶」の3つの要素がみな *Parca non mendax* の「恵み」とされることで、すでに I 章末尾で確認した通り、それらが「つましさ」を根本に置くことで得られる *otium* 「心の平安」にも重なるものとして示されていることである。

この第一の点との関連では、改めて先の Tithonus への言及の更なる意味を考慮する必要がある。なぜなら、その言及には Sappho への allusion もまた含まれていると見られるからである。Sappho fr. 58 LP / Voigt にはこの女流詩人の「老いの嘆き」が歌われており、そこに Tithonus 神話への言及が含まれていたことは以前からも推測されていたが、2004 年に editio princeps が公刊された P. Köln (Inv. Nrn. 21351 + 21376) によってその具体的内容が確認された^{*78}。Callim. の一節は Sappho のこの詩を踏まえて「老いの重荷」を語り、Tithonus への直接の言及こそないものの「蟬への変身」でそれを仄めかしつつ、ムーサイの愛顧と詩作の力で「老いを脱ぎ捨てる」ことができるという（ある意味では Sappho 自身によっても示唆されていたかもしれない）願望を語ったものであった可能性がある。そして H の Tithonus への言及は Sappho のこの一節を直接に踏まえたものであることが十分

*75 Camena は元来はイタリアの泉の女神で、ムーサと同一視されるが、H ではしばしばイタリア・ローマの詩作の象徴として語られる (cf. *OLD* s.v. 1). C. 1.12.39, 3.4.21, 4.6.27; S. 1.10.45; C. S. 62 には特にその含みが認められる。ここの Graiae ... Camenae にも「ギリシアの伝統を受け継ぐローマの抒情詩」の含意が込められている、cf. N-H ad loc. 'Latin poetry in the classical Greek manner ... The paradoxical collocation with Graiae underlines the fusion of elements in Horace's lyrics', Hubbard 9-17, D. West 119.

*76 H はこのような意味での抒情詩人としての自覚を他の箇所でも繰り返し表明している: C. 1.1.29-36, 1.32.3-5, 2.13.21-40, 3.30.13-6, 4.3, *Epist.* 1.19.26-34, etc.

*77 言い換えれば、本作が Cat. 51 への批判的応答から始まったとすれば、そのことの帰結としても、Cat. らの「カリマコス主義」一辺倒への詩論的な批判を含む点でも必然的な締め括りとなっていると考えられる。その点で、先にも触れた S. 1.10.17-9 での「ギリシア古喜劇など読まない」新詩人派の垂流への批判とも一脈通ずるものがある。上述 pp. 12-3 および注 38 参照。

*78 editio princeps は Gronewald-Daniel, *Ein neuer Sappho-Papyrus*, eid., Nachtrag. Sappho fr. 58 に関するそれまでの解釈としては Di Benedetto, *Il tema*、新発見後の議論については、cf. Di Benedetto, *Osservazioni*, id., *La nuova Saffo*, Luppe, Bernsdorff, Schwermut, id., *Gedichtschlüsse*, West, *The New Sappho*, Hardie; Callim. fr. 1 との関連については、cf. Geißler. 本稿末尾の補論においてこの新たな詩との関連をやや詳しく見ておくことにする。

に考えられる。詳細は補論に譲るが、もしこの想定が正しいとすれば、H は Callim. の一節を踏まえつつ、さらにその Callim. が前提にしている Sappho の一節に語られた Tithonus 神話を直接引き合いに出すことで、Sappho の抒情詩の伝統と Callim. の詩学の両者を編み合わせた詩作を実践していたことになる。それは、この最終連での Callim. 詩学とギリシア抒情詩の伝統の両方を受け継ぐ姿勢の表明へと繋げる準備を、H がすでに (8) の段階から実地に始めていたことを示す。しかも、Sappho と Callim. の両者への allusion に際して、Sappho が Tithonus に託した「老いの嘆き」は明確に再現する一方で^{*79}、Callim. 的な「詩作による永遠の命」への願望に関しては、いかにも Callim. 的な仄めかしに留めている点も、両詩人と H の関係性に対応するかのような扱い方だと言えるかもしれない。

さてこのようにして、いわば Epic.-Lucr. 的な「生き方」の問題である otium 「心の平安」の理念と、同じく「生き方」の要素を含む「詩作」の問題としての Callim. 的な「細みの詩学」の理念が、「ギリシアの伝統に立つローマの抒情詩」への自負とともに、「質素な生活」「大衆との懸隔」の要素を共有しながら重ね合わされることになる^{*80}。従って、「質素な生活」と「細みの詩学」の統合という詩人自身の理想は、決してこの最終連あるいは最後の 3 連に至って唐突に持ち出されて来たわけではない。それは冒頭からの「otium に関する省察」からの展開として、世人の生き方との対照において詩人自身のいわば「私的」な問題へと収斂するという、いかにも抒情詩的な結末に向かって極めて自然に、必然的に到達した帰結だったと言えよう。こうして、冒頭から示唆された otium をめぐる Cat. 的な矛盾は解消され、Epic.-Lucr. 的な「つましい生活」を根本におくことで「心の平安」と同時に「生き方」と「詩作」の両面における理想的境地が詩人自身の身に実現することが語られているのである。

まとめ

H はおそらく Cat. 51 最終連に示唆された「詩人の人生」における otium の矛盾に刺激され、otium に関する省察の詩を otium-anaphora で始めた。そして、外的状況ではな

*79 特に、上記注 71 でも触れた「不老不死にはなれない人間の宿命」は、Sappho, P. Köln v. 16 ἀγήραον ἀνθρώπων ἔοντ' οὐ δύνατον γένεσθαι 「人の身で老いを免れることはできない」と語られていたことに合致する（補論参照）。

*80 これには Callim. の詩作理念自体にも Epic. 思想との親和性があつたことと関係するかもしれない。Callim. 自身も「つましい生活」を尊重する考え方を持っていたことは、Callim. *Epigr.* 26 のミキュロスの墓碑銘でも明確に語られ、また *Hecale* の物語からも窺われる、cf. Wehrli 75-6. ちなみに、*Epigr.* 26, 27, 28 では偶然か否か、26 「つましい生活」、27 Aratus の「細やかな詩句」、28 叙事詩圏の詩やあらゆる「大衆的なものを嫌う」という順序で、本作の最終連の順序の通りに 3 つの要素が語られている。

く「心の平安」としての *otium* に至る道筋を *Epic.* 哲学と詩作の融合によって説き明かす *Lucr.* に触発されて、同じく「生き方の哲学」と「詩作」を一体化させ、それを自分自身の「詩人としての生き方」の問題へと集約させる形で抒情詩的に造形した。最終連の「質素な生活」「細みの詩学」「大衆からの隔絶」の統合は *Callim.* に由来するが、「ギリシアの伝統を受け継ぐローマの抒情詩人」としての矜持は独自のもので、その根本に「つましき」という生き方の原則を位置づけることで「心の平安」も実現しうることが示唆される。最終連（あるいは最後の3連）になって唐突に詩人としての生き方の問題が導入されているわけではなく、冒頭の *Cat.* への批判的呼応に始まり、*Lucr.* に同調的な応答などを通じて、また *Grosphus* に仮託される世人の生の選択との *priamel* 的な対比によっても、*otium* をめぐる生き方と詩作の問題がずっと意識されており、それが最終連での詩人自身の立場の提示へと収斂する形に構造化されている。一貫した問題意識のもとに先行作品との動的な交流・対話を通じて新たな抒情詩作品を創り上げているところに、詩人の創造性の一端を認めることができる。

とすれば、この作品の本当の狙いはこの作品の性格そのものにあるのかもしれない。*Callim.* 的な詩作理念は本来、詩人自身の「技術」による詩的洗練によってこそ、精妙緻密な作品を創造することにその眼目があり、*Aet. fr.* 1.17 でも *Telchines* への応答にははっきりとその技術性が語られていた。しかし、後半のアポッロンの忠告以降は詩神の導きが前面に出て、29-38 では *Callim.* 自身も神懸かり的な高揚の中でもっぱら神的な靈感だけで詩作する詩人であるかのように語っていた*81。H がその一節を踏まえて自らの「生き方と詩作の統合」を語った時、彼は *Callim.* 詩学の要である「技術」を置き去りにしてしまっているように見える。しかし、H 自身は一貫して詩作の技術性を重視している*82。そして、ここでは詩作の源を神的な靈感に求める伝統的な語法に依拠してことさらに「技術」を語ってはいないが、この作品そのものがまさに *otium* の主題にふさわしい平静さを体現しており、その整然たる構造からしても入念に計算された「技術」の成果であることを如実に物語っている。そのようにして、サッポールの詩形に倣いその内容をも活かしつつ現代ローマの抒情詩へと創り上げている。ならばそれこそが、即ち、技術性を前提にした *Callim.* 詩学の理念とギリシアの伝統を受け継ぐローマ抒情詩の理念とを一体化させた作品の実例を示すということが、本作品が真に目指すところだったとも言えるのではないだ

*81 ただし、アポッロンの忠告自体の中に、特に 27-8「狭くとも人の通わぬ道に車を駆れ」の隠喩に示される通り、詩人自身の（技術による）入念緻密な詩作の労苦の含意が込められていることも確かである、cf. Harder ad 23-8, 25-8 (pp. 60, 63-8). *Callim. fr.* 1 での「靈感」と「技術」については、cf. Hunter 1-2.

*82 Cf. e.g. *S.* 1.4.6-13, 1.10.72-4, *C.* 4.2.27-32, *Epist.* 1.19.19-34, 2.1.224-5, 2.2.109-25, *AP* 31, 289-318, 408-18, etc.

ろうか*83。

(首都大学東京)

補論

まずは 2004 年初刊の Sappho の詩のテキストを掲げておく*84。初版の読みを基に、West による補遺から妥当と思われるものを選んで*85。疑義のある文字についても煩瑣を避けて敢えて区別しない。下線部は P. Oxy. (fr. 58 LP / Voigt) に残る部分を示す。

P. Köln vv. 9–20 = P. Oxy. (fr. 58 LP / Voigt) vv. 11–22

Ὕμνιν φίλα Μοῖσαν ἰ]οκ[ό]λπων κάλα δῶρα, παῖδ]ες,
 πρέπει δὲ λάβην τὰ]ν φιλάοιδον λιγύραν χελύνναν] 10
 ἔμοι δ' ἄπαλον πρίν] ποτ' [ἐ]οντα χρό]α γῆρας] ἤδη
 ἐπέλλαβε, λεῦκαι δ' ἐγ]έροντο τρίχες ἐκ μελαίν]αν],
 βάρυς δέ μ' ὁ [θ]ῦμος πεπόηται, γι]όνα] δ' [ο]ὐ φέρεισι],
 τὰ δὴ ποτα λαΐψηρ' ἔον ὄρχησθ' ἴσα νεβρίοισιν].
 τὰ <μέν> στεναχίσδω θαμέως· ἀλλὰ τί κεμ ποείην] 15
 ἀγήραον ἄνθρωπον ἔοντ' οὐ δύνατον γέν]εσθαι].
 καὶ γάρ π[ο]τα Τίθωνον ἔφαντο βροδόπαχυν Αὔων]
 ἔρωι εἰσανβάμεν' εἰς ἔσχατα γὰς] φέροισα[ν,
 ἔοντα [κ]άλον καὶ νέον, ἀλλ' αὐτον ὕμωσ ἐμ]αρψε[
 χρόνωι πόλιον γῆρας, ἐχ]ο]ντ' ἀθανάταν ἀκοιτιν]. 20

9 γεραίρετε Μοῖσαν vel Ὕμνιν φίλα Μοῖσαν suppl. Di Benedetto
 10 σπουδάσδετε καὶ τὰ]ν West, χορεύσατε κατ τὰ]ν vel πρέπει δὲ λάβην
 τὰ]ν Di Benedetto 11 ἔμοι δ' ἄπαλον πρίν Di Benedetto (West)
 12 ἐπέλλαβε, λεῦκαι δ' West, διώλεσε· λεῦκαι δ' Di Benedetto 18 δέπας
 εἰσανβάμεν' Gronewald–Daniel (Di Benedetto 2005, 18–20)

P. Köln では vv. 9–20 の前後に記された詩がこれに対応する P. Oxy. (fr. 58) vv. 11–22 の前後の詩行と全く異なることから、この 12 行は独立の詩であり、従来一つの詩を構成すると見られて来た fr. 58.1–10 と 23–6 も同じこの詩の一部ではないらしいこと、当該 P. Köln は Sappho の詩のアンソロジーであり、この詩に先立つ vv. 1–8 も後続の 21–2 も別の詩に

*83 本誌査読者のお二人には細部の問題点のほかに、本稿で論じた以外の詩的 allusion の存在をも指摘して頂いた。本稿ではそれらのご指摘を十分に考慮に入れることができなかったが、今後の検討課題としたい。ここに記して感謝申し上げる。

*84 P. Köln Inv. Nr. 21351 (fr. 1 [vv. 1–12] + fr. 2 [vv. 13–22]) + Nr. 21376 (vv. 16–20); P. Oxy. XV 1787 fr. 1–2 (vv. 1–26); そのうち P. Köln vv. 9–20 の 12 行分である。

*85 Di Benedetto, *Il tema*, id., *Osservazioni*, id., *La nuova Saffo*, West, *The New Sappho*.

属するものと考えられる*86。

この詩で Sappho は若い娘たち (παῖδες) に呼びかけ、彼女らに「紫色の帯を締めた〈ムーサたちの〉美しい賜物」に心がけ「歌を愛する音色よき〈豎琴〉」を手取るよう勧める一方で、自らの老いを嘆く。肌は衰え黒髪は白くなり、心は重く、かつては軽々と踊れた膝も弱った、それゆえ私は何度も溜め息をつくが、それが何になろう、「人の身で老いを免れることはできないのだ」と言って、Tithonus の物語を語り出す：「人の言うには、かつて暁の女神が恋ゆえに美しく若い彼を地の果てに連れて行った、だがその彼をもやがて白髪の老いが捕えた、不死なる妻を持った彼をも」と。このように、この詩は神話的範例のきっかけである Sappho 自身の老いの話題に戻らぬばかりか、Tithonus 神話のその後の結末も語られぬままに、いわゆる「開かれた結末 (der offene Schluß)」に終わっている*87。

この詩と Callim. fr. 1.29-38 との繋がりとしては、「詩作」と「老い」が密接に関連する文脈を指摘できよう。Sappho が娘たちに「ムーサイの賜物」への心がけを勧める一方で自らの「老い」を嘆くのに対して、Callim. は「ムーサイの愛顧」への信頼から「蟬となって歌う」ことで自らの「老いの重荷」を脱ぎ捨てることを期待する。詩作の営みと老齢への対処が密接な連関に置かれている点で、両者は共通している。詩句の上でも、Sappho 11, 20 γῆρας と Callim. 33 γῆρας の対応はもちろんのこと、9 〈Μοῖσαν〉ἰοκ[ό]λπων κάλα δῶρα と 34 προίκιον ἐκ δίης ἥeros, 10 φιλάοιδον λιγύραν χελύνναν と 29-30 ἐνὶ τοῖς γὰρ ἀείδομεν οἱ λιγὺν ἦχον / τέττιγος ... ἐφίλησαν, 13 βάρυς δέ μ' ὁ [θ]ῦμος πεπόηται と 35 τό μοι βάρος ..., 20 πόλιον γῆρας と 38 πολιοὺς などに対応が見られる。しかし、Sappho が若い娘たちに勧めるムーサイの賜物への心がけと自らの老いとを対照させ、老いを受け入れているのに対して、Callim. は「老齢になってもムーサイの愛顧は変わらない」という信念から、その賜物である詩作の力によって「老いを脱ぎ捨てる」ことを祈願する。Sappho では詩作の力による老いの克服や脱却の要素はほとんどないか、少なくとも顕著ではないように見える。

だが、Geißler によれば、この詩では Sappho-παῖδες と Tithonus-Eos の対照関係が対応し、永遠に若さを保つ Eos と同様に娘たちの集団は若くあり続けるのに対して、老いゆく Sappho は Tithonus に対応する。そして、この詩が神話的範例を提示するだけで結末を語らぬ「開かれた結末」に終わることで聴衆・読者にその先を補って考えることを促し、

*86 しかし、vv. 3-8 ... νῦν θαλί[ι]α πα[ρέ]στω / ... νέρθε δὲ γᾶς περ[ί]σχοι / κλέος μέγα Μοῖσαι[ον] ἔχοισαν γέρας ὡς [ἔ]οικεν, / πάντῃ δέ με θαυμά[ζ]οιεν, ὡς νῦν ἐπὶ γᾶς ἔοισαν / ...] λιγύραν, [α]ἴ κεν ἔλοισα πᾶκτιν / ... κάλα, Μοῖσ', ἀείδω には詩作による来世での栄誉を語る文脈 (cf. H. C. 2.13.21-32, esp. 24-5, 29-30) が読み取れ、特に「ムーサイの加護による死後の栄誉」というモチーフの点でこの詩 (さらには Callim. fr. 1 と H. C. 2.16) と内容的に無関係ではないと考えられる。Cf. West, The New Sappho 2-3, Hardie esp. 23-32, Geißler III + n. 29. また、fr. 58.23-6 も内容的に何らかの関連を考慮できる可能性が残る。

*87 この詩作技法については、cf. Bernsdorff, Gedichtschlüsse, Geißler.

その際に Tithonus が声だけになって永遠に生き続けたという伝承が前提となることで、Sappho もまた肉体的には老い朽ちて行っても、その声つまりムーサイの賜物たる詩歌だけは永遠であることが示唆される*88、そしてそれが Callim. においては「蟬になって歌い続けたい、そして老いを脱ぎ捨てたい」という願望に繋がった、と言う。確かに、ムーサイの愛顧と賜物により、死後にも詩歌の栄誉が続くという考えは Sappho にも fr. 32, 55, 65, 147 などに見られ、P. Köln vv. 3-8 にも類似のモチーフが含まれていることが窺われる*89。この詩においても Sappho は、*hymn. Aphr.* だけでなく Mimnermus fr. 1-5 での老いの嘆きなどを踏まえつつ、そこではもっぱら老いのおぞましさの象徴に過ぎなかった Tithonus (fr. 4) を、少なくともその声の不滅性において、ムーサイの賜物たる詩歌の永遠性を象徴する存在として肯定的に捉えていた可能性が考えられる*90。とすれば、詩作による死後の栄誉（永遠の命）を暗示的に語った Sappho に対して Callim. は明示的に語り、H は再びそれを仄めかすだけに留めた、と言えるかもしれない。

しかし、Sappho から Callim. へ（さらに H へ）の影響関係だけでなく、Sappho から H への直接の関連に注目すべきであろう。まずは、Sappho がこの詩で自らの老いを嘆きながらもそれを人間の避け難い宿命として受け入れていること、つまり v. 16 ἀγῆραον ἀνθρώπων ἔοντ' οὐ δύνατον γένεσθαι 「人の身で老いを免れることはできない」という認識を語り、それを端緒に Tithonus 伝説を語り出すこと、言い換えれば、その認識を具体的に例示するために Tithonus 伝説を持ち出している点に、H が (7) で「心の平安こそが願わしい」から「全き幸福などない」という認識へと語り進み、それを (8) の Achilles-Tithonus の神話的範例による「人は不老不死にはなれぬ」という認識に繋げている点との共通性が見出されよう。人間の宿命に対するこの諦念と自得の精神が Tithonus 伝説を範例に語られている点が、H の直接の模範となったとも考えられる。Callim. のようには「蟬への変身」も「老齢の脱ぎ捨て（詩による永遠性）」もさほど明確には語らず仄めかしに留めているのも、むしろ Sappho が Tithonus 伝説を通じて会得した人生の真実（それ自体がまた「ムーサイの賜物」の一つであろう）の方を H がより重く受け止めていることの現れと言えるかもしれない。本論でも触れたように、H がこの認識を転換点に自らの「幸い」としての「詩作の恵み」を（ありうべき「永遠の命」への暗示を込めつつ）語ることへと転じている点も、Sappho が「ムーサイの賜物」との対照において自らの「老いの嘆き」を語り出していたことの（順序を逆転させた）反映と見ることもできよう。しかしまた、Sappho が老いを嘆きつつも、若い娘たちに教える「ムーサイの賜物」を心の支えとも生き甲斐

*88 老齢になっても声や弁舌の能力に優れることは Nestor に代表されるあり方だという：Geißler 108, 111.

*89 上記注 86 参照。

*90 Cf. Di Benedetto, Il tema 157, Bernsdorff, Schwermut 33, Geißler 108 n. 14, 112; Crane 275.

ともしているとするれば、それはちょうど、Hがこの詩の中で自身の「心の平安」をもたらすような詩作に生きる生き方を語ることとも軌を一にしている。さらには、Sapphoが娘たちに対してある意味で「教師」のような一面を見せている一方で、老いの憂鬱と度々の嘆息という「私事」を語っているのと同じく、Hもまた Grosphus への忠告の形で otium をめぐる世人の生き方を批判的に論評しつつ、それとの対照において最後には自分自身の「私的な生き方の哲学＝詩人としての生」を語ることになる点も、無視できない類似性だと言えよう*91。抒情詩の模範としての Sappho の影響は Callim. からの詩論的な影響に劣らず重要だったことが窺われる。

参考文献表

テキスト；注釈書・注解書

Shackleton Bailey, Klingner, Garrod; Bentley, Kiessling-Heinze (K-H), Syndikus, Nisbet-Hubbard (N-H: *Carm.* 2), Quinn, D. West, Harrison (*Carm.* 2), Brown (*Sat.* 1), Gowers (*Sat.* 1).

論文・研究書等

André, J.-M., *L'Otium dans la vie morale et intellectuelle romaine*, Paris 1966.

Bailey, C., *Epicurus, The Extant Remains*, Oxford 1926.

—— (proleg., ed., tr. and comm.), *Titi Lucreti Cari De Rerum Natura Libri Sex*, 3 vols., Oxford 1947 (1986).

Barwick, K., Drei Oden des Horaz, *RhM* 93 (1950) 249–67.

Bernsdorff, H., Schwermut des Alters im neuen Kölner Sappho-Papyrus, *ZPE* 150 (2004) 27–35.

—— Offene Gedichtschlüsse, *ZPE* 153 (2005) 1–6.

Bramble, J. C., *Persius and the Programmatic Satire, A Study in Form and Imagery*, Cambridge 1974.

Brink, C. O., *Horace on Poetry*, vol. I. *Prolegomena*, Cambridge 1963.

Büchner, K., Horaz über die Gelassenheit: c. II 16, in: *Humanitas Romana: Studien über Werke und Wesen der Römer*, Heidelberg 1957, 176–202.

Commager, S., *The Odes of Horace, A Critical Study*, New Haven, Yale UP 1962 (Univ. of Oklahoma Press, Norman and London 1995).

Crane, G., Tithonus and the Prologue to Callimachus' *Aetia*, *ZPE* 66 (1986) 269–78.

Davis, G., *Polyhymnia, The Rhetoric of Horatian Lyric Discourse*, Berkeley-Los Angeles-Oxford 1991, esp. 205–15.

Di Benedetto, V., Il tema della vecchiaia e il fr. 58 di Saffo, *QUCC* 48 (1985) 145–63.

*91 Sappho の新たな詩に見られるこれらの諸側面については、cf. Hardie 27–32.

- Di Benedetto, V., Osservazioni sul nuovo papiro di Saffo, *ZPE* 149 (2004) 5–6.
 — La nuova Saffo e dintorni, *ZPE* 153 (2005) 7–20.
 Diller, H., Zu Kallimachos, *Hermes* 90 (1962) 119–21.
 Fantuzzi, M.–Hunter, R., *Tradition and Innovation in Hellenistic Poetry*, Cambridge 2004, esp. 66–76.
 Ferguson, J., Catullus and Horace, *AJP* 77 (1956) 1–18.
 Fowler, D., *Lucretius on Atomic Motion, A Commentary on De Rerum Natura Book Two, Lines 1–332*, Oxford 2002.
 Fraenkel, E., *Horace*, Oxford 1957.
 Friedlaender, P., Retractationes, *Hermes* 64 (1929) 383–4.
 Geißler, Claudia, Der Tithonosmythos bei Sappho und Kallimachos: Zu Sappho fr. 58 V., 11–22 und Kallimachos, *Aitia* fr. 1 Pf., *Göttinger Forum für Altertumswissenschaft* 8 (2005) 105–14.
 Gowers, E., *The Loaded Table, Representations of Food in Roman Literature*, Oxford 1993.
 Gronewald, M.–Daniel, R. W., Ein neuer Sappho-Papyrus, *ZPE* 147 (2004) 1–8.
 — — — Nachtrag zum neuen Sappho-Papyrus, *ZPE* 149 (2004) 1–4.
 Harder, A., *Callimachus, Aetia: Text, Introduction, Translation, and Commentary*, 2 vols., Oxford 2012.
 Hardie, A., Sappho, the Muses, and Life after Death, *ZPE* 154 (2005) 13–32.
 Hopkinson, N. (selected and ed.), *A Hellenistic Anthology*, Cambridge 1988.
 Hubbard, M., The Odes, in: *Horace* (Greek and Latin Studies: Classical Literature and its Influence), ed. C. D. N. Costa, London 1973, 1–28.
 Hunter, R., Winged Callimachus, *ZPE* 76 (1989) 1–2.
 Kambylis, A., *Die Dichterweihe und ihre Symbolik, Untersuchungen zu Hesiodos, Kallimachos, Propertius und Ennius*, Heidelberg 1965.
 Latte, K., Eine Ode des Horaz (II 16), *Philologus* 90 (1935) 294–304.
 Lebek, W. D., Horaz und die Philosophie: Die ‘Oden’, *ANRW* II 31.3 (1981) 2031–92, esp. 2061–5.
 Lefèvre, E., *Horaz, Dichter im augusteischen Rom*, München 1993, esp. 203–7.
 Luppe, W., Überlegungen zur Gedicht-Anordnung im neuen Sappho-Papyrus, *ZPE* 149 (2004) 7–9.
 Macleod, C., Callimachus, Virgil, Propertius, and Lollius (Horace, *Epistles* 1.18.39–66), *ZPE* 23 (1976) 41–3 = *Collected Essays*, Oxford 1983, 215–7.
 Mendell, C. W., Catullan Echoes in the *Odes* of Horace, *CPh* 30 (1935) 289–301.
 Mette, H. J., ‘genus tenue’ und ‘mensa tenuis’ bei Horaz, *MH* 18 (1961) 136–9 = *Wege zu Horaz*, hrsg. v. H. Oppermann, Darmstadt 1972, 220–4.
 Nettleship, H., *Lectures and Essays on subjects connected with Latin literature and scholarship*, Oxford 1885.
 Pfeiffer, R., Ein neues Altergedicht des Kallimachos, *Hermes* 63 (1928) 302–41.
 — (ed.), *Callimachus*, 2 vols., Oxford 1949–1953.
 Pöschl, V., Die Curastrophe der Otiumode des Horaz (c. 2,16,21–24), *Hermes* 84 (1956) 74–90 [= *Horazische Lyrik*, Heidelberg 21991, 118–42].
 Putnam, M. C. J., *Poetic Interplay, Catullus and Horace*, Princeton and Oxford 2006.
 Schwinge, E.-R., *Künstlichkeit von Kunst* (Zetemata 84), München 1986.

Usener, H. (ed.), *Epicurea*, Leipzig 1887 (Cambridge 2010).

Wehrli, F., Horaz und Kallimachos, *MH* 1 (1944) 69–76.

West, M. L., The New Sappho, *ZPE* 151 (2005) 1–9.

Wimmel, W., *Kallimachos in Rom*, Wiesbaden 1960.

Womble, H., Horace, Carmina, II, 16, *AJP* 88 (1967) 385–409.

大芝芳弘「*O fons Bandusiae*——Horatius, *Carm.* 3.13——」『西洋古典学の明日へ——逸身

喜一郎教授退職記念論文集』（大芝芳弘・小池登編 東京 2010）131–150.

——「ルクレティウスの序歌について」『フィロロギカ』10 (2015) 14–36.

プリアモスの説得の試み

— *Iliad* 22.56–76 —

平野智晴

本論は、ホメーロス『イーリアス』第22歌56–76行におけるプリアモスの説得の試みについて、背景となる文学的伝統を踏まえて再考するものである。当該箇所における解釈上の問題は、およそ以下の通りである。

叙事詩も終盤に差しかかり本歌に至って、遂に、ヘクトールとアキッレウスの一騎打ちが果たされることになる。青銅の武具を煌めかせイーリオンの都へと走って来るアキッレウスに気付いたプリアモスは、迎え撃とうと気負い立って城門の前に立つヘクトールに対して、戦わずに城壁の中に入るよう懇願する。王は、老いた我が身に降りかかるであろう惨めな最期を思い描いてみせることで最愛の息子に戦いを断念させようとするのであるが、それにもかかわらず、その締め括りの言葉にはいささか奇妙な響きが残るのである*1:

... νέω δέ τε πάντ' ἐπέουικεν
ἀρηϊκταμένω, δεδαϊγμένω ὃξείῃ χαλκῶ,
κείσθαι πάντα δὲ καλὰ θανόντι περ, ὅττι φανήη·
ἀλλ' ὅτε δὴ πολίον τε κάρη πολίον τε γένειον
αἰδῶ τ' αἰσχύνωσι κύνες κταμένοιο γέροντος, 75
τοῦτο δὴ οὔκτιστον πέλεται δειλοῖσι βροτοῖσιν.
(Hom. *Il.* 22.71–76)

……若者であれば誰であれ見栄えがするものだ、戦いで殺されて、鋭い青銅の剣によって切られて倒れることは。死んでも全てが立派なのだからな、目に映るものは何であれ*2。だが、討たれた年寄りの白髪と白髭と恥部を犬どもが辱めるとき、哀れな人間にとって、これより惨めなことはないのだ。

「若者であれば誰であれ見栄えがするものだ。死んでも全てが立派なのだからな、目に映るものは何であれ」——たとえ直後の老人の無惨な死と対比されるものであった*3としても、これが後代の読者に、解釈次第ではヘクトールに死ぬことを勧めているようにも

*1 ホメーロスのテキストは、Monro & Allen に拠る。

*2 ὅττι φανήη は、「彼の身に起こることは何であれ」という意味にも解釈しうるが (Leaf, p. 436, ad v. 73)、筆者は、「(彼の遺体について) 見られるものは何であれ」という、従来からの意味を採る (Richardson, p. 114, ad v. 73. cf. Murray & Wyatt, p. 457)。

*3 Richardson, p. 113, ad vv. 66–76; de Jong, pp. 75–76, ad vv. 71–6.

見えかねない、どこか場違いな印象を与えてきたことは否定できない*4。むろん、プリアモスの説得の試みが必死なものであることは、これに先立つ箇所でアキッレウスと戦わないよう懇願していることから明らかである：38-41 Ἔκτορ, μή μοι μίμνε, φίλον τέκος, ἀνέρα τοῦτον | οἷος ἀνευθ' ἄλλων, ἵνα μὴ τάχα πότμον ἐπίσπῃς | Πηλεΐωνι δαμείς, ἐπεὶ ἡ πολὺ φέρτερός ἐστι, | σχέτλιος, 56-58 ἀλλ' εἰσέρχαιο τείχος, ἐμὸν τέκος, ὄφρα σωῶσης | Τρῶας, καὶ Τρωάς, μηδὲ μέγα κῦδος ὀρέξῃς | Πηλεΐδῃ, αὐτὸς δὲ φίλης αἰῶνος ἀμερθῆς.*5 しかし、それでも、この箇所はテュルタイオスの若者に戦いを勧める一節と類似していることが知られているのであり、この「どこか場違いな印象」には全く根拠が無いと決め付けるわけにもいかない*6：

αἰσχροὺν γὰρ δὴ τοῦτο, μετὰ προμάχοισι πεσόντα
 κείσθαι πρόσθε νέων ἄνδρα παλαιότερον,
 ἥδη λευκὸν ἔχοντα κάρη πολὺν τε γένειον,
 θυμὸν ἀποπνεύοντ' ἄλκιμον ἐν κονίῃ,
 αἵματόεντ' αἰδοῖα φίλαις ἐν χερσὶν ἔχοντα— 25
 αἰσχροὶ τὰ γ' ὀφθαλμοῖς καὶ νεμεσητὸν ἰδεῖν,
 καὶ χροὰ γυμνωθέντα· νέοισι δὲ πάντ' ἐπέοικεν,
 ὄφρ' ἐρατῆς ἥβης ἀγλαὸν ἄνθος ἔχηι,
 ἀνδράσι μὲν θηητὸς ἰδεῖν, ἐρατὸς δὲ γυναιξὶ
 ζωὸς ἑὸν, καλὸς δ' ἐν προμάχοισι πεσών. 30
 (Tyrt. 10.21-30)

というのも実際、次のようなことは恥ずべきことだからだ、年寄りが前線にあって死に若者の前で倒れることは、もう髪も髭も白く強固な気概を砂に吐き出し、血塗れの恥部を自分の手で掴んで（目にするも恥ずべき、見るも憤るべきことである）、そして、肌を剥き出しにして。しかるに若者であればすべてが見栄えがするのだ、愛すべき若盛りの輝かしい花盛りの時期にある間は、生きていても男たちからは見るに驚嘆され、女たちには情欲の対象とされ、前線で死んだとしても立派なのだから。

従来、研究者たちは、以下に示す三つの立場のいずれかを採ってきた。すなわち、(1) テュルタイオスはホメロスの当該詩行を踏まえて自らの詩作品へと改作した；(2) ホメロスにおける 69-76 行はテュルタイオスの当該詩行からの竄入であり削除すべきで

*4 Richardson, p. 113, ad vv. 66-76. cf. bT 71-3 δοκεῖ τοῦτο προτρεπτικὸν εἶναι μᾶλλον ἐπὶ θάνατον ἢ ἀποτρεπτικόν... (bT のテキストは、Erbse に拠る)。

*5 cf. bT 71-3 ...καίτοι φαίνεται βουλόμενος πείθειν τὸν Ἔκτορα εἰσιέναι εἰς τὸ τεῖχος καὶ μὴ ὑπομένειν τὸν Ἀχιλλέα。

*6 テュルタイオスのテキストは、West に拠る。

ある；(3) ホメーロスもテュルタイオスも叙事詩的伝統に属する説教的な詩文の一節を利用しており、ホメーロスはこれを異なる文脈に用いた*7。

本論の目的は、これらのいずれが正しいのかについて結論付けることにあるが、まず、奇妙さの際立つ *Il.* 22.71–73 とりわけ 73 行について、対応関係にある *Tyrt.* 10.29–30 を参考にしてその意味するところを具体的に検討することから、考察を始めたい。

問題とすべき箇所を改めて引用し、比較してみよう：

πάντα δὲ καλὰ θανόντι περ, ὅττι φανήη·
(Hom. *Il.* 22.73)

ἀνδράσι μὲν θηητὸς ἰδεῖν, ἐρατὸς δὲ γυναιξὶ
ζωὸς ἑὼν, καλὸς δ' ἐν προμάχοισι πεσών.
(*Tyrt.* 10.29–30)

ホメーロスにおいては、直後の老人の無惨な死と対比させるためであろう、若者の死のみが言及されるに止まっているが、テュルタイオスにおいては、29–30 ἀνδράσι μὲν θηητὸς ἰδεῖν, ἐρατὸς δὲ γυναιξὶ | ζωὸς ἑὼν、すなわち「若者は、生きているときは国の男たち女たちから持て囃され……」という主旨の詩行が先行している。このため、テュルタイオスにおいて、後続する 30 καλὸς δ' ἐν προμάχοισι πεσών の主旨は、正確には「戦で死んでも国の男たち女たちから立派であると誉めそやされる」であろうことが理解される。ホメーロスにおいてもまた、99–110 行とりわけ 104–110 行における描写から、ヘクトールはこれを「国の男たち女たちから立派であると誉めそやされる」という意味に理解したであろうことが推測される。なぜなら、プリアモスとヘカペーの懇願を受けてヘクトールは次のように考えるからである。城壁に入ることはできない、というのも自らの向こう見ずのために兵士たちを殺してしまったので、**トロイアの男たちと女たちに恥じているからだ**、むしろ、戦いを挑んでアキッレウスを殺して戻って来るかポリスを護って**名誉の死を遂げる**かした方が遙かに得であろう、と：104–105 νῦν δ' ἐπεὶ ὤλεσα λαὸν ἀτασθαλίῃσιν ἐμῇσιν, | αἰδέομαι Τρῶας καὶ Τρωάδας ἐλκεσιπέπλους, 108–110 ἐμοὶ δὲ τότ' ἂν πολὺ κέρδιον εἴη | ἄντην ἢ Ἀχιλλῆα κατακτείναντα νέεσθαι, | ἢ ἐκεν αὐτῷ ὀλέσθαι ἐὺκλειῶς πρὸ πόλλης.*8

*7 三つの立場についての要約として、cf. de Jong, pp. 75–76, ad vv. 71–6; Richardson, pp. 112–113, ad vv. 66–76. なお、両者は共に第三の立場を採用している。

*8 アンドロマケの懇願に対するヘクトールの返答においても、これと類似した考えが示される：*Il.* 6.441–443 ἦ καὶ ἐμοὶ τάδε πάντα μέλει, γύναι· ἀλλὰ μάλ' αἰνῶς | αἰδέομαι Τρῶας καὶ Τρωάδας ἐλκεσιπέπλους, | αἶ κε κακὸς ὥς νόσφιν ἀλυσκάζω πολέμοιο·

して、ヘクトールが「トロイアの男たち女たちに対する恥と名誉」という感覚を抱いていることを、ヘクトールに一騎打ちを断念するよう懇願するプリアモスもまた、理解しているはずである。ゆえに、73 行においてプリアモスが言わんとするところは、およそ次のようなものとなるであろう：「なるほど、若者ならたとえ戦死して辱めを受けるとしても、国の男たち女たちから立派なことであると誉めそやされる。お前もそのように考えているのであろう（。だが、それはとんでもない思い違いである）」*9。

しかしながら、一騎打ちに気負い立つ息子を諫めるのに上記のような説得をわざわざ試みなくてはならないのだとしたら、むしろその背景には「若者であればたとえ戦死して辱めを受けても国の男たち女たちから立派であると誉めそやされる」という固定観念に英雄たちが縛られていた、という状況があったとすべきであろう。すなわち、プリアモスには、ヘクトールに説得を試みるために、まずこうした人口に膾炙した固定観念を自らの文脈に即して入念に覆してみせる必要があったのであり、私は、長らく場違いな印象を与えてきた当該の箇所意義もまた、このような前提において理解されるべきなのではないか、と考えるのである*10。

そもそも、当該詩行の前後を見渡すと、71-73 行を含む 56-76 行にわたるプリアモスの台詞の全体が、テュルタイオスの一節に窺うことができる若者に戦いを勧める詩文の一節を、自らの文脈に即して入念に覆えそうとしているように思われるのである。すなわち、*Il.* 22.56-59 において、プリアモスは、「戦わずに城壁に入れ。命を惜しんで国の男や女を助けよ。年寄りの私を憐れんでくれ」と説得を始めるのであるが、これは、*Tyrt.* 10.15-20 における若者に対する鼓舞、「踏み止まって戦え。戦いを挑むときは命を惜しんではない。年寄りを取り残して逃げてはならない」またはそれに類する表現を念頭に置いているように思われるのであり、また、*Il.* 22.60-71 において、プリアモスは、「（ヘクトールよ、もしお前が討ち死にすればトロイアは陥落し、）私は（、生きているうちは）、息子たちが殺され、娘たちが連れ去られ、物言わぬ幼子たちが地面に叩き付けられ、妻たちが連れて行かれるのを、目の当たりにしなければならないであろう」と続ける*11 が、これは、

*9 もっとも、これは、bT 71-3 の敷衍とはいささか異なる：*ὥς ἄρα καλὸν τὸ ἀποθανεῖν ὑπὲρ πατρίδος καὶ οἰκείων ἐπὶ λυσιτελείᾳ τῶν προσηκόντων, ἢ ᾗ ᾗ “πάντα δὲ τὰ τῆς αἰκίας καλὰ εἰσι τῷ θανόντι, ἔαν ἐκ τοῦ ἀποθανεῖν καλὸν τι φανῇ καὶ λυσιτελέῃ”*。

*10 アンドロマケの懇願に対するヘクトールの返答の続きにおいても、こうした事実があったであろうことが窺われる：*Il.* 6.444-446 *οὐδέ με θυμὸς ἄνωγεν, ἐπεὶ μάθον ἔμμεναι ἐσθλὸς | αἰεὶ καὶ πρότεροι μετὰ Τρώεσσι μάχεσθαι, | ἀρνύμενος πατὴρ τε μέγα κλέος ἦδ' ἐμὸν αὐτοῦ*。

*11 プリアモスがトロイア陥落に伴う災難を家族の崩壊という文脈に即して数え上げてみせることについて、cf. *Il.* 6.407-432。また、同様の災難を数え上げてみせることで、むしろ反対に戦いへと赴かせようとするについて、cf. *Il.* 9.591-596 (de Jong, pp. 72-73, ad vv. 56-76)。とりわけ後者は、国の陥落に伴う災難の描写がホメロスにおいても正反対の文脈に用いられ得る、という意味において注目すべき例である。

Tyrt. 10.3-10 における若者に対する鼓舞の理由付け、「(若者よ、もしお前が討ち死にせず国が陥落したら、お前は、) 何にもまして嘆かわしいことに、愛する母と、年老いた父と、幼い子らと、娶った妻と共に、貧窮のなか放浪しなくてはならないであろう」またはそれに類する表現を念頭に置いているように思われるのである。また、プリアモスは、トロイア陥落に伴う災難として、さらに、自分が殺された後その遺体が犬に喰われ辱めを受ける様子まで描き出して見せるが、これは、71-73 行の「若者の立派な死」によって対比される 73-76 行における「老人の無惨な死」への導入となっており、しかも、この 73-76 行は、Tyrt. 10.21-27 における「戦いにおける討ち死に」としての「老人の無惨な死」*12 またはそれに類する表現を、文脈に即して「敵に攻め込まれて討ち取られ飼い犬に喰い裂かれる」様子へと改変したものとなっているのである。

上記の考察を踏まえたとき、先に提示した三つの仮説の内、(1)、(2) が正しい可能性は低くなるであろう。なぜなら、(1) については、むしろプリアモスはテュルタイオスの一節に窺うことができる若者に戦いを勧める詩文の一節を前提とし、それを入念に覆そうとすることによって説得を試みていると思われることから否定されるべきであり、(2) については、もし竄入を疑うのであればその範囲はプリアモスの台詞の全体 56-76 行まで拡張しなければならず、それにもかかわらず当該詩行の個別の描写は「トロイア陥落に伴う災難」から「老人の無惨な死」に至るまで文脈に良く適合していることからやはり否定されるべきだからである。ゆえに、私は、(3) の可能性——ホメーロスもテュルタイオスも叙事詩的伝統に属する説教的な詩文の一節を利用しており、ホメーロスはこれを異なる文脈に用いた——が選択されるべきである*13、と結論付けるのである*14。

(東京大学)

参考文献

- Erbse, H. ed., *Scholia Graeca in Homeri Iliadem*, Vol. 5 (Berlin 1977).
 Gerber, D. E. ed. tr., *Greek Elegiac Poetry* (Loeb CL; Cambridge, Mass. 1999).
 de Jong, I. J. F. ed., *Homer: Iliad Book XXII* (Cambridge 2012).

*12 cf. Tyrt. 10.21 μετὰ προμάχοισι πεσόντα, 30 ἐν προμάχοισι πεσών.

*13 ただし、テュルタイオスの詩は、本論における比較から推測される限りにおいて、ホメーロスが前提とした詩作品のかかなりの部分を忠実に伝えている可能性があることも、認めなくてはならないであろう。

*14 本稿作成にあたって、本誌編集主幹大芝芳弘先生ならびに二名の匿名査読委員の方々から数々の貴重なご意見・ご助言を頂いた。作成に関わって下さった三名の先生方に、この場を借りて感謝の意を表したい。むろん、本稿に残る不備は、筆者の責任に帰するものである。

- Leaf, W. ed., *The Iliad*, Vol. II, *Books XIII–XXIV* (Amsterdam 1971).
Monro, D. B. and Allen, T. W. eds., *Homeri Opera*, Tomus I (OCT; Oxford 1920).
Monro, D. B. and Allen, T. W. eds., *Homeri Opera*, Tomus II (OCT; Oxford 1920).
Murray, A. T. tr., Wyatt, W. F. rev., *Homer: Iliad, Books 13–24* (Loeb CL; Cambridge, Mass. 1999).
Richardson, N., *The Iliad: A Commentary*, Vol. VI (Cambridge 1993).
West, M. L. ed., *Delectus ex Iambis et Elegis Graecis* (OCT; Oxford 1980).

プラトン『ポリテイア』I.334 D-E の ポレマルコス論駁

納富信留

プラトン『ポリテイア』第Ⅰ巻で、ソクラテスの第Ⅱの対話相手となるポレマルコスは、シモニデスの権威を持ち出して「友を益し、敵を害する」という正義の定義を提示する。その論駁はⅢ段階からなるが*1、第Ⅱ議論の最終部 334 D-E は文献学上・解釈上で問題があるにもかかわらず、これまできちんと検討されてこなかった。本論文はその読みと内容を再検討する。

まず、Slings の新 OCT 版 (2003) テキストを示す*2。

Resp. I.334 D-E

334d10 (1) Πολλοῖς ἄρα, ὦ Πολέμαρχε, συμβήσεται, (2) ὅσοι διημαρτή-
e1 κασιν τῶν ἀνθρώπων, (3) δίκαιον εἶναι τοὺς μὲν φίλους βλάπτειν,
πονηροὶ γὰρ αὐτοῖς εἰσιν, (4) τοὺς δ' ἐχθροὺς ὠφελεῖν, ἀγαθοὶ
γάρ· (5) καὶ οὕτως ἐροῦμεν αὐτὸ τούναντίον ἢ τὸν Σιμωνίδην
ἐφάμεν λέγειν.

d10 πολλοὺς F
Stephanus

e2 αὐτοῖς A prF x; Bekker et alii: αὐτοί D Fpc; Aldo,

写本上の読みの問題

問題となる E2 の読みは、αὐτοῖς (複数与格形) と αὐτοί (複数主格形) で分かれている。主要な ADF のⅢ写本を画像で確認したところ、Slings の異読情報にある通り、A 写本が与格形、D 写本が主格形であり、F 写本は一旦与格形で書かれた後で主格形に訂正されている*3。語末のシグマが上書きで雑に消され、イオタ上に鋭アクセントが加えられてい

*1 ケファロスを受け継ぐ導入部 (331 D4-332 C4) で、ポレマルコスは詩人シモニデスの「各人に借りているものを返すこと」という立場に依拠して正義の定義を提示する。それに対して第Ⅰ議論 (332 C5-334 B7)、第Ⅱ議論 (334 B8-335 B1)、第Ⅲ議論 (335 B2-E7) の吟味がなされ、結論 (335 E8-336 A10) が与えられる。

*2 Slings は Burnet から D の行数に 2 行ほどズレがある。基準となる Stephanus 版で 334 D は τοὺς δὲ ἀγαθοὺς から始まるが、Slings 版では Ἀλλὰ μὲν からとなっている。これは単純なミスと思われるが、混乱を避けるため、以下ズレたままの行数で参照する。

*3 新 OCT の初版には写本情報に誤植があることが、S. R. Slings, *Critical Notes on Plato's Politeia*, ed. G. Boter and J. van Ophuijsen (Leiden: Brill, 2005), 203 で報告されている。直して記載する。

る。シグマ上に置かれていた曲アクセントはそのまま残っている。

Boter, 190–200 によれば F 写本族には 6 つの写本が属するが*4、そのうち画像で確認できた x 写本では、F 上の訂正とは異なり、与格形が記されている。このことは、x が F の忠実な子写本ではないか、もしくは F 写本の訂正が x 作成の後でなされたかという可能性を示唆する*5。訂正が誰の手によるものかは画像からは判然としないが、D 写本系統の読みを書き入れたものであろう*6。

Aldo 版 (1513) と Stephanus 版 (1578) という 16 世紀の近代校訂版は、共に主格形で印刷している*7。その影響下で、19 世紀初めの Ruhnken 版 (1818) までその読みが通用してきた。だが、19 世紀初めの Bekker の校合により主要写本で与格形が記されていると報告され、Bekker 版 (1817) 以後、現代の校訂版は全て与格形を採用している。

だが、現代の校訂版でも異読情報に不正確さや不十分さが残っていた。Bekker は「ΑΘΞΦ^{tvr}」(彼の記号) の 7 写本が共通して与格形で、Stephanus 版など流布本のみが主格形をとると報告した*8。また、Burnet の旧 OCT 版 (1902) では D 写本の主格形に対して AFM の 3 写本が与格形とされており*9、F 写本の訂正には触れられていない。読みの強弱を判断する際に、これら不十分な写本情報が影響を与えた可能性がある。

まとめると、写本の読みは 2 つに分かれており、どちらも有力な典拠をもつ。だが、F 写本の訂正経緯やその継承を含めて不明な点も残る。Aldo 版以来の近代校訂版が主格形を採用していたのに対して、19 世紀以後は写本校合の結果が判然と示したと信じられた与格形を採用する流れに変わり、現在まで続いている。

*4 **Darmst.** (Darmstadt 2773 Misc. Gr., 13–14 or 14–15 C?), **x** (Florentinus Laurentianus 85, 7, 15 C), **Ricc.** (Florentinus Riccardianus 66, 15 C?), **v** (Angelicus 101, 15 or 16 C), **Ox.** (Oxoniensis Corpus Christi College 96, 15 C), **Bodl.** (Bodleianus Misc. Gr. 104 (Auct. F. 4.5), 16 C). なお、写本記号・情報も Boter による。諸写本の画像は瀧章次氏からご教示いただいた。感謝申し上げます。

*5 この事実は、Boter, 104 の記述に反する：The corrections by all the later hands in F recur in x and Darmst. この点を Boter 氏本人に E メールで照会したところ、以下の個人的回答を得た：Because the sigma has not been completely erased or canceled F in fact has both readings, αὐτοῖς and αὐτοί. This may explain why Flor. x has αὐτοῖς.

*6 Boter, 101–104 は、F 写本の訂正を 5 名の手 (F² から F⁶) に分けて検討しており、F³, F⁴, F⁵ の訂正が D 写本族の **Par.** 写本 (Parisinus 1810, 13 C?) の読み合致する傾向を指摘している。

*7 Aldo 版の校訂では **Par.** 写本が参照されたと Boter は示唆しており、主格形の読みはそれに由来する可能性がある。ただし、A 写本族に属するが、D 写本を一時所有したベッサリオンが作成させた E、N 写本の検討も必要である。

*8 Bekker, *Commentaria*, 4. そこに **Π** (= **D**) 写本の情報は記されていない。

*9 M 写本 (Caesenas D 28,4, 15 C?) についても画像で与格形であることを確認した。

解釈の問題

読みの選択は、文、及び議論の解釈と連動している。現代校訂版が採用する与格形をとる場合に、大きく2つの読み筋（A 解釈と B 解釈）が提案されている。*αὐτοῖς* の与格をどの用法で捉えるかで違いが生じ、根本的に異なる議論の筋となる。

それでは、ポレマルコス君、(2) 人間について*10 誤ってしまっている (1) 多くの人々には次のような帰結が生じるだろう。(3) 即ち、友を害することが正義であり——〈A〉彼らにとってその人たちが劣悪であるので／〈B〉彼らは劣悪な人を持っているので——(4) 敵を益することが正義である——〈A〉（彼らにとってその人たちは）善い人であるので／〈B〉（その人たちは）善い人であるので。(5) そうすると、私たちはこれが、シモニデスが言っていると私たちが主張したのとは反対だと言うことになる。

他方で、A 解釈か B 解釈かが不明な翻訳もあり、例えば Cornford、Grube-Reeve、藤沢らは *αὐτοῖς* の語を訳出していない*11。

A 解釈の検討

まず、与格形 *αὐτοῖς* を「彼らにとって」という判断主体を表す与格 *ipsorum iudicio* ととる Stallbaum の解釈は、当該文脈に整合的に見える*12。

第2 議論は、正義の定義に登場する「友／敵」について「実際にそうである／そう思われる」の区別を示して、そこから困難を導く。ポレマルコスは「各人にそう思われる人」という選択肢を採るため（334 C4-5）、この議論を通じて「誰に」に当たる与格形が決定的な重要性をもつ。そこで与格形は4 回用いられ（C1, C7, C10, C12：後で検討する）、続いて E2 で *αὐτοῖς* が登場することから、以前と同様に「彼らにとって（彼らの判断で）そ

*10 *τῶν ἀνθρώπων* の取り方で議論があり、「人間のうち」として *ἄλλοι* にかける部分属格か（Jowett & Campbell）、*διημαρτήκασιν* の目的語ととるか（Adam）に分かれる。後者を採る。

*11 F. M. Cornford, *The Republic of Plato* (Oxford: Oxford University Press, 1941): when they really are rogues / when they really are honest men; G. M. A. Grube, *Plato, Republic*, revised by C. D. C. Reeve (Indianapolis: Hackett, 1992): who are bad / who are good; 藤沢令夫訳、プラトン『国家』（岩波書店「プラトン全集 11」1976；岩波文庫（上）、1979）：その相手は実際には悪い人間なのだからね／その相手は実際には善い人間なのだからね。

*12 Stallbaum, 30: Multis igitur accidet, qui iudicio suo de hominibus falsi fuerint, ut iustum esse putent amicos laedere; improbi enim sunt ipsorum iudicio; inimicos vero iuvare; boni enim sunt. ... Dativus significat **ipsorum iudicio** (cf. *Phaedo* 101 D Dativum *σοι* interpreteris tuo iudicio, ut Reip. I. p. 334 E).

うである」という意味に取るのは、一見自然である。Stallbaum がこの説明を与えて以来、D. J. Allan、Waterfield らの翻訳でこの解釈が取られている*13。その場合、与格形が含まれる挿入は、次のような理由説明となる。

- (3) (本当の) 友を害する：彼ら (判断を誤る者) にとって悪い (と思われる) 人なので
 (4) (本当の) 敵を益する：(彼らにとって) 善い (と思われる) 人なので

この議論からは、判断を誤った人々が正義だと思っ^て行っている行為は、客観的にはシモニデス定義の正義とは反対になる。

他方で、この読み方には欠点もある。まず、(3) 「～にとって、ある」という与格形を他方の挿入文 (4) にも補って理解する必要がある。無理ではないにしても、やや不自然に感じられる。なお、与格形を「ある εἶσιν」にかける組み合わせは、文脈上不可能ではないが、直前に明確な用例はない (後の検討を参照)。

また、この解釈では、(1) 「判断を誤っている多くの人々」の場合、本人の主観的な理解と客観的な事態との間に矛盾が帰結することになるが、それは判断ミスに過ぎないとも考えられ、(5) シモニデスの定義そのものが退けられるとは限らない。

B 解釈の検討

Adam は Stallbaum の解釈を批判して、与格形を所有 possessive の意味で “for they have bad friends” と読むことを提案する。その読み方は、Adam に先立って Schleiermacher や Jowett & Campbell も採用していたが*14、その後も Shorey、Chambry、Vegetti、山本光雄ら多くの訳者によって採用されている*15。

- (3) 友 (善いと思われる人) を害する：彼ら (誤った判断者) は、悪い人を (友に) 持つので
 (4) 敵 (悪いと思われる人) を益する：その人は (本当は) 善い人なので

*13 D. J. Allan, *Plato, Republic, Book I* (London: Methuen, 1940): for them, i.e. in their eyes; R. Waterfield, *Plato, Republic* (Oxford: Oxford University Press, 1993): whom they regard as bad / whom they regard as good.

*14 F. Schleiermacher, *Platons Werke*, III-1 (Berlin: Realschulbuchhandlung, 1828), 85: denn sie haben schlechte / denn diese sind gut; B. Jowett & L. Campbell, *Plato's Republic*, III (Oxford: Oxford University Press, 1894): For they had bad ones.

*15 P. Shorey, *Plato, Republic Books 1-5*, Loeb Classical Library (Cambridge MA: Harvard University Press, 1930): for they have got bad ones / for they are good; E. Chambry, *Platon, La République*, I (Paris: Budé, 1932): puisqu'ils ont pour amis des méchants / qui sont en effet d'honnêtes gens; M. Vegetti, *Platone, La Repubblica*, I (Napoli: Bibliopolis, 1998): perché ne hanno di spregevoli / perché sono buoni; 山本光雄、プラトン『国家』(河出書房、1965): というのは彼らは邪悪な友人を持っているから / というのは善い敵を持っているから。

(5) シモニデス定義とは正反対になる

この解釈では、(1) 誤っている多くの人々にとって、シモニデス定義で本当の正義を行うことは、(5) シモニデス定義に矛盾する。ここから導かれるのは、ポレマルコスによる「思われる」という仕方での「友／敵」理解が、シモニデス定義に形式上の矛盾をもたらすという問題である。この場合は人々の判断ミスでは片付けられず、特定の場合であれ定義そのものに矛盾が生じるという批判となる。

この解釈には、3 点で構文的な問題がある。

第 1 に、先立つ 4 つの与格形は「～にとって」という意味であったが、ここの αὐτοῖς だけ「～が持つ」という異なる構文と意味で読むのは、いかにも唐突である。所有の与格を用いなくても、同様の内容は十分に表現できたはずである。

第 2 に、(3) で定冠詞なしの形容詞 πονηροί が主語となり「劣悪な人・悪い人」と実詞で訳すことになり、この点にも無理がある。

第 3 に、(4) の挿入文には与格形がなく、そこは通常「(彼らは) 善い人である」と解される*16。つまり、並行する (3) と (4) の挿入文で動詞 εἰσὶν の意味、及び構文と主語が異なることになる。この点も非常に不自然である。

与格形の検討

ここで、第 2 議論で用いられる他の 4 箇所の与格形を検討しよう。

ソクラテスによる最初の質問に与格形 (I) 「各々に ἐκάστω」(334 CI) が登場し「思われる δοκοῦντας」にかかる。ポレマルコスは一旦「人が有益と考える ἄν τις ἡγήται」(C4) という別の動詞で受けるが、ソクラテスは先の構文で (II) 「彼らには αὐτοῖς 有益であると思われる δοκεῖν」(C7) と語る。ここまでは問題ない。

その判断が誤ることがあると合意された後、(III) 「彼らにとっては τούτοις 善い人が敵であり、悪い人が友である」(C10) という逆説が導かれる。そこでは前と同様に分詞「思われる δοκοῦντες」が理解されて主動詞「ある εἰσὶν」が省略されていると解するのが自然であるが (III-1)、与格形が文頭に出ていることから、「思われる δοκοῦσιν」という主動詞(省略)にかかるようにも見える (III-2)。それぞれの場合を検討しよう。

III-1 彼らに善い（と思われる）人が敵であり、悪い（と思われる）人が友である

III-2 彼らにとっては、善い人が、敵と思われ、悪い人が、友と思われる*17

*16 ただし、前注の山本訳のように、そこにも与格を読み込む可能性もあり、その場合この問題点は生じない。

*17 G. P. Rose, *Plato's Republic Book I*² (Bryn Mawr, PA: Bryn Mawr Commentaries, 1983), 15 は、ἐχθροί, φίλοι に

意味上はどちらも可能であるが、「友／敵と思われる」という表現が前後の文脈で使われておらず、「彼らに思われる」という限定があくまで「善い／悪い」にかかることから、III-1 がより適切であろう。

続く質問でソクラテスは (IV) 「彼らにとって *τούτοις* 劣悪な人を益し、善い人を害することが正しい」(C12) と語る。ここでも与格形は III-1 のように「思われる」の分詞を伴い「劣悪な人」にかかるともとれるが (IV-1)、III-2 のように文章全体にかかり「正しい」を限定するようにも読める (IV-2)。

IV-1 彼らにとって劣悪な（と思われる）人を益し、善い（と思われる）人を害するのが、正しい

IV-2 劣悪な人を益し、善い人を害するのが、彼らにとっては正しい

IV-1 は、正義を行う場合に生じる主観的な矛盾を示す。IV-2 は判断を誤った人が行う正義を客観的に記述する文である。独立にはどちらも理解可能であるが、III-1 が適当とする場合、連動して IV-1 を採ることが自然であろう。ただし、III と IV で構文が変わっている可能性も排除はできない。

これら 4 つの与格形をすべてソクラテスが用いている点が注目される。構文的な両義性も含めて、与格が持つ問題性を示す意図があると考えられるからである。

ここでもう一つ、本論文の検討箇所の冒頭にある与格形 *πολλοῖς ... ὅσοι* (D10) にも注目しよう。それは *συμβήσεται* という動詞にかかるが、構文的には IV-2 (III-2 も) に近いからである。

与格の扱いは『ポリテΙΑ』で、また他の対話篇で哲学的な問題を生む。第 I 巻では、後にクレイトフォンが「思われる／実際に」の区別を持ち出そうとしてトラシュマコスに退けられる (340A-C)。言うまでもなく、これは第 5 巻以降のイデア論にとって決定的となる区別である。また、『テアイテトス』で検討されるプロタゴラス説は「～に、そう思われる・現れる」を「～にとって、そうである」と等置しており*18、相対主義をめぐる哲学議論に直結する。「思われる、ある」に関わる与格、つまり「誰にとって」という問題が、ポレマルコスの第 2 議論で予示されていると考えられる。

εἶσι を補う読み方を提案している。その場合は「彼らにとって、敵／友である」になる。

*18 *Thr.* 152A-C, 173A 等参照。

議論構成

B 解釈をとる Adam は、第 2 議論前半（以下の i-vii）は「正義とは、不正をしない人を害する」という不道徳を帰結し、後半（viii-x）は「正義とは、友を害して敵を益する」というシモニデス定義の矛盾を帰結するという「ディレンマ」として理解する。だが、その議論理解は正確か。2 部に分けて検討しよう。

前半部

- i 友について、「有益だと思われるだけの人／実際に有益な人」の選択肢を導入（334 CI-3）
ポレマルコスは「有益だと思われる人」を選ぶ（C4-5）
- ii 人間は判断を誤って、思われと実際を取り違える（C6-9）
- iii [ii の結果] 彼らにとって善い（と思われる）人（＝友）は（本当は）敵であり、悪い（と思われる）人（＝敵）は（本当は）友である（CI0-II : III-I を採る）
- iv [大前提 : iii を正義の定義に代入] 正義とは、彼らにとって悪い（と思われる）人（＝敵）を益し、善い（と思われる）人（＝友）を害する事になる（CI2-I4 : IV-I を採る）
- v [小前提*19] だが、善い人は、正しく、不正をなさない（DI-2）
- vi [iv と v からの結論] 正義とは、不正をしない人を害する事になる（D3-4）
- vii [vi の結論を否定] 言論が劣悪だった（D5-6）

この議論は三段論法の形式をとるが、大前提 iv に含まれる「彼らにとって」という与格形が小前提 v では欠落して推論されるため、実際には誤謬推論となっている。ポレマルコスが直感的に「言論が劣悪だ」と述べたのは（D5-6）、Adam の解釈のように結論が不道徳だからではなく、限定句欠落の誤謬を感知しての発言であった。

後半部は A 解釈と B 解釈で異なる議論に解される。まず、B 解釈を見よう。

後半部：B 解釈

- viii [vii を受けて vi の反対]（本当の）正義とは、不正な人を害し、正しい人を益することである（334 D7-9）

*19 J. D. Denniston, *The Greek Particles*, 2nd edition (Oxford: Clarendon Press, 1934), 346 はこの箇所を参照し、ἀλλὰ μὲν が小前提を導く用例としている。

- ix [i と ii を viii に代入] 判断を誤った人々にとっては、(本当の) 正義とは、友 (善いと思われるが、実際には悪い人) を害し、敵 (悪いと思われるが、実際には善い人) を益する事になる (D10-E3)
- x ix は、シモニデスの定義と反対である (E3-5)

この解釈では、前半の大前提 (iv) 「悪い人を益する／善い人を害する」と後半の結論 ix 「友を害する／敵を益する」が、同じ事柄を別の言い方で示している対になる。

後半部：A 解釈

- viii [vii を受けて vi の反対] 正義とは、不正な人を害し、正しい人を益することである (334 D7-9)
- ix* [i と ii を viii に代入] 判断を誤った人々にとっては、(客観的な) 友 (彼らに劣悪だと思われる人) を害し、(客観的な) 敵 (彼らに善いと思われる人) を益する事になる (D10-E3)
- x* ix* は、シモニデスの定義と反対である (E3-5)

主格形の採用

議論構成を比べると、形式上の矛盾を示すことでポレマルコスが理解するシモニデス定義の問題性を指摘する B 解釈の線が、より適切に思われる。だが、E2 の αὐτοῖς だけを所有の与格と解するのはあまりに不自然である。他方で、その与格を「関係、心性、観点」といった別の意味にとることも、複数の与格形が意図的に用いられるこの文脈の解釈としては安易に過ぎる*20。

そこで、D 写本と F 写本訂正を典拠にして、主格形 αὐτοί を読む選択肢が有力となる。その際、αὐτοί は判断や所有の主体「(判断を誤った) 多くの人々」ではなく、友や敵に当たる人をさす。

文法書の説明では、definite adjective / pronoun である αὐτός には (1) 強調で「自体・自身」、(2) 単独で指示代名詞「彼を、彼女を、それを、等」(斜格のみ)、(3) 定冠詞に先行されて「同じ」、の 3 つの意味があるが、主格が単独で用いられる (1) の強調では、対応する

*20 例えば、Rose, 15 は、dative of relation で “in their cases” と訳し τοῦτοῖς (C10) と同じに読む提案をしている。もし関係の与格と解すると「善い／悪い」の相対性を意味し、議論に不要の混乱をもたらすことになる。心性的与格 ethical dative もここでは意味をなさず、紛らわしいだけである。

代名詞がしばしば省略されるという*21。E2 を αὐτοί という主格で読む場合はこれに当たる。実際、αὐτοί が 3 人称複数の主語を受けて単独で用いられ、「彼ら自身が」という強意を帯びる用例は、プラトン対話篇で珍しくない。一例として次の箇所を挙げる*22。

Soph. 233 B: Καθ' ὄντινα τρόπον ποτὲ δυνατόι τοῖς νέοις δόξαν παρασκευάζειν ὥς εἰςί πάντα πάντων αὐτοὶ σοφώτατοι.

以上から、主格形で読むことは文法的に問題なく、写本上も一定の典拠があることから、334 E2 を αὐτοί で読むことを提案する。強調を表す主格形の読みは、文脈上も相応しい。ポレマルコスの前提から「友」とされる人が、実際には「彼ら自身は劣悪な人であるので」と強調して理由づけられる必要があるからである。その場合、翻訳は以下の通りとなる*23。

それでは、ポレマルコス君、(2) 人間について誤ってしまっている (1) 多くの人々には次のような帰結が生じるだろう。(3) 即ち、友を害することが正義であり—彼ら自身は劣悪な人であるので πονηροὶ γὰρ αὐτοὶ εἰσιν—(4) 敵を益することが正義である—(彼らは) 善い人であるので。(5) そして、私たちはこれが、シモニデスが言っていると私たちが主張したのとは反対だと言うことになる。

(東京大学)

主要参考文献

- Adam, J., *The Republic of Plato*, vol. I; revised by D. A. Rees (Cambridge: Cambridge University Press, 1902/1963).
- Bekker, I., *Platonis Dialogi graece et latine*, III-1 (Berlin: G. Reiner, 1817).
- Bekker, I., *In Platonem a se Editum, Commentaria Critica*, II (Berlin: G. Reiner, 1823).
- Boter, G., *The Textual Tradition of Plato's Republic* (Leiden: Brill, 1989).
- Burnet, J., *Platonis Opera* IV, Oxford Classical Texts (Oxford: Oxford University Press, 1902).
- Slings, S. R., *Platonis Rempublicam*, Oxford Classical Texts (Oxford: Oxford University Press, 2003).

*21 H. W. Smyth, *Greek Grammar*, revised by G. M. Messing (Cambridge MA: Harvard University Press, 1956), §§328, 1204, 1206a; W. W. Goodwin, *Greek Grammar*, revised by C. B. Gulick (New York: Ginn & Company, 1930), §989.

*22 他に、関係詞節の内の主語として使われる例: *Ap.* 22 B, *Phd.* 91 A, *Prot.* 342 D.

*23 草稿について栗原裕次、荻原理氏をはじめ科研研究会で有益な議論をしていただいた。本誌査読者と合わせて感謝申し上げたい。

Stallbaum, G., *Platonis Dialogos Selectos*, III-I, *Politiae* Libr. I-V (Gothae et Erfordiae, sumtibus Guil. Hennings, 1829).

「母がおじからきょうだいを」 (カトウツルス III 番 4 行)

友井太郎

I はじめに

Auffilena, uiro contentam uiuere solo,
nuptarum laus ex laudibus eximiis:
sed cuiuis quamuis potius succumbere par est,
quam matrem fratres ex patruo ...

I aut fillenam O, auffilenam (-mam R) X: -ena γ contemptam
O 2 ex Passerat (e iam Scaliger): est V est ...ex nimiis
Baehrens 3 pars V: corr. ζ 4 efficere ex p. 1472, ex p.
parere Doering, alii alia: lacunam exhibuit V

アウフィッレーナよ、ひとりの夫に満足して生きるのは
妻にとってなみはずれた榮譽の中の榮譽だ。
だが誰であれ女は誰とでも寝ることのほうがふさわしい
母がおじからきょうだいを……よりも。

(カトウツルス III 番*1)

カトウツルス III 番 4 行には 2 つの大きな問題がある。

- (1) 第一に、伝承されたテキストそのものの問題である。pentameter の I 行として成立するためには音節の数が足りず、構文上も不足が生じて意味を取ることができない。したがって、I-2 単語の欠落か、それ以上の損壊がこの行で起こっていることが確実である。
- (2) 第二に、解釈における問題である。matrem 「母」、fratres 「きょうだい」、patruo 「おじ」と家族や親戚を指す 3 つの語が続けざまに並べられているが、これらが具体的にはどのような親族関係を表しているのか判然としない。

本小論の目的は、これらの問題をめぐって行われてきた議論を概観し、(1) の問題につ

*1 本小論中、カトウツルスのラテン語本文とその apparatus criticus には、Mynors 校訂の OCT 版を用いる。
日本語訳は筆者による。

いて有力な校訂案の 1 つが最も支持できるものだと示したうえで、(2) の問題について新しい解釈の可能性を提出することである。

2 詩全体の内容

4 行目の問題に絞った本格的な議論を始める前に、まず III 番全体の内容を確認しておきたい。

呼びかけの対象となっているのはアウフィッレーナ Aufillena という女性であるが、III 番の直前に置かれた以下の詩によると、この女性はカトゥッルスとの情事の約束を破ったらしい。

Aufillena, bonae semper laudantur amicae:
accipiunt pretium, quae facere instituunt.
tu, quod promisti, mihi quod mentita inimica es,
quod nec das et fers saepe, facis facinus.
aut facere ingenuae est, aut non promisse pudicae,
Aufillena, fuit: sed data corripere
fraudando officiis, plus quam meretricis auarae (est),
quae sese toto corpore prostituit.

1 Auffilena V 2 quae] quia O 3 promististi V:
corr. γ 4 et B. Guarinus: nec V 5 promisse B. Gua-
rinus et Parth.: promissa V 6 aut fillena O, auffilena X
7 officiis Bergk, effectis Ellis, effecit β: efficit V est add. Calph.
8 toto γ, totam Westphal: tota V

アウフィッレーナよ、良き女友だちはいつも賞賛されるぞ。

彼女たちは自分がしようとすることの報酬を得ているのだ。

君は、自分が約束したことについて友だち甲斐なく私に嘘をついたので

しばしば与えずして持っていくので、悪を為しているのだ。

履行することが高貴な女のすることだ、あるいは約束しないことが貞潔な女の

アウフィッレーナよ、することだった。だが、義務において騙しつつ

与えられたものを奪い取ることは、全身をもって自分を売春に供する

強欲な遊女のすること以上である。

(カトゥッルス IIo 番)

この IIo 番では、情事の約束を守るか、貞潔な女として初めからそのような約束をしないか、どちらかにするべきだということが主張されている。続く III 番 1-2 行目「ひとりの夫に満足して生きるのは妻にとってなみはずれた榮譽の中の榮譽だ」 uiro contentam uiuere solo, | nuptarum laus ex laudibus eximiis は、IIo 番でいわれているような貞潔な女の

名誉を、生涯ひとりの夫としか結婚したことの無い女(いわゆる *uniuira*) の名誉とも重ねつつ、取り上げているといえよう。

ところが 3 行目には、「だが誰であれ女は誰とでも寝ることのほうがふさわしい」 *sed cuius quamvis potius succumbere par est* と、一転して多情、淫奔を許す内容が続いている。そして、4 行目 *quam* 以下では「誰とでも寝ること」のほうがいったい何よりもふさわしいのか述べられているようなのである。

3 テクストの問題

前節で述べた通り、III 番 4 行目は前行にある「誰とでも寝ること」 *cuius succumbere* との比較の対象になっていると考えられる。すると、*succumbere* に対応する動詞の不定法を補うことが、最初に検討されるべきこの行への修正案となるはずである。

それでは、どんな意味の動詞を補うべきか。3 行目でよりましとされているのは誰とでも交わることであり、4 行目には *matrem, fratres, patruo* と家族、親族を指す単語が並べられていることから、カトウツルスが多くの詩で取り上げている近親相姦^{*2}、もしくはそれに類するモチーフが、ここでも登場しているだろうと推測できる。そして、90 番では母とその息子との近親相姦によって生まれる子を取り上げられているのと同じように、III 番でも *matrem* が *patruo* と交わって *fratres* を産むという内容が述べられているのであろうとの考えをもとに、多くの補充案が提出されてきた。それらのうち有力なもののひとつは、15 世紀イタリアですでに提案されていた^{*3}という *parere* である。以下に分類する通り、最近の校訂本等の多くは (1) *parere* (または *te parere*) を補うか、(2) 何も補わないかのいずれかを選択している^{*4}。

(1a) *quam matrem fratres ex patruo parere*^{*5}

「母がおじからきょうだいを産むよりも」

Cornish (Loeb),^{*6} Lafaye (Budé), Thomson

(2a) *quam matrem fratres ex patruo ...*

^{*2} Rankin を参照せよ。

^{*3} Zicari, p. 155

^{*4} 選択されている案は他にも 1 つ存在するが、これについては次節で述べる。

^{*5} Trappes-Lomax, p. 293 および p. 305 (Bibliography) によれば、1834 年に Altona で出た F. G. Doering 校訂の版において、この修正案が提出されたという。なお、Trappes-Lomax もこの読みを支持している。

^{*6} Cornish, Postgate, and Mackail (trs.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris*. ただし、Introduction 中の記述 (p. viii) によれば、この版のラテン語本文は J. P. Postgate, *Gaii Valerii Catulli Carmina*, London 1889 をもとにしている。

Ellis (OCT),*⁷ Mynors (OCT), Quinn*⁸

(1b) quam matrem fratres te parere ex patruo

「お前が母としておじからきょうだいを産むよりも」

Friedrich,*⁹ Schuster (Teubner), Bardon (Teubner)

(2b) quam matrem fratres ... ex patruo

Kroll, Eisenhut (Teubner)

以上の通り、欠落を (a) 行末に想定するか、(b) 行中 fratres と ex patruo との間に想定するかでも意見が分かれている。そして韻律の都合上、行末の欠落に補えるのは parere である一方で、行中の欠落に補えるのは te parere である。では、欠落の位置は行末と行中どちらなのであろうか。この問題を検討するために参考となるのは、まず Zicàri の論考である。Zicàri は、pentameter の行末にくる音節は原則として長い行末に parere を補うのは不適當であるという説に対して、(1) カトゥッルスにその原則は必ずしも当てはまらない*¹⁰ ことと、(2) 行中に te parere と te 「お前が」も補うと、3 行目 cuiuis quamuis 「誰であれ女は誰とでも」など一般論で述べられてきた文脈と齟齬をきたすことを指摘する。この論考によって、行末に parere を補うという修正案に反対する根拠は薄弱であり、行中に te parere を補うという修正案を採用するのは難しいことが示されたと、私は考える。

もっとも、行中から te parere 以外の語が欠落したという想定は依然可能かもしれない。実際、fratres efficere ex patruo や fratres concipere ex patruo などと、parere 以外の動詞の不定法を補って parere 同様の意味を持たせる修正案が提出されてきた*¹¹。だが、Zicàri の論考には parere を採るべき理由が 3 つ挙げられている。(1) 碑文上のエピグラム CLE 980 = CIL II 3475 に matres が子供を産むという意味で parere が用いられ、かつそれが pentameter の行末に置かれているという類例が見つかる*¹²、(2) patruo parere という語の連続に頭韻

*⁷ Ellis (ed.), *Catulli Carmina*

*⁸ ただし、この版のラテン語本文は Mynors の OCT 版をもとにしているようであるし (Introduction 中にこの版の本文と Mynors の OCT 版のそれとの異同表 (pp. xxv–vii) が示されている)、註釈 (p. 450) では ex patruo の前か後に欠落があると述べている。

*⁹ Friedrich によって、この修正案が最初に提出された。

*¹⁰ Zicàri によれば、pentameter の行末が単音節である割合がオウィディウスでは 100 行に 1 回だけなのに対し、カトゥッルスでは 14 行に 1 回もあるという。

*¹¹ Ellis, *Catulli Veronensis Liber* は (自身の OCT 版とは異なり) 行中に concipere を補う修正案を本文として印刷している。また、Oksala, p. 101 は、parere よりも concipere のほうが意味上も用法上も適していると述べているが、具体的な例を引いての議論ではない。

*¹² ラテン語本文 (CLE による) および日本語訳 (筆者による) は次の通り。Hospes consiste et Thoracis perlege nomen: | inmatura iacent ossa relata mea. | saeua parentibus eripuit Fortuna m[eis] me | nec iuenem passast ulteriora frui. | nihi simile aspicias. timeant uentura parentes, | nec nimium matres concupiant parere. 「客人よ、

の効果が認められる、(3) 3 行目の行末 *par est* との類似が、4 行目の行末 *parere* が欠落してしまったことの理由になり得る。

これら Zicàri の挙げた理由に加えて、(Forsyth^{*13} が言うとおり) Merrill の意見^{*14} も行末に *parere* があつたという推測を補強するものである。Merrill は (1) *matrem, fratres, patruo* が途切れなく並べられていることが性的関係の混乱を示すのによく合っている、(2) III 番の直後の II2 番の 1 行目も行末に欠落が想定されており、現存の写本伝承の archetype は III 番 4 行から II2 番 1 行にかけて行末の部分が汚損されていたのではないか^{*15}、と述べている。

以上より、もし単純な語の欠落を想定するのであれば、その欠落は行末に置かれるべきである(単純な語の欠落以上の損壊を想定する修正案の検討は、次節で行う)。そして、提案されてきた中で現状もっとも蓋然性の高い補いは *parere* である。

4 解釈の問題

III 番 4 行のテキストの問題に続いて、次は解釈の問題について検討しよう。欠落した語とその位置については意見が分かれているにも関わらず、内容が「*matrem* が *patruo* と交わって *fratres* を産む」というものであることについては、特に異論が見当たらない。しかし、これを「母がおじからきょうだいを産む」と訳し、「ある女が自身のおじと交わって自身のきょうだいの母となる」と解釈すると、ただちに問題が生じる。もし、ある女が自身のおじと交わって子を産んだならば、女にとってその子供は自身のおじの子であるという理由で、自身の「きょうだい」でなく「いとこ」にあたるはずである。

最初に、この問題を解釈によってではなく、テキストの修正によって解決しようという考えを紹介することとする。Wiman が提出し^{*16}、Oksala が同意し^{*17}、Goold が自らの羅英対訳版^{*18} と Loeb 改訂版^{*19} で採用した修正案は、写本伝承の *patruo* 「おじ」を *patre*

立ち止まってトーラクスの名を読みたまえ。私の夭折した骨が戻って横たわっている。残酷なフォルトゥーナ(運命)が私の両親から私を奪い去り、若者がもっと先まで楽しむのを許さなかった。あなたは似たものを見ないように。両親は将来を恐れるように、そして母が多くを産みすぎることを欲しないように」。

*13 Forsyth, p. 222 n. 8

*14 Merrill, p. 261

*15 もっとも、この推測と *par est* との類似による *parere* の欠落という Zicàri の推測とは両立しないものではあるが。

*16 Wiman, p. 37

*17 Oksala, pp. 101–2

*18 Goold, *Catullus*

*19 Cornish, Postgate, and Mackail (trs.), Goold (rev.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris*

「父」に変え、*quam matrem fratres ex patre co*(ncipere) (「母として父からきょうだいを得るよりも」) とするものである。

なるほど、この修正案では *ex patruo* 「おじから」生まれた子がなぜ *fratres* 「きょうだい」になるのかという問題は解決する。しかし、疑問も残る。*concipere* のいわゆる意味上の主語である *matrem* を「母が」ではなく「母として」と訳せる理由は、この *matrem* が具体的には詩の呼びかけの対象の*アウフィッレーナ*だということであろう。すなわち、*Wiman* の修正した行は「*アウフィッレーナ*が母として父と交わり自身のきょうだいにもあたる子を産む」ということを意味しているというのである。だが *Zicari* の述べていた通り、この行は一般論として述べられている。だから、「母が父からきょうだいを産む」と直訳するほうが適当であるし、その場合にこの行は、子供からみての母が、子供からみての父との間に、子供からみてのきょうだいを産むという、あまりにも当たり前のことを述べているように見えてしまう。

もしも、父と娘が交わって子をなすという近親相姦への攻撃を効果的に行いたいのであれば、*matrem* 「母が」ではなく (*g*)*natam* 「娘が」とすべきであろう。先に挙げた 90 番は *matre* 「母」、*gnato* 「息子」という語を用いて近親相姦によって子が生まれる事態を描いている (3 行目) し、64 番 403-4 行も同様に *mater*, *nato* という語で母と息子の近親相姦に言及している。以上より、*Wiman* による修正案を受け入れることはできない。

テキストの修正によって解釈の問題を消し去ってしまうことができないとすれば、伝承されたテキストに立ち戻るしかない。そこで、伝承されたテキストに対して行われてきた解釈を検討していこう。

ex patruo 「おじから」*fratres* を産むという表現に対する解釈としてもっとも一般的なのは、この *fratres* が「きょうだい」ではなく *fratres patruales* 「いとこ」を指すのだというものである*20。註釈者、翻訳者の中でも *Ellis*, *Kroll*, *Lafaye*, *Quinn* らがこれを採用している。

ただし、この中で *Ellis* は、ある女が自身のきょうだいと交わったため、その間の子供たちにとって父は母のきょうだい、すなわちおじであり、子供たちはお互いにきょうだいどうしであると同時に、おじの子という意味でいとこどうしでもある状況 (図 1) を描いているというのが最もありそうだとしている*21。この少数説は *Kroll* によって、母のきょうだいは *patruus* ではなく *auunculus* であるという理由で斥けられており*22、私も特段擁護する必要を感じない。

*20 *frater patruelis* が「いとこ」の意であることについては、*OLD*², s.v. 'frāter' 2; *ThLL*, VI 1254.68 ff. を見よ。

*21 *Ellis*, *A Commentary on Catullus*, p. 493

*22 *Kroll*, p. 284

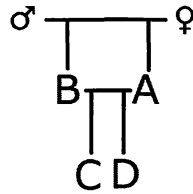


図 1

(図 1 においては、女 A が自身のきょうだい B と交わっている。子 C, D にとって A は母、B は母のきょうだい、すなわちおじとなる。子 C, D はお互いにきょうだいどうし (同じ両親の子) であると同時に、いとこどうし (おじの子) でもある。)

真剣に考慮されるべきは、ある女が母として自身のおじとの間に自身のいところにもあたる子を産むという状況 (図 2) を描いているとする多数説である。

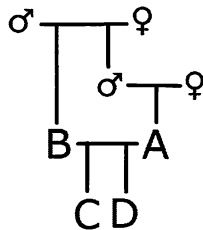


図 2

(図 2 においては、女 A が自身のおじ B と交わっている。子 C, D は、その母 A にとって自身のいところ (おじの子) でもある。)

Kroll も指摘しているように、クラウディウス帝とアグリッピナの結婚までおじとそのめいとの間の結婚は許されていなかった。したがって、上記の解釈を取った場合でもカトウツルス III 番 4 行の内容は近親相姦への攻撃となり得る。さらに Watson はこの解釈に基づき、III 番全体を捉えなおしている。アウフィッレーナは 1-2 行で描かれているような 1 人の男に忠実な女なのだが、その男は 4 行目で述べられている通り彼女のおじであるという状況を想定すれば、詩全体がより効果的なものとして解釈できるというのである*23。

*23 なお、Skinner, *Catullus in Verona*, p. 222 n. 84 に 'It is highly unlikely that Aufillena is actually married to her uncle, as Watson 1985 proposes' とあるが、実際には Watson は 'The marriage is not a real marriage, of course'

しかしながら、*fratres* は読み手の知識が前提できたり、文脈上明らかだったりしなければ一語で「いとこ」を意味しえず、したがって上で紹介したような解釈はできないという説がある。de Grummond は 1970 年に *The Classical World* 誌上で発表した論考で、これを主張した上で III 番への新しい解釈を提出した。もともと、直後の 1972 年に同じ *The Classical World* 誌上で Bush が de Grummond の説への反論を発表している。Bush はラテン語において *fratres* がそれだけで「いとこ」の意にも用いられうることを多くの例に即して論じており、de Grummond の出発点である *fratres* はそれだけでは「いとこ」を意味しえないという主張の正当性は薄い。また、Syndikus はいとこを *fratres* 「きょうだい」と呼ぶことが戦慄の効果を高めると述べているが^{*24}、これは誤解を招きかねない *fratres* という語があえて用いられている説明になりうる。

それでもなお、de Grummond が新たに提案する解釈には、魅力がある。彼はアウフィッレーナが夫との間に嫡出子 *legitimate child* をすでにもうけており、その子からみての母が、その子からみてのおじと交わって、その子からみてのきょうだいを産むという状況（図 3）を想定しているのだが、この解釈には *matrem*, *fratres*, *patruo* という家族、親族を指す名称が、誰からみてのものであるか統一されているという美点がある。他方で、女が母として自身のおじと交わりいとこを産むという解釈（図 2）の場合、*matrem* は生まれた子供から見ての母であるのに対し、*fratres*, *patruo* はその *matrem* からみてのいとこ、おじとなってしまう。

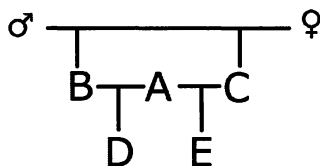


図 3

（図 3 においては、女 A が自身の夫 B との間に嫡出子 D を産んでいる。D からみての母 A が D からみてのおじ C と交わって、D からみてのきょうだい E を産む。これは A からみて、夫のきょうだいとの不倫である。）

こうした理由からか、Thomson は自らの註釈の中で de Grummond と Bush の論考のど

と書いている。Skinner の記述は誤読に基づくものか、少なくとも誤解を招くものであろう。同じ Skinner のサーヴェイ論文 Skinner, 'A Review of Scholarship on Catullus 1985–2015', p. 341 における Watson の論文の要約は、より正確である。

*24 Syndikus, p. 132

ちらも参考文献として挙げつつ、前者の想定する状況が最も説得力があるものだと述べている。また、Bush のいう通りに *fratres* が「いとこ」の意にとることができる語だとしても、無論「いとこ」の意にしか取れないということにはならない。Skinner は、*fratres* は「いとこ」であり、アウフィッレーナは自身のおじと近親相姦したという解釈(図 2)と、*fratres* は「きょうだい」でありアウフィッレーナは自身の夫のきょうだいと不倫したのだという解釈(図 3) いずれの可能性も認めたうえで、そのどちらかだけを選ぶべきではなく、この詩は両義性によってアウフィッレーナの家のごちゃごちゃした血縁関係を示唆しているのだと述べている^{*25}。

このように、*fratres* を「いとこ」ではなく「きょうだい」と訳し、アウフィッレーナが自身の夫のきょうだいと不倫していたとする de Grummond の説は、一定程度受け入れられているようである。しかしながら、この読み方にも問題があると、私には思える。それは、(Wiman によるテキストの修正案を斥けたときと同様に) *matrem* の解釈をめぐってのものである。de Grummond は *matrem* が 2 行目の *nuptarum* 「妻」と対になっていると考える。そして、アウフィッレーナがひとりの夫に満足しないことで妻としての夫への義務を果たさず、夫のきょうだいとの間に不義の子をなすことで母としての嫡出子への義務も果たさないというのが、III 番の要点だというのである。しかし、II0 番、III 番とつながる文脈を考えに入れば、この解釈には疑問が生じる。II0 番でカトゥッルスはアウフィッレーナが自身との情事の約束を破ったことを非難している。間男志願者のカトゥッルスに、アウフィッレーナの不倫を非難する正当性もなければ、動機もないのではないだろうか。

カトゥッルスが III 番 1-2 行目で一般論的に名誉ある妻のことを書いたのは、3 行目で 4 行目の内容よりましとされる多情、淫奔と対比するためであり、ことさらアウフィッレーナ自身の妻としての義務の放棄を攻撃するためだとは思えない^{*26}。それゆえ、4 行目で母としての義務の放棄を攻撃しているというのも、あまりありそうにないことである。そもそも、アウフィッレーナはすでに子供をもつ母であるということは、詩集の中で他のどこにも書かれていないことである。その状況で言われる *matrem* が果たして母としてのアウフィッレーナを意味しうるのか、そしてどこにも存在を明記されていない子供を *matrem*, *fratres*, *patruo* と呼ぶときの視点とすることができるのか、疑問が残る。

^{*25} Skinner, *Catullus in Verona*, p. 136

^{*26} Watson のいう通り 1-2 行目がアウフィッレーナとそのおじとの間の faithful union を揶揄するものという可能性はある。この解釈は、III 番全体の統一性を説明するものとしてはもっとも整ったものであるとさえ評価し得るだろう。しかしながら、なぜ 4 行目に *matrem* という語が用いられているかの説明はできていない。

さて、準備が整ったところで私からの新たな解釈の提案を行う。これまで説明してきたように、matrem にアウフィッレーナを当てはめる困難が III 番の解釈の急所となっているようである*27。私はこの matrem がアウフィッレーナ本人ではなく、アウフィッレーナの母を指している可能性を指摘したい。同様に、fratres はアウフィッレーナのきょうだい、patruo はアウフィッレーナのおじを指すとする。この場合、アウフィッレーナの母がアウフィッレーナのおじ、すなわち母の夫のきょうだいとの間に、アウフィッレーナのきょうだいに当たる子供を産むという状況（図 4）が想定されていることになる。

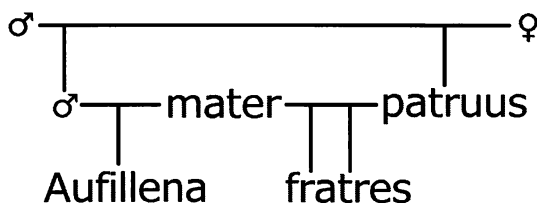


図 4

じっさい、アウフィッレーナの男きょうだいアウフィッレーヌスは、以下に示す 100 番の詩ですでに存在が明らかになっているのである。

Caelius Aufillenum et Quintius Aufillenam
 flos Veronensum depereunt iuuenum,
 hic fratrem, ille sororem. hoc est, quod dicitur illud
 fraternum uere dulce sodalicium.
 cui faueam potius? Caeli, tibi: nam tua nobis
 perspecta ex igni est unica amicitia,
 cum uesana meas torreret flamma medullas.
 sis felix, Caeli, sis in amore potens.

1 Gellius O, Caelius X aufillenum, -nam V 2 treronensum O, ueronensum G, trenorens al. ueronensum R depereunt η: depereret V (al. -ant R) 6 perspecta ζ: perfecta V ex igni Schöll (sed ex uix recte), egregie Baehrens: est igitur O, est exigitur G, est igitur al. exigitur R

*27 Friedrich が行中への te parere 挿入を提案する理由も (1) patruo という決定的な語を詩の最後に置きたいということに加えて、(2) cuius に patruo が対応しているように、quamuis に te を対応させなければならないということである。ここにも matrem だけでアウフィッレーナを指すのは困難であるという判断が存在しているものと考えられる (p. 545)。また、Forsyth, p. 222 もアウフィッレーナが自身のおじと交わって自身にとってのいとこにもあたる子を産むというだけではアウフィッレーナを mater と呼ぶ必要はないとして、彼女にとって自身のいとこ fratres にもあたる子が彼女の他の子供にとってのきょうだい fratres になるという、frater の両義性を利用した表現になっていると解釈している (fratres がアウフィッレーナの子供からみての「きょうだい」であるという点は、de Grummond の説を一部取り入れているといえる)。

カエリウスはアウフィッレーヌスに、クウィントウスはアウフィッレーナに
 ウェーローナの若者たちの中の花が死なんばかりに恋い焦がれている、
 この男は男きょうだいに、あの男は女きょうだいに。これはいわゆるあの
 実に甘美なるきょうだいの結びつきである。

私は誰のほうを応援しようか。カエリウスよ、君をだ。というのも、君の私への
 唯一無二の友情は火によって確かめられたのだから、
 狂った炎が私を骨の髄まで焼いていたときに。

幸運であれ、カエリウスよ、恋において有力であれ。(カトゥッルス 100 番)

また、*mater* という単語の用例はカトゥッルスの詩集の中に 30 あるが*28、属格、与格
 や人称形容詞による限定なしで呼びかけの相手の母を指しているものが、そのうち 4 つあ
 る*29。*mater* という単語は、それだけで「あなたの母」を意味しうるといえる。

アウフィッレーナ本人ではなく、アウフィッレーナの母の不倫を攻撃するのは、先に取り
 上げた Skinner のように、アウフィッレーナの家系の血縁の錯綜、家のスキャンダルへの
 攻撃だと考えてよいだろう。家のスキャンダルの暴露として、カトゥッルスには 67 番と
 いう類例がある。そして、女性個人の多情、淫奔の方がこのような家のスキャンダルより
 ましだという攻撃は、110 番の文脈とも合致していると考えることができる。アウフィッ
 レーナの家のように姻戚関係の内部で不倫をされると、その外部のカトゥッルスには入っ
 ていく隙がなくなる。だから、110 番のように情事の約束を破られることにもなる。こん
 なことなら、誰とでも寝る女の方がましだ。このように、111 番を解釈することが可能で
 ある。

5 結論と展望

(1) カトゥッルス III 番 4 行の本文は *quam matrem fratres ex patruo parere* とするのが最
 善である。(2) この行が描いている状況は、アウフィッレーナの母がアウフィッレーナの

*28 McCarren (ed.), p. 104

*29 34 番 7 行 *mater* は 5 行目で呼びかけられているディアーナ Latonia の母ラートーナ；62 番 61 行 *matre* と
 63 行 *matri* は 59 行目で呼びかけられている *uirgo* の母；64 番 23 行 *matrum* は同じ行で呼びかけられて
 いる *heroes, deum genus* の母（ただし、この *mater* の複数属格自体が 23b 行の呼格 *progenies* を限定するも
 の）。これらに加えて、88 番 1 行 *matre* は一般論として述べられているが、事実上 1 行目で呼びかけられ
 ているゲッリウス Gelli の母を指しているとみられるし、90 番 1 行 *matris(que)* と 3 行 *matre* も詩の誹謗
 対象であるゲッリウスの母を指しているが、この 90 番の中にはゲッリウスへの呼びかけやゲッリウスを
 2 人称で扱う動詞、代名詞等が用いられていない。なお、9 番 4 行 *matrem* も 1 行目で呼びかけられてい
 るウェーラーニウス Verani の母だが、3 行目 *tuos penates* の *tuos* が *matrem* も事実上限定していると考え
 られるため除外した。

おじと交わってアウフィッレーナのきょうだいを産んだというものの可能性がある。

以上 2 つの結論のうち、後者から導かれる今後の展望についても、ここで少々述べておきたい。カトウツルス III 番の解釈が難しい理由は、そもそも曖昧な表現が用いられているためである。今回私が提案した解釈にしても、読者がアウフィッレーナの母の醜聞を先に知っているのであれば、容易に到達できるものではないかもしれない。詩によって他者を誹謗するとき、カトウツルスは同時代の読者の知識をどこまで前提していたのだろうか。また、私の解釈では誹謗したい相手本人の行動ではなく、その肉親（母とおじ）の行動を攻撃しているということになる。これは効果的なことだったのだろうか。III 番の解釈をめぐる議論は、カトウツルス誹謗詩全般における社会的背景と、その中での詩人の戦略の検討へとつながることとなるだろう*30。さらに、私や de Grummond の解釈を採る場合、カトウツルスは近親相姦ではなく、（直接の血縁はないが）姻戚関係がある者との不倫を特に悪いものとして攻撃しているということになる。当時のローマ社会の性的モラルを考えるうえでも、この詩をめぐる議論は 1 つの材料を与えてくれることだろう*31。

（東京大学）

参考文献

CIL = *Corpus Inscriptionum Latinarum*

CLE = F. Buecheler (ed.), *Carmina Latina Epigraphica*, Leipzig 1895–1926

*OLD*² = P. G. W. Glare (ed.), *Oxford Latin Dictionary*², Oxford 2012

TbLL = *Thesaurus Linguae Latinae*

*30 表現の曖昧さによって、具体的な事実関係を把握しづらい誹謗的な詩として他に挙げるべきは 67 番である。すでに述べた通りこの詩は、私の解釈における III 番と同様に、家のスキャンダルを暴露するものであることに注意されたい。誹謗したい相手本人ではなく、それに近い者を攻撃する詩としては 41, 43 番がある。この 2 篇は Ameana (?) という女性を対象とした誹謗詩だが、実際にはその情夫であるマームツラ（メントウラ）への攻撃（29, 57, 94, 105, 114, 115 番）の一環であると考えられている。そして、マームツラ（メントウラ）に庇護を与えるカエサル（29, 57 番）こそが、最終的な攻撃目標であるともいえる。では、アウフィッレーナ詩（少なくとも、あからさまに攻撃的な 110, 111 番）の誹謗対象は、本当にアウフィッレーナという女性なのだろうか。ローマ社会においてカトウツルスと直接的に張りあう男性が、アウフィッレーナの裏に本当の攻撃目標として存在するのではないだろうか。こうした想像は、III 番がアウフィッレーナ自身の行動ではなく、その家のスキャンダルを暴露するものではないかという私の仮説に、より実質的な意味をもたせるものであると考えている。

*31 本稿の作成にあたり、2 名の匿名の査読者から有益な助言を賜った。また、東京大学西洋古典学研究室博士課程の同僚である本田拓也氏には校正に協力して頂いた。この場を借りて感謝申し上げる。それでもなお残る誤りや不備は、むろん全て筆者の責任である。

- Bardon, H. (ed.), *Catulli Veronensis Carmina*, Stuttgart 1973
- Bush, A. C., 'A Further Note on Catullus III', *CW* 65 (1971-2), pp. 148-51
- Cornish, F. W., Postgate, J. P., and Mackail, J. W. (trs.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris*, London 1913
- Cornish, F. W., Postgate, J. P., and Mackail, J. W. (trs.), Goold, G. P. (rev.), *Catullus Tibullus Pervigilium Veneris*², Cambridge, Mass. 1988
- de Grummond, W., 'A Note on Catullus III', *CW* 64 (1970-1), pp. 120-1
- Eisenhut, W. (ed.), *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig 1983
- Ellis, R., *A Commentary on Catullus*², Oxford 1889
- (ed.), *Catulli Veronensis Liber*², Oxford 1878
- (ed.), *Catulli Carmina*, Oxford 1904
- Forsyth, P. Y., 'Quintius and Aufillena in Catullus', *CW* 74 (1980-1), pp. 220-3
- Friedrich, G., *Catulli Veronensis Liber*, Leipzig & Berlin 1908
- Goold, G. P., *Catullus*, London 1983
- Kroll, W., *Catull*⁵, Stuttgart 1968
- Lafaye, G., *Catulle Poésies*, Paris 1922
- McCarren, V. P. (ed.), *A Critical Concordance to Catullus*, Leiden 1977
- Merrill, E. T., *Catullus*, Cambridge, Mass. 1893
- Mynors, R. A. B. (ed.), *C. Valerii Catulli Carmina*, Oxford 1958
- Oksala, P., *Adnotationes Criticae ad Catulli Carmina*, Helsinki 1965
- Quinn, K., *Catullus The Poems*², London 1973
- Rankin, H. D., 'Catullus and Incest', *Erano*s 74 (1976), pp. 113-21
- Schuster, M. (ed.), *Catulli Veronensis Liber*², Leipzig 1954
- Skinner, M. B., *Catullus in Verona*, Columbus 2003
- 'A Review of Scholarship on Catullus 1985-2015', *Lustrum* 57 (2015), pp. 91-360
- Syndikus, H. P., *Catull Eine Interpretation Dritter Teil Die Epigramme (69-116)*, Darmstadt 1987
- Thomson, D. F. S., *Catullus*, Toronto 1997
- Trappes-Lomax, J. M., *Catullus A Textual Reappraisal*, Swansea 2007
- Watson, L., 'Aufillena and her uncle: Catullus III', *LCM* 10 (1985), p. 80
- Wiman, G., 'Ad Catulli textum critica', *Erano*s 61 (1963), pp. 29-37
- Zicari, M., 'Schedae Sex', *Philologus* 102 (1958), pp. 154-7

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS

THE UNIVERSITY OF CHICAGO PRESS
530 North Dearborn Street
Chicago, Illinois 60610-5708
U.S.A. and Canada
Telephone: (773) 835-3211
Fax: (773) 835-5111

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

For a complete list of titles published by the University of Chicago Press, please contact your bookseller or write to the University of Chicago Press, 530 North Dearborn Street, Chicago, Illinois 60610-5708, U.S.A. and Canada.

フィロロギカ——^{こてんぶんけんがく}古典文献学のために 第 XII 号

2017 年（平成 29 年）6 月 30 日発行

編集・発行 フィロロギカ編集委員会（古典文献学研究会）
〒192-0397 東京都八王子市南大沢 1-1
首都大学東京人文科学研究科 大芝芳弘研究室
Tel: 042-677-2069（直）
Mail: philologica@hotmail.co.jp

印刷・製本 株式会社インフォテック
頒価 2000 円

ISSN 1884-1562

Philologica XII 2017

Societas Philologorum

(Secretary) Yasunori KASAI

Editorial Board:

(Hon.) Masaaki KUBO, (Hon.) Elizabeth CRAIK, (Hon.) Makoto ANZAI,
Yoshihiro OSHIBA, Hiroyuki TAKAHASHI, Yoshinori SANO,
Noburu NOTOMI, Taro HYUGA, Martin CIESKO

Contents

Crito's Words as a Friend: Platonis *Crito* 43 B3–6 I
Makoto ANZAI

Horatius, *Carm.* 2.16 Otium divos 15
Yoshihiro OSHIBA

Shorter Notes

Priam's Attempt at Persuasion: *Iliad* 22.56–76 47
Tomoharu HIRANO

Socrates' Refutation of Polemarchus in Plato's *Politeia* I.334 D–E 53
Noburu NOTOMI

quam matrem fratres ex patruo ... (Cat. 111.4) 63
Taro TOMOI